ナミビア紀行

川崎 光洋

第一級の男のロマン

「ときめき」編集長
小倉　久

ナミビア紀行はアフリカ大陸南西部に位置するナミブ沙漠に魅せられた男の第一級の紀行文である。ナミビアは日本人にはほとんど馴染みのない国であるが、著者は「宇宙から見た地球」という写真集に掲載された一枚の写真に誘われ、ほぼ丸一日をかけてはるばる日本の大使館さえ置かれていないかの地を訪ねる。

二週間に及ぶ同行者との二人旅は、男のロマンを実現しただけでなく、広大にしてさまざまな表情を見せる沙漠の雄大な風景に身を置き、自らの存在価値、そして自然との関係性にまで深く思いを馳せる。

「世界一美しい」といわれるナミブ沙漠との衝撃的な出会いからはじまり、当地に別れを告げるまでを、知的でユーモラスな文体が読者を牽引する。旅のきっかけが語られたプロローグからして、「定着液に浸した印画紙から徐々に風景が姿を現すように」と、まだ見ぬナミブ沙漠への期待と不安を募らせる様子を語り、まるで恋人とのはじめてのデートに望む心境にも似た、胸が締め付けられるような憧れの存在、ナミビアへの思いを著者は切々と述べる。その先の展開へと期待を持たせる自在な文章テクニックもなかなかのものだが、それ以上に著者の熱き熱情があふれ出た作品としてすばらしい魅力を感じる。

大学の同級生で今回の旅の同行者であり、茨城弁丸出しのマシコ君がなんともいえぬ存在感をかもし出している。著者との丁々発止のやり取りが実に楽しく、かつ教養の深さがにじみ出ていて、この作品に単なる物見遊山ではない重厚な味わいをしっかりと添えている。

この旅の目的は三つあって、最初はナミビア北部、アンゴラとの国境地帯に住む少数民族のヒンバ族の集落を尋ねること。ここではいまだに半裸での生活を守り通している彼らに、自らの価値観を強引に押し付ける西洋文明に対する無言の抵抗を嗅ぎ取って、強い共感を覚える。

二つ目がエトーシャ動物公園への訪問で、山梨県の四倍ほどもある自然公園へ貴重な水を求めてやってくる野生動物たちの姿に触れ、人類の置かれている疎外感、孤独感に打ちひしがれる。「大きな脳はヒトを他の動物から遥かに遠い地点まで連れてきてしまった。今ヒトが文明の中でしか生きられないということは、ヒトは自らを文明の奴隷にしてしまったのではないだろうか」という深い

洞察には、著者の世界観、自然観の鋭さが見事に凝縮されている。

そして最後にして最大の目的がナミブ沙漠への旅である。ナミビア大西洋岸を南北千六百キロに渡って細長く伸びるナミブ沙漠は、中緯度高圧帯という雨が降りにくい地帯に位置している。地球で最も古い沙漠といわれ、ここで見られる動植物は、八千万年という気の遠くなるような長い時間をかけて、この厳しい環境に適応し、子孫を残せるように進化を遂げてきた。

著者は「奇想天外」という別称を持つ樹齢千五百年のウェルウィッチアという樹木に感動したり、頼みの車が沙漠の中でスタックし、ドイツ人のツアーに助けられて命拾いをしたりと、忘れられない体験の数々を積み重ねていく。

そしてついに憧れの「世界一美しい沙漠」、「世界一美しい砂丘」に対面する。紅茶色の砂丘の頂上に立った著者は、「私の目に自然と涙がにじんできた。詩人でもない私がもはやいかなる言葉を費やそうと、この眺めを表現しきることは出来ない」とまさに感極まるのだが、このクライマックスは圧巻としか言いようがない。

還暦を目前にして、子供の頃から持ち続けた沙漠に対する憧憬を実現させるという、みなぎるばかりの好奇心、冒険心には私も大いに刺激された。そして何より読み応えを感じさせるのが、全編を通じて披瀝されている深い教養に根ざした記述の数々である。それらは古今東西の詩人や小説家、宗教家、探検家、科学者にまで及び、そうした先達たちの含蓄に溢れる言葉を縦横に駆使することによって、本作品を単なる物見遊山的な薄っぺらな紀行とは格段に差のある、著者自身のしっかりとした世界観、自然観に貫かれた重厚な味わいを持つ紀行へと昇華させることに見事に成功している。

さらに文章では伝えきれない、否、文章に加えてかの地を視覚的に訴える写真が添えられることで、紀行文としての魅力がさらに高まったといえる。この写真も文章に勝るとも劣らないすばらしいできで、きっと読者の心を捉えるはずだ。ひとりでも多くの読者に、著者を虜にしたナミビアの魅力が伝わることを心から願うものである。

オプヲ
エトーシャ国立公園
Etosha National Park
トワイフェルフォンテイン
オコンジマロッジ
ケープ・クロス
スワコプムント
ウィンドフック
ウォルビスベイ
ナミブ・ノークルド国立公園
ソーサスフレイ
Ondjiva
Oshakati
Tsumeb
WINDHOEK
Walvis Bay
Swakopmund
Otjiwarongo
Otjikondo
Grootfontein
Mariental
Rehoboth
Usakos
Karibib
Omaruru
Okahandja
Kalkrand
Maltahöhe
Gibeon
Namib Rand Nature Res.
Namib Naukluft Park
National West Coast Tourist Recreation Area

ナミビア紀行

恋する旅、ナミビア

旅は恋に似ている。まだ見ぬ土地への期待と不安。それは初めてのデートに臨む時の心境に似ているかもしれない。何日も前から会う場所や時間を慎重に選択し、服装に気を配り、最初に言い出す言葉さえ想像してみる。五感は鋭くなり、少し臆病にもなる。そして、夢の中の女性がいつも現実の女性より美しいように、まだ見ぬ土地はなにより魅惑的で、胸が締め付けられるような憧れの存在として立ち現れる。

「ふらんすへ行きたしと思えども、ふらんすはあまりに遠し」と詠った詩人・萩原朔太郎は、東京駅の切符売り場で「どちらまで」と問われ、熱病のように「パリまで一枚」とつぶやいたそうだ。ジャズと映画とミステリー批評の名手・植草甚一は、一度も訪れたことのないニューヨーク・マンハッタンの詳細な地図をそらで描けたという。

さて、今回のわたしの恋人はナミビア。

「ナ・ミ・ビ・ア」

なんと美しい輝きに満ちた響きなのだろうか。なんと哀しく切ない響きなのだろうか。その言葉を口にしただけでわたしの胸は高鳴り、呼吸は荒くなる。

何をそんなに入れ込んでいるのかと、いぶかるかもしれないが、実はナミビアには世界一美しい沙漠があるということを、わたしは突如知ってしまったのだ。その場所はなにを隠そう、我が家でわたしが一番落ち着ける場所、便所である。我が家の神聖なる便所はわたしの書斎を兼ねている。小さな造り付けの書架もある。わたしにとって便所の中の読書は精神の安定を図る上で日本酒以上に不可欠なのである。

読書は排泄で失ったものを知識という形で補填するという、わたしにとってこころのバランスを取り戻すための行為なのだ。法然上人だって排泄の喪失感を克服するため、厠で必死に念仏を唱えたという。まして

や凡夫のわたしにおいておやである。
そうは言っても、便秘のときでもなければ、一回の行為中に長編小説はとても読みきれない。厠書架の蔵書は、短時間でしかも拾い読みが可能な理科年表や辞書、俳句歳時記、囲碁定石集、画集などが多い。
『宇宙から見た地球』という人工衛星から撮った地球の写真集が厠書架に加わったのは昨年の夏の終わりだった。この写真集には、地球の自然地形を美しく画像処理したカラー写真が多数掲載されている。
運命のときは、便座が尻に冷たく感じられる二〇〇四年の晩秋の頃だった。何気なく写真集のページを繰っていたわたしの眼は、紅茶色や銀色の縞模様が南北に規則正しく何本も走る一枚の写真に釘付けになったのである。

これがわたしとナミブ沙漠の衝撃的な出会いだった。規則的に波打つ縞模様は、砂丘の尾根と谷が作り出すものであった。岩石が風化し、細かく砕け磨かれた砂は、何万年ものあいだ常に一定の方向から吹く風によって運ばれ、堆積し、線状の砂丘を作り出す。ナミブ沙漠には紅茶色の砂丘が連なっているのだ、そう思うとわたしの頭の中にベートーベンの交響曲第五番の冒頭の部分が突如鳴り始めたのであった。運命がわたしの扉をたたいたのだ。
そして、立ち昇るかげろうのなかから、ひとりの男が揺らめきながら立ち現れるように、はたまた、定着液に浸した印画紙から徐々に風景が姿を現すかのように、わたしのこころの中にナミブ沙漠の砂丘のたおやかな稜線がゆらゆらと姿を現し始めたのである。

わたしは写真集を手にしたまま、拭くものも拭かず、パンツも下ろしたまま、モノの怪に取り付かれたようにヨロヨロと便所を抜け出たのであった。

沙漠は生きている

沙漠には、あるいは沙漠的なものには、いつもなにかしらいいしれぬ魅力がある。沙漠がなぜ好きかと問われて「アラビアのロレンス」は即座に「美しいから」と答えたそうだ。そう、沙漠は美しいのだ。その中でもナミブ沙漠は世界一美しいといわれるのだから、どんなに美しいのか、想像するだけでも恍惚のブルースではないか。

沙漠はなぜ美しいのか、なぜ魅力的なのか、それはおいおい書くことにして、まずは半世紀前に遡るわたしと沙漠との出会いから書き起こさなければならない。それは忘れもしない、小学校へ入学した年の春、まさに半世紀前の一九五五年のことであった。

わたしは父に連れられ、甲府の映画館で『沙漠は生きている』という映画を見た。アメリカの沙漠に棲む生物の奇妙な生態を追ったそのディズニーのドキュメンタリー映画こそが、幼いわたしのこころに今でも残る鮮烈な沙漠への渇望を刻印することになったのだった。

青い空に消えるまで果てしなく続く砂と岩のうねり、強烈な日射と不気味な竜巻、地平線に沈む真っ赤な太陽。沙漠のスペクタクルは、周囲を山に囲まれ、むせ返るような緑に埋まる甲府盆地の風景とはあまりにも異質だった。

ここは違う世界があるということ、そしてここから外の世界へいつの日にか出て行かねばならないということを、わたしはその時おぼろげながら初めて意識したように思う。

広がりは空間だけではない。日本の四季は植物の死と再生をもたらし、時間は輪廻する。それはいわば閉じた時間だ。しかし沙漠はあまりに無機的であるがゆえに、時間はどこまでも直線的に流れ、広がるイメージを想起させる。沙漠の空虚さが永遠の時間の流れを際立たせると言ってもいい。無機的で空虚で茫漠とした沙漠がなぜわたしをひきつけたか、そんなことが分かるはずもないあの幼い時代から半世紀が過ぎた。いまならその答は明確に言える。

息苦しかったのだ。狭い土地に必死にしがみつき、汗して働く父の真面目さ、真綿で首を絞めるような母の愛情、そしてなによりも体内のドロリとした血液循環をいつも意識せざるを得なかった心臓壁欠損症というわたしの心臓の病気。

そんなものたちの最も遠い場所にあるもの、広がるもの、乾いたものとして、沙漠はわたしのこころの中に忍び込んだのだ。わたしにとって自由とは、沙漠の地平線のような広がりのイメージに繋がっている。いつの日か沙漠を放浪したい、その思いは自由への希求と同じ意味を持っていたのだった。

わたしと同年代の作家、村上春樹も小学生時代にこの映画を見て、強烈な印象を受けたことは間違いない。『国境の南太陽の西』の中で、主人公の「僕」と友人との間でこんな会話がある。

「なあ小学校の頃にウォルト・ディズニーの『沙漠は生きている』っていう映画見たことあるだろう？」

「あるよ」と僕は言った。

「あれと同じだよ。この世界はあれと同じなんだよ。雨が降れば花が咲くし、雨が降らなければそれが枯れるんだ。虫はトカゲに食べられるし、トカゲは鳥に食べられる。（中略）みんないろんな生き方をする。いろんな死に方をする。でもそれはたいしたことじゃないんだ。あとには沙漠だけが残るんだ。本当に生きているのは沙漠だけなんだ」

わたしも村上も沙漠への秘めたる思いを、タクラマカン沙漠を横断したスウェン・ヘディンの紀行文やスコットとアムンゼンの南極点争奪物語などによって埋め合わせながら、幼い時代の無意識に感じる息苦しさに耐えてゆくことになる。

そして青年はもとより沙漠を目指す。

「僕は二十歳だった。それが人生で最も美しい時期だなんて誰にも言わせまい」という美しい書き出しで始まるポール・ニザンの『アデン・アラビア』は沙漠の町アデンを背景にしなければ生まれなかっただろう。『地獄の季節』を著した天才詩人ランボーもそうだ。二十代で詩を捨て、自由を求めて沙漠に引き寄せられるように旅に出たランボー。

「一片の草も、一握りの土も、一滴の清水もないのです。アデンは死火山の火口の底が海の砂でふさがれた所です。・・・我々は焦熱地獄のこの穴の底で焼き立てられるのです」と家族に書き送ったのだが、彼はこの地獄のような過酷な町をこよなく愛したのだった。

自分の生きている社会の欺瞞や偽善に気づき、そこで生きていくことを憎悪する青年は沙漠を目指す。沙漠では、灼熱の太陽の下、飾りも覆

いも剥されて、善も悪もあらゆることが明確になるからだ。しかしわたしにとって沙漠は遠かった。わたしの青春の時間は、ポール・ニザンやアルチュール・ランボーを読みふけりながらも真夜中を中心にめぐる。北仙台浅草街「とんちゃんや」。

暗くしめっぽい路地の突き当たりに赤提灯がぽつんと光っていた。油で黒光りするカウンターや裸電球。煤けた高倉健のポスターを背にして片腕のない「おばんちゃん」がいた。大学がまだ帝大と呼ばれていた時代

の学生に恋をし、破れ、鉄道自殺の果てに片腕を失ったと信じられていた。梅割り焼酎が一杯三十円。三杯以上いくら呑んでも勘定は同じだった。酒に酔う前に青春という巨大な醗酵体の中でみんなすでに酔っていた。高揚した沙漠への探検の夢物語を一晩中語り合っても飽きることはなかった。

「俺は行くぞ。沙漠へ行くぞ」といつも叫んでいたが、寮の万年蒲団に身を横たえると、暗い時代の不吉な予感が一度に襲ってきた。自らが吐

いた吐しゃ物の中で眼が覚める朝はもっと辛かった。沙漠への夢は封印されたまま、青春は過ぎ去ってゆく。しかし王位を失ったものが最も激しく王位を渇望するように、あるいはエデンを追われたものこそがエデンの地を懐かしむように、断念させられた夢は、ねじ伏せられた渇望は、なおいっそう大きくなって再びわたしの前に立ち現れることになる。

しかしいつまでも回想にふけっているときではない。わたしのエデンの地、ナミビアへ、ナミブ沙漠へ、いまや出発することにしようではないか。

ナミビアは遠い

フランスは近くなったけれども、ナミビアは依然として遠い。ナミビ

アへの旅の実現には、あの厠書架事件からほぼ一年を要することになる。

同行することになったのは大学時代の同級生であるマシコ君。茨城県の山中、袋田の滝近くで生まれた彼は大学卒業後、実家に程遠からぬ土浦に工場を持つ大手金属材料メーカーに就職した。このため、彼は語尾が尻上がりの茨城弁が抜ける間がなく、その上、大学の寮時代にしみこんだ仙台弁の「だっちゃ」言葉も混じる、誠に純にして朴な男なのである。

マシコ君は三十数年、技術屋として勤めた会社を前年あっさりと定年前退職し、同級会の名簿の職業欄には「悠々自適」と書き込んで、世界漫遊の旅の準備を早々と整えていたのである。春の同級会が開催された折、同行者を募ったら即座に彼が名乗り出たのだった。

二人とも二週間で消費するであろう日本酒を大型トランクにしっかり詰め込み、成田空港からナミビアに向けて飛び立ったのは、二〇〇五年の九月一日のことであった。

しかし、ナミビアと聞いて、どこにあるどんな国か即座に答えられる日本人は、あまりいないのではないだろうか。ナミビアはアフリカ大陸の南西部にあり、一九九〇年に独立したばかりの新しい国なのである。

日本との縁もまだ浅く、お互いに大使館さえ設置していない（南アフリカ共和国の日本大使館がナミビア大使館を兼ねている）。

日本からの直行便もない。乗り継ぎを工夫して一番早く行ける方法は、成田から香港、ヨハネスブルクを経由、首都のウィントフックまでたどり着くルートだが、それでも三十時間近くを要する。

成田空港で全日空の香港行きにチェックインするときだった。チェックインカウンターのかわいいお嬢さ

んは、我々のチケットを見て「お荷物は南アフリカまでダイレクトにお送りしてもよろしいでしょうか」と聞いてきた。怪訝な顔をしているわたしを見て「お乗換えのヨハネスブルクでお引取りになりますか」と再質問。

「あのぉ〜、ナミビアへ行くんですが・・。荷物はダイレクトにそこまで送れないのですか」とわたし。

一瞬顔を赤らめた全日空のお嬢さん、一心不乱にコンピュータのキーボードを叩いた後、「失礼しました。ウィントフックですからナミビアですよね」

ことほど左様にナミビアは日本人にとって縁が薄いのである。かくいうわたしだって、厠書架事件以前はナミビアについて如何程の知識を持っていたか疑わしい。しかしこの一年というもの、ナミビアに関するあらゆる情報を収集、寝ても覚めてもナミビア研究に励んできた。

今やナムアミダブツの念仏を聞いてもナミビアを思い起こす始末なのだ。その結果、ナミビアにはかの憧れのナミブ沙漠ばかりでなく、わたしの興味をひきつけるものが他にもいくつか存在することが明らかになった。

そのひとつはヒンバ族である。ナミビア北部、アンゴラとの国境地帯に住む少数民族なのだが、近代西洋文明の受け入れをかたくなに拒否し、伝統的な遊牧生活を送っているというではないか。さらにヒンバ族の女性はアフリカ、いや世界で一番美しいといわれているのを知れば、ここを訪問しない手はない。

もうひとつは野生動物の宝庫であるエトーシャ動物公園。公園といってもその面積は山梨県の四倍近くもある。雨季には北のアンゴラから大量の水が流れ込み、琵琶湖ほどもある大きな水溜りができるのだが、乾季のいま、水溜りはほとんど干上がり、所々に残った小さな水溜りに、たくさんの動物が渇きを癒しに集まってくるという。

ナミブ沙漠と並んでヒンバ族とエトーシャ動物公園、この三つが今回のナミビアの旅の基本テーマとなったのである。

風の吹く町

ナミビアの主都ウィントフックにあるホセオ・クタコ国際空港に着いたのは、成田を飛び立った翌日、九月二日の午後一時（夏時間）、日本と

の時差は六時間である。国際空港といっても日本の地方空港程度の規模で、入国審査と税関を難なく通り抜ける。

着陸寸前に飛行機の窓から眺めた空港の周辺は、草原の中に背の低い木がまばらに生える典型的なサバンナである。空港施設を出たとたん、初夏を思わせるさわやかな風と雲ひとつない青空が我々を出迎えてくれた。ウィントフックの名前の意味は、風の吹く町なのである。

飛行場から町の中心までは約四十キロ離れている。飛行機の到着に合わせてリムジンバスが、都心まで運行されているが、我々が空港内で両替をしたり、帰りの飛行機の予約再確認をしたりしているうちに、すでに出発してしまった。次の便は飛行機が到着する二時間後だという。リムジンバスの外に公共交通機関はない。

うろうろしている我々を見つけて、早速白タクの運ちゃんが声をかけてきた。どこの国の国際空港でもそうなのだが、外国人旅行客はもぐりの白タクにとって格好のカモなのである。案の定、町の中心まで二百ナミビアドル（一ナミビアドルは約十八円）とバスの倍の値段を吹っ掛けてくる。こちらもそれは承知の上と値切るのだが、二時間じっと待つ他に手がないことを見抜いている運ちゃんは、なかなか値引きしない。

言い値ではこちらの沽券にかかわるので、一割引で手を打つことにした。白タクは、茶色く立ち枯れた草原の中の一本道を猛スピードでひた走り、三十分ほどで町の中心部の宿まで我々を運んでくれた。

「カワサキ君、波濤萬里、ついにやって来たっちゃあ」

最初の宿、ペンション・ステイナーに荷物を解いたマシコ君は、上気した面持ちで早速、紙パックの酒「日

本盛・上選」を持ち出す。
「マシコ君、飛行機だから波濤萬里はおかしくないかい」
「ふむ、それはどうでもよかっぺ、まずはこれからの旅の前途を祝して乾杯だ。古人曰く、西の方、陽関を出ずれば君より他に友はなからん。仲良くすっぺ」
　長旅だったが、飛行機の中では航空運賃分に迫る勢いで大量のタダ酒を堪能し、さらに空席が目立つのを幸いに座席三つ分を占領して寝てしまったおかげでほとんど疲れはない。
　これからの旅について語り合いながら飲み交わすのもまた悪くない。わたしもマシコ君も出発直前まで雑用に追われていたため、今回の旅について相談らしいものはほとんどできなかったのだ。
　かくしてナミビアの初日は「日本盛」とともに更けていったのである。

準備万端

　ウィントフックはドイツ植民地時代の建物が残る近代的な都市である。町の中心部の商店街は、世界的なブランド品を扱う商店、金融機関、レストランが軒を並べている。行き交う黒人やカラード（混血）の姿を除けば、ヨーロッパの町にいるのと同じだ。商業ビルもまだ新しいものが多く、甲府の中心町より小奇麗でセンスも良い。
「今日も快晴だっちゃ」
　マシコ君はガラス張りのビルに反射する青空に目を細めながら、背伸びをする。ウィントフックの年間降水量は三百六十ミリ、それも一月から三月の間に集中するため、九月に

雨が降ることは奇跡に近い。ウィントフックは一年三百六十日が晴天なのだ。
　昨日は陽の高いうちから酒盛りが始まり、時差ぼけなどどこ吹く風と

ばかりに、早々と寝てしまった。当初の予定では到着初日の午後は、これからの旅に必要なものを調達する時間に当てていたのだ。ナミビア周遊に出発する前にレンタカーを借りたり、食料品や生活必需品などを調達したりしなければならない。この街を一歩出れば、無人の荒野を延々と旅しなければならないのだ。

日本の二倍もある国土面積の中に二百万の人口しかないナミビアは、世界有数の人口密度が低い国であり、地方へ行けば町らしきものは数百キロにひとつあるかないかなのである。まずはレンタカーを借りねばならない。公共交通機関というものがほとんどないこの国を縦横無尽に走り回るためには車は不可欠の道具なのだ。

世界中にネットワークを持つハーツの営業所では、ドイツ訛りの英語を話す白人のお兄さんが颯爽と現れた。借りるのはアルメラというニッサン製の日本車。レンタル料金は一日三百二十ナミビアドルと日本なみの値段である。その上、保険が高い。衝突保険、タイヤパンク保険、盗難保険などを申し込むと車のレンタル料と同じ位になってしまう。砂嵐保険というものもあった。

内容を聞いたら、沙漠で猛烈な砂嵐に会うと、砂粒でガラスに傷がつき、曇りガラスのようになってしまうのだそうだ。九月には砂嵐は少ないと聞いたので、さすがにこれは遠慮した。

Ａ４一枚でナミビア全土をカバーするきわめて簡単な道路地図を渡され、「グッドラック」の声に送られてマシコ君が運転するニッサンアルメラは勇躍、町に乗り出したのであった。

「こんな地図で役に立つのかな」とマシコ君は不審そうだ。Ａ４版一枚の日本地図を渡されて、東京都内を走れといわれたら途方にくれるが、ナミビアで車が走れる道路はいくつもない。目指す町の方向さえ分かれば道はほとんど一本道だし迷うことはないのである。

たとえば日本で、車が走れる道が高速道路以外にないといった状況を考えれば分かりやすいだろう。車の走行車線が日本と同じ左ということも好都合である。

車の次は水をはじめとする食料品と飛行機に持ち込めなかったキャンピングガスの調達である。次の宿泊地まで五百キロ以上も移動が必要な場合もあり、いざというときには野宿も覚悟しなければならない。宿泊

地と宿泊地の間はまさに何もない。コンビニやドライブインがいたるところにある日本とはわけが違うのである。人家さえあるかどうか疑わしい。また、乾季のナミビアでは地上に溜まったり、流れたりする水はまったくないのである。

食料品や日用雑貨の類は大きなスーパーマーケットがあり、品揃えも豊富で簡単に手に入る。物価は他のアフリカ諸国に比べておそらくかなり高い。食料品の値段は日本の半分程度だろうが、ナミビア人の所得水準から見ればかなりの物価高に間違いない。缶ビールが日本円で九十円、五リットル入りの水が百五十円ほどであった。輸入品であるキャンピングガスは日本で四百円程度のものが九百円と倍以上の値段がした。

「ビールが安いのはうれしいね。空気が乾いているから、喉が渇くだろうし、これでこころおきなく呑めるね、マシコ君」

「旧ドイツ領だったせいか、味もなかなかだっぺ」

「ドイツの影響が残っているなら、ソーセージがうまいに違いない。ビールのつまみにソーセージを買っておくべきだな」

土曜日の午前中とあって、地元の買い物客も朝早くから繰り出し、店内は日本のスーパーマーケットをしのぐ活気である。日本にいる時は食品売り場なぞあまり覗いたことがない中年の男二人が、広い店内を右往左往して、やっと目的のものを取り揃えたのは十一時近かった。

今日はウィントフックから北に二百キロほど離れたオコンジマというところにあるチータのサンクチャリまで行く予定である。たいした距離ではないが、運転初日なので腕慣らしを兼ねて、交替で運転してゆく。

「準備万端。発車オーライだ。マシコ君、頼むよ。胸の中でファンファーレが鳴っている」

「で、どっちへ行くべ」

「とりあえず北に向かえばなんとかなる」

二人ともこころはずませ、胸をときめかせ、ナミビア一周の旅に出発

したのであった。

国道B1号線北上

ウィントフックを見下ろす峠で車を停めた。町は山の谷間に、懐に抱かれるようにひっそりと佇んでいる。町の中心部には、いくつか高いビルも散見されるが、一国の首都にしては小さな街だ。おそらく日本の山国の地方都市なみの規模だろう。この町を出れば、大西洋岸のスワコプムントという町まで、文明の香りがする町はない。いよいよナミビアの荒野へ乗り出すのだという緊張感で身が引き締まる。

町を抜けると地平線まで続くサバンナと、その真ん中を定規で線を引いたような道路が延々と続く。日本では町中を抜けても、街道沿いには人家や小さな集落が点々と現れるが、ナミビアでは町と町の間はただ草の原が広がっているだけである。

大きく波打つような起伏はあるが、平坦な荒野がどこまでも広がっている。乾季とあって草はすべて枯れ、

日本の秋のような気配だ。ここは南半球なので、九月は春の終わりから初夏にあたる。ナミビアでは十二月ごろから雨が降り始め三月ごろまでが雨季である。雨季といっても年間降雨量が五百ミリ程度で、そのわずかな雨は気温が高く蒸発量の多い夏場に偏るため、乾燥はいっそう進む。

「麦秋の北海道のような景色だっちゃ」とマシコ君はつぶやく。

「これがみんな麦なら豊かだろうけどね」

「土地は広くて平らだし、その上、お天道様の恵みは申し分ない。これで水がなんとかなればなあ」

豊葦原瑞穂の国からやってきただけに、この大平原が農地として開発されず、放置されていることを二人ともなんともやるせない気持ちで眺めるのであった。

それというのも、ナミビアは日本の二倍の国土を持ちながら、たった二百万人の国民の食糧を自給できない。ナミビアは牛肉以外のすべての食物について純輸入国なのである。主食である穀物の六十パーセントを南アフリカから輸入しているのを始め、乳製品の二十五パーセント、その他食料の九十パーセントを輸入に頼っている。

ナミビアの農産物の約半分を占めるのは牛肉であるが、一部の白人を除いてナミビア人の口に入ることはまずない。牛肉はぜいたく品であり、その多くは輸出される。あり余るほどの食べ物に囲まれ、飽食気味の先進諸国が、飢えているアフリカの国から食糧を輸入するというおかしな構図がここにある。

環境やアフリカ問題に詳しいジャーナリスト石弘之氏の「いま我々がアフリカに何をできるかを考える前に、何をしないかを考えるべきである」という逆説的発言の意味がここにあるのではないだろうか。

農業が牛肉の生産に偏っているのも風土のせいばかりはない。人口のわずか数パーセントに過ぎない白人が全国土の六割を、しかも農業に適した中央部や南部の比較的肥沃な土地をほとんど占有していることにも原因がある。彼らは輸出が可能で金

になるもの以外は生産しないから、どうしてもモノカルチャー的な生産構造に陥ってしまうのである。

ウィントフックからまっすぐ北に伸びるB1国道の両側には個人所有の土地であることを示す境界柵が延々と続いている。耕作をした痕もないし、とても個人の所有主がいる農地のようには見えない。最初はマシコ君もわたしも、野生動物が道路に飛びだしてくるのを防ぐための柵だと考えていた。しかし杭と杭の間に張ってある針金の間隔は、動物が容易に潜り抜けられるほどの幅があって、この考えはすぐに没になった。

「マシコ君、この国では農地解放がまだおこなわれていないようだよ」

「左派よりの政策を掲げる南西アフリカ人民機構が独立以来ずっと政権を握っているんだっぺ。なぜ抜本的な土地の再配分やらんのかな」

「いまだに経済を白人層と南アフリカに握られているんだし、あまり強権的なこともできないんだろう」

「こんななんにも利用していないような土地に杭を打って、俺の土地だと囲い込む品性がけしからんな」

かつて全共闘のシンパだったマシコ君は運転しながらも語気を強める。南アフリカ植民地時代と同じような土地所有関係がいつまでも続くとは考えられない。アフリカの優等生といわれるほど政情が安定しているナミビアなのだが、土地を持つことができない多くの非白人の不満は、いつの日にか爆発するのではないだろうか。道路に沿って際限もなく続く柵を車窓から眺めていると、ナミビアの広々とした大地もこころなしかもの悲しく見えてくるのであった。

今日の宿泊場所オコンジマロッジはウィントフックから二百キロほど国道B1を北上したところにある。順調に走れば二時間ほどで到着する距離であるが、オカハンジャという

彫刻で有名な町で木彫りのマスクを買ったり、昼食を摂ったりしていて、ロッジの看板が見えたのはそろそろ日が西に傾きかけた頃であった。

やれやれ、やっとたどり着いたかと、「オコンジマロッジは左折」の看板の指示通り未舗装の細い道に車を乗り入れたのだが、なんと進もうとする道路の先は鉄扉で固く閉ざされ、厳重な錠前までかけてあるではないか。道を間違えたのかと、国道の分岐店まで戻り、再度標識を確認してみたが間違いない。

「他に車の通れる道はないし、おかしいな」

車から降りて鉄扉を揺すってみたが、鍵がなければ簡単には開きそうもない。

「我々の到着が遅すぎて、締め出しを食らったんだっぺ」

マシコ君も車から降りてきて不安そうに鉄扉の向こうを眺めやる。

「電話はないし、車を置いてここから歩いて行くしかないのかな」

「カワサキ君、この柵の向こうはチータやライオンの住処ということを忘れちゃダメだっぺ」

「やつらが出てきたら、今朝買ったソーセージをばら撒いて、その隙に逃げるという手はどうだ」

「逃げるといっても敵は時速六十キロ、こちらは時速六キロ。とても勝負にならん。それにここからロッジまで何キロあるかもよく分からんしな」

愛妻から、くれぐれも危険なことはしないでくれと懇願され、遺言書まで書かされて家を出てきたマシコ君は、ともすれば無謀な思いつきに近い行動に走る楽天派のわたしを強く諌める。ナミビアの大地に勢い良く飛び出しては見たものの、最初から野宿の運命かと、諦めが二人を覆い始めた頃、鉄扉の向こうの藪の中から一人の黒人の青年がもっそり現れた。

人煙絶えて久しい荒野の中に突如現われた人陰に、二人とも一瞬ぎょっとして身構える。マシコ君は、追いはぎ強盗のたぐいならば逃げるが勝ちとばかりに、早くも車のドアににじり寄る。わたしも後ずさりし始めたが、近づいてきた青年は「ハロー、サー」と白い歯を見せながら、両手を肩のところに挙げて愛想良く挨拶する。

「オコンジマロッジに行く道はここかい」

逃げ腰になったことを悟られてはならずと、落ち着いたふりをしてわたしが訊ねると、「申し訳ありません。すぐ開けます」と青年はポケットから鍵を取り出し、高い背を屈めてしきりに謝る。いつもは藪の中の小さな見張り小屋で客が来るのを待っているのだが、たまたま薪を拾いに出かけていたのだという。

これで何とか野宿は免れたと、二人とも胸をなでおろした。ここから先は未舗装の私設道路である。低木の疎林の間を曲がりくねりながら道幅四メートルほどのデコボコ道が続いている。

「マシコ君、ロッジまではまだ二十四キロもあるそうだ。歩かなくて良かったな」

「さっき道路脇にチータの標識があっただろう。暗い夜道を歩いていて、喰われたらお仕舞いだっぺよ」

もうもうと土煙を上げて車は緩やかに起伏する大平原の細い道を突き進む。リスや兎などの小動物が車に驚いて、道路わきの草むらに走りこむ。

背の丈をはるかに越えるような蟻塚や木の枝の上に作られた巨大な鳥の巣に驚きながら、車は目的のアフリキャット基金が経営するロッジを目指す。しかし先ほどまでの舗装された国道に比べ、ダートの曲がりく

ねった道は時速二十キロで走るのがやっと。砂の深いところや四輪駆動車の轍にハンドルを取られながら、マシコ君は懸命に運転する。雨季であれば普通乗用車にはとても無理な道だろう。

宿泊するロッジが前方に見えてきたときはさすがに二人ともほっとした。一面草が立ち枯れ、褐色の平原の中で、そこだけは緑豊かな木々に囲まれており、たっぷりと水が撒かれた芝生は、生き生きとさえしている。

大海原を漂流する難破船が南海の楽園に打ち上げられたような、沙漠を行く隊商が泉あふれるオアシスにたどり着いたような安堵感に包まれて、到着祝いのビールは全身にひたひたと滲みこむのであった。

アフリキャット基金

アフリキャット基金はナミビアにいる六種類の大型肉食獣（ライオン、豹、チータ、ブチハイエナ、褐色ハイエナ、野生犬）の長期的な保護を目的とする非営利組織である。

なかでも力を注いでいるのがチータの保護である。チータは世界に一万五千頭ぐらいしかいないといわれるが、そのうちナミビア国内に二千頭から三千頭が生息すると推定されている。百年前にはアジアからアフリカにかけておよそ百万頭のチータが生息していたと推測されているから、この一世紀で個体数は激減したわけだ。減少の原因は、生息地が開発によって狭められたり、道路や鉄道などによって分断されたりしたこと、また餌になるべき被食動物が減少したことなどがあげられている。

緊急の保護活動が必要とされているのだが、牛やヤギの牧畜が盛んなナミビアでは、チータによる家畜の被害は無視できない。一年あたり、肉食獣によって殺される家畜は一万から二万頭にのぼるという。

チータは地上最速といわれる足と鋭い牙を持ち、草食動物がたくさんいるサバンナでは餌には苦労しないだろうと思うのは素人考えらしい。彼らにとっても野生の動物を捕まえ

るのは大変な苦労らしく、またライオンやハイエナなど、他の肉食獣との競争も激しい。

これに比べれば、牛やヤギといった家畜は、厳しい生存競争にさらされていないだけに警戒心が薄く、チータにとっては格好の獲物となるわけだ。このため牧場では、家畜を守るために罠を仕掛けたり射殺したりしたため、近年急激に個体数を減らし、チータは絶滅危惧種に指定されている。

そこでアフリキャット基金では、罠に掛かったり、捕獲されたりしたチータを牧場主から貰い受け、リハビリテーションを施した後、野生に戻す活動を行っている。またチータの生態を観察し、どうしたら家畜が襲われないかを研究している。この研究をもとに、家畜を番犬で守り、牧場内の家畜以外の動物をチータが捕食することを黙認するといったプログラムもすでに実行されている。

ナミビア政府が捕獲したチータの所有権を牧場主に移したこともあって、ナミビアのチータの九十五パーセントは私有牧場に生息しているといわれている。牧場主もチータの保護が観光に役立つことを理解し始めており、いまでは飼育されたチータが牧場を駆け回るといった光景がありふれたものになっている。人間が野生動物の土地を奪い、牧場として囲い込んだためではあるが、チータが生き残れる道はこれしかないようだ。

我々が宿泊したオコンジマロッジはアフリキャット基金が所有する広大なチータ保護区の真ん中にあり、観光客に野生に近いチータの姿を見せることで保護のための資金を稼いでいる。中心に大きなレストラン棟があり、それを取り囲むように独立した宿泊用のロッジが十数棟建っている。

ロッジの周囲は高い木の柵がめぐらされており、大型の動物は入り込めないようになっている。到着早々、マシコ君が柵の外の草むらで立小便していたら、ライオンがやってきたと、青くなって戻ってきた。柵の外だけではない。夜中に部屋の外に出るときは十分注意するようにとの警告文が部屋のドアに貼ってあるではないか。柵をすり抜けてくるやつもたまにはいるらしい。

大草原の真ん中だし、星空を眺めながらの立小便はさぞかし気持ちが良かろうとマシコ君は言うのだが、大切なものをかじられては一大事である。用を足すのは部屋の中にしたほうが安心である。

チータの餌やり

夜中にチータの遠吠えらしき声を聞きながらも、疲れと酒でぐっすりと眠った翌朝、我々は早速チータの餌やりに出かけることになった。バケツ一杯の新鮮なラム肉をロッジで用意してくれる。肉片からはまだ血が滴り落ちている。日本のスーパーマーケットなどで売っている肉に比べて、色が鮮やかでいかにも新鮮な肉であることが分かる。

運転手兼ガイドはグラントという見事に頭の禿げ上がった白人の青年だ。南アフリカから出稼ぎに来ているという。車は荷台部分に四人乗りの座席を作りつけた戦争映画に出てきそうな頑丈な四輪駆動車で、屋根はなくオープンカータイプである。

チータが飛び掛ってきたら危ないのではと心配するが、グラントに言わせると「機嫌を悪くさせなければノープロブレム」だそうだ。どうやったらチータの機嫌が取れるのか分からないが、気前よく餌を与えればいいと解釈した。

陽が昇るまでは、半そでのシャツだと寒いぐらいだ。その上、吹きさらしの車の上は頬に当たる風が冷た

い。グラントは陽気に口笛を吹きながら、平原の中に引かれた狭いデコボコ道を、ハンドルを左右に回しながら分け入ってゆく。この牧場は四十キロ四方もある広大な私有地なのだが、金網を張った高さ二メートルほどの柵でいくつかの区域に分割し、それぞれの区域に数頭ずつチータを放している。

野生のチータはもともと大きな縄張りを持ち、広い範囲にわたって散在している。ライオンのような群れを作らないし、狩も基本的には単独で行う。このため、たくさんのチータをひとつの区域に密集させると、餌をめぐってチータ同士の戦いに発展してしまうらしい。グラントの話では、週に三日は新鮮なラム肉、二日はキャットフードを与えるという。残りの二日は餌を与えない。彼らが野生の動物を捕まえることを期待しているからだ。

我々が訪れた区域は東京ドームの約五倍の面積に八頭のチータを放しているということであった。グラントは時々、車を止めて双眼鏡で周囲を眺めている。しかし我々がチータを見つけたというより、チータが我々を見つけて寄ってきたといった方が正確だろう。

褐色の草むらの中だと同じような毛の色をしたチータの姿は見つけにくい。いつも餌を運んでくる車の姿を見つけて寄ってきたのか、バケツの中の肉の匂いを嗅ぎつけたのか、あちこちの草むらからチータがゆっくりと姿を現した。

「猛スピードで走って来るのが見たかったな」

「地上最速だっぺ。時速百キロで向かって来られたらびびるべよ」

「獲物に近づくまでは、忍び寄るようにゆっくりと、そして一定の距離に近づくと突如飛び掛る、それがやつらの手口だよ」

「脅かすな、カワサキ君の方が油が乗ってうまそうだっぺ」
八頭のチータが勢ぞろいし、我々の乗った車を取り巻くようにして、徐々に距離を詰めてくる。
「かなり筋肉質だな。脚も長い」
いまさら下腹が出てきたのを気にしても仕方がないが、チータたちの精悍な顔つきとスリムなボディに、脂肪太りのわが身が情けなくなる。マシコ君も怖さを忘れたかのように、車から身を乗り出してカメラを構える。
頭がライオンなどと比べると小さいが、それがかえって精悍な感じを与えるのだ。全体にある黒い斑点が体をいっそう引き締めて見せるし、しなやかな歩きは気品さえ感じさせる。まさに獲物を捕るためにからだの一つひとつの部品を進化させてきたといってもいいだろう。
チータの特徴はその瞬発力にある。百メートルを三・五秒で走る。走り出してから二秒後には時速七十キロに加速できるというのだから、スポーツカーの加速性能をも上回る。その上、猛スピードで走っていても、瞬間的に停止できる高性能のブレーキ能力もある。
「カワサキ君、あんまり焦らさないで、機嫌を損なう前に餌を投げてやっぺ」
先ほどから車を見上げ、そわそわしているチータたちを見やって、マシコ君は心配になってきた様子だ。チータのジャンプ力からすれば車の上に座っている我々に飛び掛ることなど訳はない。
「あんまり真剣な眼で見つめられると、首筋がぞくぞくするね」

腹が減っているのか、チータたちも徐々に落ち着きをなくして、イライラし始めた様子である。牙を見せてうなり声を上げているやつもいる。ガイドのグラントを促して、バケツ

に入っている肉を投げ与えることにした。

グラントがバケツのふたをわずかに持ち上げた瞬間である。生肉の匂いが彼らの本能を目覚めさせたのか、今までおとなしかった八頭の動きが急に激しくなった。少しでも前に出て、肉に跳びつくための好位置を占めようと体をぶっつけあう。四肢に緊張がみなぎり、姿勢を低くして眼光鋭くグラントの手元を見つめる。

低く押し殺したようなうなり声が鋭い咆哮に変わった。そしてグラントの手から肉が放り投げられた瞬間である。チータのからだが弾けるように一斉に宙に舞った。その中でもひときわ高くジャンプした一匹が、空中で肉片を銜え、後ろ足から尻餅をつくように着地した。獲り損ねた残りの連中は一斉にその周りに突進し、肉を銜えたやつの周りに猛烈な砂埃が舞い上がる。

肉を銜えたやつは、奪われてはならじと、ものすごい形相と咆哮で他の連中を威嚇し、すばやく近くの藪に走りこんで肉を独り占めにすると、前足で肉片を抑えながら勢い良くかぶりついた。この阿鼻叫喚が肉片が投げられるたびに繰り返されるのである。

「マシコ君、気品も何もないやね」

「カワサキ君、生きるということはせつないことだっちゃ」

あまりの激しい肉片の争奪戦を、二人ともあっけに取られて眺めていたが、肉片を貪り喰うチータの姿は、生きてゆくことの大変さを思い起こさせて、なにか物悲しくさえなるのであった。

人間の手から餌をもらったチータが、再び野生に帰ることはできるのだろうか、子羊の肉の味を覚えたチータは、再び家畜を襲おうとしないのだろうか、ハンティングの技術を失ってしまうことはないのだろうか。疑問は次々とわいてきた。

アフリキャット基金によれば、農場で罠にかかったチータや豹が毎年約七十頭連れてこられ、そのうちの八十五パーセント以上を再び野性に戻しているということだ。そして、一九九三年に活動を始めてから八百頭以上のチータを救ったとしている。したがってこの保護区にいるチータは、リハビリ中のものか、障害などの理由で野性に戻すことが難しい個体ということになる。

アフリキャット基金の活動が、単なる観光資源としてのチータの保護だけでないことは明らかだ。給餌を

行った後、グラントの案内で基金が運営するチータのためのクリニックや子供たちを対象とした環境教育センターも訪問することができた。真剣な調査・研究も継続されており、そのデータもきちんとまとめられて公表されている。

しかし、それにしてもぬぐえない違和感が残るのは、チータの生存環境を脅かすのも、それを保護するのも白人のエスタブリッシュメントだということだ。何かマッチポンプの臭いがしないでもない。

本来、その生き物を保護するということは、その生きている環境を正しく把握した後に、生息環境をひとつのシステムとして保全することではないだろうか。チータや豹がいなくなったとしても、すぐにはなんの問題も起こらないかもしれない。しかし、チータも豹も生息環境の輪の中の鎖のひとつである。連鎖している生命の輪を次々と切っていけば、臨界点がどこかにあり、システムはいずれ崩壊せざるをえないのではないだろうか。

生息環境の撹乱をそのままにした保護策では、撹乱が広がるにつれて生き物は行き場を失い、やがては人間の「保護下」、いわば囲われた柵の中でしか生きられないという事態に発展してしまう。

例えば、ケニアのチータの個体数はすでに五十頭を切ったといわれている。これらが全国数か所の国立公園に十頭前後の個体群で散らばって生息しているのみなのだ。こうなるともはや、日本の朱鷺のように一か所に集めて、人工的な交配やら遺伝子操作やらしながら、保護し続けることになる。

しかし環境保護のために開発をただ控えろという論理は、一方で現存する南北格差をそのまま容認し温存する「高みの見物」的な論理と受け止められても仕方がない。アフリカ

には「欧米の指導者層は、地球を自分たちが支配できる規模に保つために、黒人国家の経済と人口の成長をできるだけゼロに近づける戦略を持っている。その一環として環境・動物保護運動を起こしている」といった発言さえあるのである。

チータは美しい。あらゆる動物の中で最も美しいといっても過言ではない。疾駆する姿はもちろんのこと、ただ歩いているだけでも辺りを睥睨する威厳とエレガンスを発散している。たくさんのチータを、手を伸ばせば触れられる位置でつぶさに眺め、写真に収め、給餌までした一日であったが、チータたちがあまりにも美しいがゆえに、また悲しさも募るのであった。

いまやさまざまな環境倫理が交錯し、政治・経済をも巻き込んだ議論が世界的規模で展開されている。人間中心主義、自然と人間の二項対立といったキリスト教文化を基盤にした近代西洋の論理が世界を席巻した反動がいま地球を覆っている。しかし、いつまでも立ち止まって、観念のストロークを続けているわけには行かない。ナミビアの旅はまだ始まったばかりであり、これからナミビアの懐奥深く、さらに我々は進んでいかなければならない。ロッジに戻り、少し早い昼食をあたふたと掻き込んで、車に飛び乗る。

ひとまず美しいチータたちに別れを告げ、北へ、野生の王国エトーシャへ歩みを進めるとしよう。再び国道B1に戻り、エトーシャの東側の出入り口であるフォン・リンデクエストゲートを目指す。

今夜の宿泊先のナムトニロッジはこのゲートを通過し、公園に入ってすぐのところにあるのだが、ゲートが開いている時間は日の出から日没まで。従って、陽が沈むまでにゲートにたどり着かなければ、今日もまた野宿の心配をしなければならない。

昼ごろ出発すれば余裕を持って到着できると計算したのだが、舗装は

出発して五十キロほどのオトジワロンゴという町で終わった。それを過ぎると、国道B1は突如として砂利道に変わる。これではスピードも落ちるし、日没に間に合うか心配になったが、路面はよく整備されている。すれ違う車も首都から遠ざかるにつれ徐々に少なくなり、いまは一時間に数台程度見かけるだけである。西の空が真っ赤に染まる頃には無事ゲートに到着することが出来た。

エトーシャ国立公園

エトーシャ国立公園は東西が三百キロ、南北が百キロもある広大な自然公園である。総面積二万二千平方キロメートル。山梨県の四倍ほどもある広大な自然公園だ。

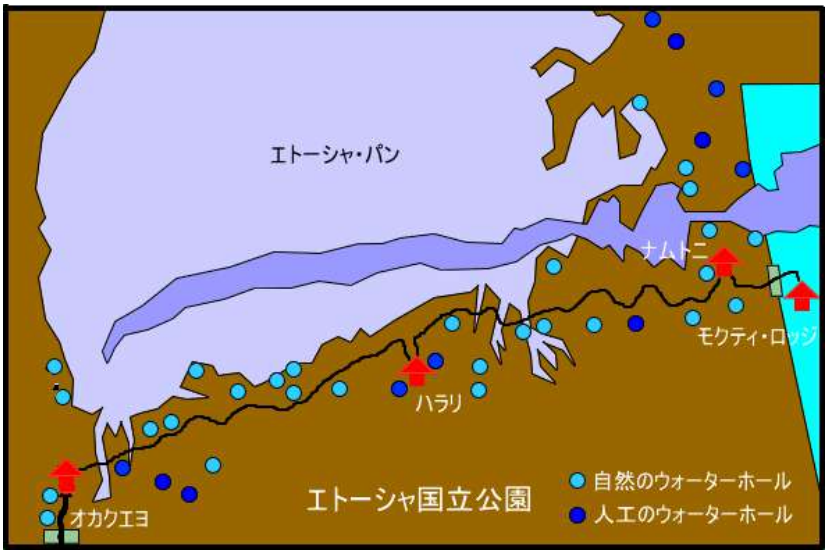
公園の敷地の約三分の一はエトーシャパンと呼ばれる塩性湿地が占めている。パンとはフライパンのパンと同じ意味で、底の平らな窪地をさすが、雨季にはこのパンに大量の水が流れ込んで、一帯は水浸しになるという。しかし乾季の現在は大部分が干上がって、所々に小さな水場が残るだけである。

エトーシャ国立公園は最も手軽で、もっとも多様な種類の動物と出会うことができる世界一の動物自然公園だといわれているが、その訳はウォーターホールと呼ばれるこの水場にある。水場にはたくさんの動物が渇きを癒すために集まってくる。だから、この水場で見張ってさえいれば、労せずして多くの動物たちと出会うことができるのである。

ウォーターホールの位置は公園でくれる地図に載っている。たくさんのウォーターホールがあり、自然に湧き出た泉も人口のものもある。また乾季には消滅してしまうものもあり、どの水場へ行けば動物と会えるかは勘に頼るしかない。ロッジの管理事務所には、どの水場にどの動物が出没したかを知らせる目撃情報ノートが置いてあり、一応参考にはなるが、昨日いたからといって今日も

いるとは限らない。

レンタカーの良いところは、自分たちで好きな場所を自由に移動できることなので、地図と勘を頼りに、できるだけ多くの水場を探索することにする。公園内は徒歩や自転車での移動は禁止されているが、これは肉食動物が自由に闊歩しているのだから当然のこと。また、車での移動は日の出から日没までの間と決められているが、動物にできるだけストレスを与えないための配慮である。



公園の中には、東の端にあるナムトニロッジ、真ん中にあるハラリロッジ、西のゲート近くにあるオカクエヨロッジの三つの宿泊場所がある。我々はナムトニロッジのある公園の東端からオカクエヨロッジのある西端まで百二十キロを水場に立ち寄りながら移動することになる。

公園の中を動物を見ながらドライブする今日の行動は、ナミビアの旅のプロローグ、いわば前半の山場である。しかしこの広い野原の中であてずっぽうに動き回っても果たして動物たちと出会えるのだろうか、他の観光客が先に動くと動物が逃げてしまわないだろうか、期待とともにあせりも少し感じる。

動物たちを観察するには、早朝と

夕方が最もチャンスが多いという。日の出とともに活動を始める動物たちが水場に集まってくるからだ。日差しが強い日中は動物たちも木陰でじっとしていることが多い。出遅れは後悔を残すことにもなりかねない。

我々は朝飯も早々に、宿泊先のナムトニロッジを後にし、マシコ君の運転で、まだ朝焼け雲が漂う東方に向けて出発したのであった。ナムトニからオカクエヨに向かう道はエトーシャパンの南端を掠めるように走っていて、舗装はされていないが凹凸も少なく、よく整備されている。

ロッジを出発して十分も走らないうちに、草を食んでいるスプリングボックの群れに出くわした。背中は枯草と同じような色の毛並みで腹と顔は白い。脇腹に濃い褐色の模様がある。早速のご対面に、車を止めて写真を撮ろうとするのだが、連中はなかなか警戒心が強い。マシコ君が車をそろそろと近づけるのだが、彼らが安全と認識している距離限界あたりまで近づくと、それ以上の接近を許さず、再び十分な安全距離を取るために移動してしまう。

我々が車を停めてじっとしていると、連中も何食わぬ顔で黙々と草を食んでいるのだが、ちょっとでもこちらに動きがあると敏感に察知し、常に安全距離を保とうとする。わたしが車から降りて写真を撮ろうとすると、腰の白色部分の毛をさか立て、ばねが弾けるような見事な跳躍力で、あっという間に走り去ってしまった。

スプリングボックはナミビアを初め、アフリカ南部を象徴する美しいレイヨウの一種だ。乾燥した林を好み、かつては何万頭も大きな群れで移動していたといわれる。今は数がだいぶ減ったが、エトーシャでは一番遭遇する確率が高い動物である。

「まあ、幸先はよかんべ。他の観光客の姿も見当たらないし、この調子なら期待できるっちゃ」

出発早々にスプリングボックの群れに出くわしたことで、マシコ君も安心したらしい。

「鹿に似ているが、奈良公園の鹿と比べると警戒心が異常に強いな」

「車の中でじっとしていると逃げないが、カワサキ君が外に出た瞬間走り去ったっぺ。動くものに敏感に反応するみたいだな」

もともとこの公園の中では、車の外に出ることは禁止されている。しかしたくさんの動物を背景に、アフリカのサバンナに立つ自分の勇姿を一枚ぐらい撮っておきたい。草食動物だったら大丈夫だろうと、そろりそろりと車の外に出るのだが、カメラを構える頃には肝心のスプリングボックは遥か遠くに走り去ってしまう。

何はともあれ、まずは地図で確認したもっとも近くにあるウォーターホールへ向かうことにする。道の両側はほとんど起伏のない平原で、見通しはすばらしくいい。遠くの方にキリンの首が見えたり、オリックスが悠々と歩いていたりするのだが、車は道路を外れて走ることは禁止されている。動物たちが道路近くまで出てきてくれればよいのだが、当然のことながら食べ物を与えることは厳禁されている。だから連中が近寄ってきて、我々に愛敬を振りまく理由は何もないのである。

やはり動物たちが集まるウォーターホールに陣取るのが一番手っ取り早いらしい。最初に訪ねたウォーターホールは、底の方にわずかに水が残るだけの小さな水溜りだったが、スプリングボックの群れが水を飲んでいるところだった。今度は連中を

驚かさないように、車のエンジンを切り、双眼鏡で静かに観察すること

にする。

ウォーターホールの周りを双眼鏡で観察してみると、ウォーターホールを遠巻きに取り囲むようにシマウマとキリンの姿が見える。しかし彼らはこちらに停車している車を警戒しているらしく、なかなか近づいてこない。シマウマは「俺たちは喉なんか渇いていないもんね」とでも言いたげに、仲間同士でじゃれあって遊んでいる。

しかし十分ほどだろうか、車の中で身じろぎもせずに見つめていると、まず十頭ほどのシマウマの群れがゆっくりと水場に向かって歩き始めた。群れの先頭に立つのはリーダーらしくからだが大きい。

マシコ君が双眼鏡から目を離し、声をひそめて「きれいだな」とつぶやく。

「シマウマのお尻はムチムチやね、エロチックな感じさえするね」とわたし。

「肉感的なことは間違いないけど、俺は食欲をそそられるっちゃ」

「マシコ君、朝飯食べたばかりじゃないか」

「いや、ライオンだってあの尻を見れば、生唾が沸いてくるに違いない。我々団塊の世代は、とんかつとかス

テーキを想像すると、それだけでよだれが出るべ」

マシコ君はひもじかった大学時代の寮生活の頃を思い浮かべているらしい。シマウマの群れが近づいて来ると、スプリングボックは水場を譲るように立ち去る。肉食動物が来れば警戒して逃げ去るのは分かるが、同じ草食動物同士でも、それぞれ決まシマウマが水辺に立つと、縞模様が水に映って実に美しい。狭い水場なので体を寄せ合うようにして仲良く水を飲み始めた。シマウマの白黒の縞模様は、鮮やかで目立ちすぎるような気がするが、「遠くから見ると白と黒が混ざって灰色に見えるので、サバンナでは目立たない」という理論がある。しかし、眼の悪いわたしが見ても、シマウマはすぐ探し出せるほど目立つ。また肉食獣たちは、色を識別することができないため、白黒の縞が目にちらついて混乱してしまうという説もあるが、サバンナの現場で見る限り、いずれも眉唾ものの説といわざるを得ない。

一番臆病で慎重なのがキリンだ。シマウマの様子を覗っていて、危険はないと判断したのか、ゆっくりと水場の方に歩き始めた。しかし二、三歩近づくと立ち止まり、慎重に周囲を見回す。まるで「ダルマサンころんだ」の遊びをやっているような感じで、数歩歩いては立ち止まり一呼吸入れるといった動作を何回も繰り返しながら、少しずつ近づいてくる。

美しい斑点もさることながら、このゆったりとした優雅な身のこなしから、キリンはサバンナの貴婦人といってもいいだろう。

やっと水辺にたどり着いても、後ろを振り返って、危険のチェックを怠らない。落ち着きのないシマウマたちの動きも気になるらしく、「あなたたち、行儀良くしてね」といった感じで眺めている。

キリンがどうやって水を飲むのか興味があるのでこちらも辛抱だ。

「マシコ君、あの長い首を曲げて水を飲むのはさぞ難儀だろうね」

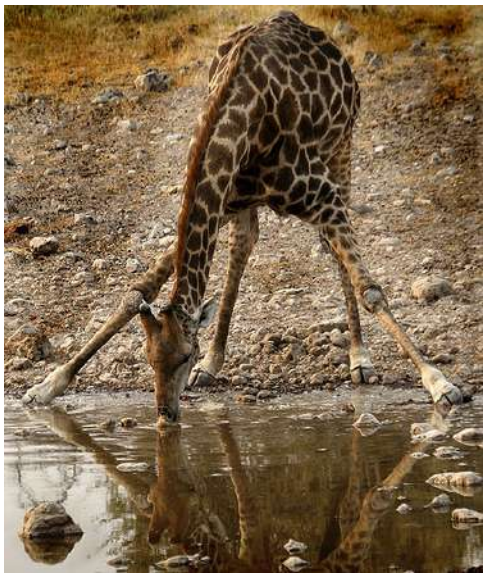
「急に頭を上げ下げすると、血圧の影響で立ちくらみみたいになるっぺよ」

「座って飲むのかな」

「座ったらライオンが来たとき、逃げられないっぺ」

あれこれ考えたが、二人とも予想はまったく外れた。キリンが水を飲むときは、前足を大きく左右に広げ、立ったままで水を飲む。首と頭の重さを支え、前にのめらない様にするために足を突っ張る。

これを見ていてわたしは、キリンの首がなぜ長いのかという謎がついに解けたような気がした。ダーウィンの亜流たちは、キリンの首は地上の草が不足したとき、高いところにある木の葉を食べるのに有利なように進化したと主張する。しかし、地上の草がなくなり、背の高い木の葉のみが残っているという環境はあくまで仮定の話だ。いまわたしの目の前に広がるサバンナを見ても、食料となる木の葉や草は立体的に分布しているではないか。



わたしの説は、キリンは水を飲むために首を長くする方向に進化したというものだ。肉食動物の狩から逃れるために、キリンはまず脚を長くする方向に進化した。ところが脚だけ長いと、水を飲むとき口元が水面に届かない。マシコ君の言うように、脚を折りたたむと、とっさに逃げられない。そこで首を長くしたというものだ。

やはり百聞は一見にしかずだ、学者も机上の空論でなく現場に足を運んでモノゴトを考えるべきであるなどと、マシコ君に盛んに新説を吹聴するのだが、マシコ君はただ一言、「五十歩百歩だっぺ」。

動物園は原則として種族ごとに動物を分けて檻の中に飼っているが、この舞台にはいろんな種類の動物がかわるがわる登場する。らせん状の角を持つクドー、真っ直ぐの長い角を持つオリックス、竪琴と形容され

る優美な角を持つインパラ、馬のたてがみと牛の角を持つワイルドビーストなどが次々とやって来ては喉を潤す。公園事務所でもらったいま見られる動物一覧パンフレットで、初めて見る動物たちの名前を探し出すのだが、角の形で見分けるのが分かりやすい。

水辺で繰り広げられる動物たちのドラマを、マシコ君と批評しながら楽しんでいると、時間はあっという間に過ぎて行く。時計を見ると知らないうちに十二時を回っているではないか。あまりゆっくりしていては日没の門限に遅れかねない。

それにこの先、もっと動物が集まる水場だってあるかもしれない。ウォーターホールを後にして、今度はわたしの運転で再びエトーシャパンの南の縁を東に向かうことにする。

象の鼻がもう少し長ければ

公園の中では車のスピードは時速六〇キロ以下と決められているが、見通しの良い平坦な道で、きわめて運転しやすい。それに他の観光客の車ともほとんど出会わない。エトーシャは世界的に有名な動物の王国だが、訪れる観光客の数は、宿泊施設が限られているので一日当たりせいぜい数百人だろう。それが山梨県の四倍の面積に散らばるのだから、他の客はどこへ行っちゃったの、という感じなのだ。間違っても日本の観光地のように人出でごったがえすという事態にはならない。

めったに他の車とも出会わないし、道が真っ直ぐだと、ついつい車のスピードが出てしまう。平原の向こうをキリンやオリックスが悠々と水場に向かって歩を進めるのを横目で眺めながら、鼻歌交じりの運転は実に爽快なのだ。

しかし好事魔多しとはよく言ったものである。比較的背の高いアカシアの潅木の林の中で、緩やかに右にカーブする道を突っ切ろうとしていた時のことである。道路右の藪の中から大きなゾウが姿を現し、ゆっくりと道を横断しようとする姿が眼に飛び込んできた。まだ距離は十分ある。落ち着いてわずかにステアリングを右に切りながら、車を減速させようと軽くブレーキを踏んだ。

その瞬間である。後輪が石を撥ねたような振動があり、ハンドルが突如軽くなった。そして車はわたしの意志を無視するように、蛇行し始めた。車のスピードは時速八十キロぐらいはあっただろう。

幅六メートルほどの砂利道から車が飛び出さないように懸命にハンドルを切るのだが、一度スリップを始めた車体は砂利を猛然と弾き飛ばしながら道路上に出てきたゾウに向かって突進してゆく。ハンドルが効かない。

助手席でウトウトまどろんでいたマシコ君も異変に気づいて「あああ」と叫び出した。映画のフラッシュバックの一シーンのようにゾウの姿が目の前に迫る。この砂利道で急ブレーキを踏んだら車が横転するかもしれない。間歇的に軽くブレーキを踏む動作を繰り返していたが、車はなおも蛇行しながらゾウに向かって突っ込んでゆく。

車の方を振り返ったゾウと眼が合ったような気がした。このままだとゾウと正面衝突が避けられない。もうだめだと思った瞬間、右足が勝手に動いて、思い切りブレーキを踏み込んだ。衝突の衝撃に備えて手足が強張った。体が激しく前にのめり込み、わたしはハンドルをきつく握り締めたまま眼を閉じた。

頭を上げ、眼を開けた時には闇の中にいるような気がした。車が土の中に潜り込んでしまったのだと一瞬思った。フロントガラスは割れていなかったが、前は何にも見えない。

エンジンがまだ回転しているのに気づき、震える手でギアをパーキングに入れ直すと、わたしはエンジンを切った。静かだった。車はどこにも衝突していなかった。わたしは運転席に、マシコ君は助手席にそのままの姿勢で座っていた。自分が血でも流しているのではないかと、顔を撫でた手のひらを目の前にかざして見たが異常はないようだ。

「マシコ君、大丈夫か。怪我はないか」

マシコ君の顔を覗いてみたが、彼も傷を負ったようには見えない。

「ゾウか。ゾーとしたな。手も足もちゃんと動く。どこかにぶつかったような気がしたが、いまのところ痛いところもない」
「危なかったな。ごめん」
　とりあえず、二人とも怪我がないことで一安心する。恐らく車は大破しているだろう。しかし高い保険にも入っていることだし、命さえあれば何とかなる。改めて車内を見回してみると両サイドの窓からも何の視界もない。車が急停止する時に、舞い上がった土埃が車の窓に降り積もっているのだということがようやっと理解できた。
　ワイパーを動かしてみることにする。スイッチを入れるとキィーと音がして、フロントガラスに積もっていた土埃が崩れた。目の前は何事もなかったかのように青空と砂利道が広がっていた。車はスピンして、百八十度完全に回転したのだ。映画のスタントマンがやってもこれほどうまくはいかないだろう。
「どうやら助かったみたいだっぺ」
とマシコ君はシートベルトを外す。わたしはまだ事態が良く飲み込めていなかったが、ドアを開けて車外に出てみることにする。
　車は道路上に停まっていた。象はどこにもいない。衝突直前で停止できたのかと思った瞬間、車が走っていた方向とまったく逆向きに停まっていることにわたしは気づいた。後ろを振り向くと大きなゾウが耳を団扇のように振り、牙をむき出しにして、こちらを睨んでいる。
「おい、マシコ君、早く車に乗れ」
　フロントガラスの埃を手で払いながら、わたしは来た方向を呆然と眺めているマシコ君に声をかける。わたしはマシコ君がまだ助手席側のドアを絞め終わらないうちに、いそいで車を発進させた。
「ゾウの鼻がもう少し長かったなら、事態は変わっていたっぺ」

車の損傷もたいしたことがないとわかって、マシコ君も冗談を言う余裕が出てきたのだろう。五十メートルほどゾウから遠ざかってから車を停め、後部を振り返ってみたが、リアウィンドーにも厚く土ぼこりが積もっていて何も見えない。

ここまで離れれば安全だろうと、車外に出てみると、すでにゾウの姿はなく、午後の太陽に白く光る道が、ゆっくりと蛇行しながらアカシアの疎林を二つに割るようにどこまでも続いていた。

ウォーターホールの夜

オカクエヨのウォーターホールに夕日が沈もうとしている。ざくろの汁を絞ったような雲が、背の高いアカシアの梢の向こうに広がり、その中を鳥の群れが行き過ぎる。空とその空を反射した水面だけはまだ明るさを保っているのだが、ウォーターホールの周りは、ほの明るい闇が忍び寄り始めている。

エトーシャの中に三つだけある宿泊場所の中でも、オカクエヨロッジは、近くにあるウォーターホールの夕日で名高い。水面を真っ赤な夕陽が染め、動物たちのシルエットがそこに映るのである。

ウォーターホールを馬蹄形に囲むように簡単な石垣が積まれており、その上のベンチに座れば、観客席からグランドを見下ろすように直径五十メートルほどの水場全体を一目で見渡すことができる。そこはまさに動物の劇場なのだ。

日が沈むと日中の暑さはもう跡形もなく、さわやかな風が心地よく頬を撫でる。マシコ君とベンチに並んで座り、冷たいビールのグラスを片手に夕日の沈むのを待っていた。長い一日だった。あわや自動車事故という危機もあったが、運良く切り抜けることができた。その後に回った水場でも多くの動物たちの群れに出会ったし、広大な塩性湿地の景観も堪能した。

近代の産業文化が国の隅々まで浸透した日本では、もはや野生との遭遇などないに等しい。都会の住宅街に狐やサルが出没すれば、警察官が出動するほどの騒ぎとなる。一匹のアザラシが都市を流れる河川に迷い込むと、それを見物に何千人ものヒトが集まり、テレビはアザラシの動向をニュースとして逐一報告する。金属やコンクリートに囲まれた人工空間の中では、我々ヒトは動物の一員であることをほとんど忘れて生きている。しかし高々数千年前までは、ヒトも他の動物と同じように自然環境に囲まれて生きていたのだ。

今日一日、まばらに草の生える広大な塩性湿地やサバンナの疎林の中で、いろんな動物たちに出合うたびに、わたしは一種の悲しみのような感情に襲われた。その訳の分からない悲しみはいったいどこから来たのだろうか。確かに悲しかったのだ。それは今、心地よいビールの酔いの中で考えてみると、疎外感、孤独感と言い換えてもいいようなこころの動きかもしれない。

この野生の中では、我々ヒトは観客にすぎない。わたしがもし徒手空拳、我が身だけであの動物たちの間に放り出されたとしたらどうなるだろうか。我々ヒトは、スプリングボックの足も、ゾウのパワーもライオンの牙も持っていない。おそらくわたしは大型肉食獣に脅え、空腹をいかにして満たすか途方にくれるしかないだろう。鉄とガラスで囲まれた車の中にいて、夜になれば泊まる家と食事の心配がないから、安心して野生を楽しんでいられるのだ。

我々ヒトはおよそ五百万年前、二足歩行という革命的な運動能力を手に入れ、他のサルたちと違った道を歩き始めた。しかしその歩みは遅々たるものである。脳の大型化が始まったのが二百五十万年前、そしてヒトのヒトたる由縁である言語の使用

は高々十万年前に過ぎない。自然の中で、ヒトは他の動物に比べて劣る身体的能力を、道具を作ることによってかろうじて補ってきた。そしてヒトが文明を発明し、地球上で優越的な立場に立ったのはつい最近のことなのである。

棒を振り回し、石器を利用していた狩猟採集の時代までは、ヒトは他の動物と同じように自然の中で生きてきたのだ。つい最近まで、ヒトは観客ではなく、他の動物と同等のサバンナの一登場人物だったのだ。自らの生を賭けて忍び寄り、殺戮し、ある時は逃げ回り、身を隠し、罠を仕掛け、そして子供を育ててきた。

しかし今のわたしは車を捨て、サバンナの中へ足を踏み入れることはできない。スプリングボックやシマウマと並んでウォーターホールの水を飲むことも、槍を持ってライオンに立ち向かうこともできない。ターザンは銀幕の中のスターに過ぎない。だからヒトは悲しい。だからヒトは孤独だ。大きな脳はヒトを他の動物からはるかに遠い地点まで連れてきてしまった。そしていまヒトが文明の中でしか生きられないということは、ヒトは自らを文明の奴隷にしてしまったのではないだろうか

文化人類学の泰斗レヴィ・ストロースは『悲しき熱帯』の中で「世界は人間なしで始まった。人間なしで終わるだろう」と慨嘆した。ヒトは、自分たちの作り出した文明の力によって、沙漠化、温暖化、海洋汚染、水質汚染などの形で地球環境に壊滅的打撃をもたらしつつある。文明の時空間の広がりが、地球というサイズにいよいよ収まらなくなりつつあるのだ。そしてヒトの暴走を止めるものは何もない。

周囲の観光客のあいだから巻き起こったざわめきが、わたしを現実に連れ戻した。隣のベンチに座ってい

るドイツ人の女の子の指差す方を見ると、一匹のスプリングボックの子供が、闇がせまった藪の中から姿を現し、水辺に近づいてくるところだった。右の後ろ足を引きずるようにして、歩を運ぶたびにからだが大きく揺れる。変だなと思った瞬間、白いわき腹がえぐれ、そこから赤い血が滴っているのが見えた。何かに襲われ、傷ついたものの、何とか逃げ延びて仲間を追って来たに違いない。血の匂いに気づいたのか、先に水辺にたどり着いていたスプリングボック数頭が水を飲むのを止め、傷ついた子供の方を振り返る。傷ついたスプリングボックは、助けを求めるように首を振った。しかし次の瞬間、水辺にいたスプリングボックたちは、何事もなかったかのように再び水を飲み始めた。

「カワサキ君、親はいないのかな」

マシコ君はわたしの耳元で心配そうに話しかける。

「追いかけられ、逃げ回るうちにはぐれてしまったんじゃないかな」

「それにしても他のスプリングボックも薄情だっぺよ」

他のスプリングボックは誰も助けに行こうとしない。誰かが駆け寄ったとしてもどうしようもないだろう。傷ついたスプリングボックの子はからだを震わせながら必死にウォーターホールに近づこうとしていた。もう数歩で水辺にたどり着きそうだった。その時である。水辺にいた数等のスプリングボックが弾けるように一斉に駆け出した。観客たちの中に再びざわめきが拡がった。傷ついたスプリングボックが出てきた同じ藪の中から雌ライオンが二頭姿を現したのだ。一撃には成功したものの、完全に倒す前に逃げられたスプリングボックの子を追ってきたのに違いない。血の匂いを辿るように、ウォーターホールの方へゆっくりと歩を進める。傷ついたスプリングボックも仲間を追って懸命に駆け出した。前足で地面を蹴るのだが、後ろ足がほとんど利かないらしく、着地の瞬間大きくからだが沈む。仲間はあっという間にウォーターホール背後の藪の中に駆け込み、姿を消した。しかし傷ついたスプリングボックはわずかな段差を越えるのにも、体を引きずり上げるように前足をもがく。その様子を悠然と眺めていた二頭の雌ライオンが突如、地面を蹴った。一頭はスプリングボックめざして真っ直ぐに、もう一頭は進路を塞ぐようにやや右寄りに猛然と突進する。

五十メートルほどあった距離をあっという間に縮め、真後ろから迫った雌ライオンがスプリングボックの背中に飛び乗った。横倒しにされたスプリングボックの白い腹にもう一頭の雌ライオンが体当たりするように牙を突き立てた。

スプリングボックには、もはや抵抗する力は残されていなかった。最後の悲鳴が聞こえたような気がした。しかしそれは二頭の雌ライオンの咆哮だったかもしれない。中空に突き出された前足がわずかの間、痙攣していたが、それもすぐに動かなくなった。肉を引きちぎり、噛み砕く音が風に乗って聞こえてくる。息を殺すようにして成り行きを見守っていた観光客たちのあいだにため息のようなものがさざ波のように広がった。

マシコ君も双眼鏡から眼を離し、飲みかけのビールを一気に呷った。気がつくと、ざくろ色の雲はその色を失い、ウォーターホール背後の藪は、闇の中に黒々と沈んでいる。反対に先ほどまで目立たなかったウォーターホール周辺のライトアップが、一段と明るさを増し、水辺に反射している。

「今夜の野生劇場の役者はなかなかよかったな、マシコ君」

わたしは硬く握っていた両手の手のひらをゆっくりと広げ、硬くしていた体を解きほぐすように大きく背伸びした。

「二人芝居だとちょっともの足りん。堀部安兵衛が出てきて、三人になればいい芝居になるっぺ」

「あの高田馬場か？」

「ひた走る安兵衛ならぬゾウの一匹でも出てきて危機一髪、スプリングボックの前に立ち塞がり『助太刀いたす』といった感じにならんもんかなあ」

マシコ君は旅のつれづれに池波正太郎の『堀部安兵衛』の文庫本を持ってきていたのだ。

「しかしマシコ君、スプリングボックが善玉でライオンが悪玉とも言え

まい」
「自然の掟か・・・。生命が生命を殺さなければ生きていけないということは海のようにも山のようにも悲しいことだっぺ」
「お釈迦様のおっしゃる『業』というやつだな」
「人間も同じだっぺ。有機物をアデノシン三リン酸に変換して、それをエネルギー源として筋肉を動かすシステムは、ライオンも人間も同じ理屈だっぺ」
　食物連鎖を化学反応のレベルで考えるのは、技術屋のマシコ君らしい。
「無機物を有機物に変換できるのは植物だけということか」
「その変換には太陽のひかりエネルギーが必要だから、何のかのといってもお天道様が一番尊いんだっぺ」

「お天道様はありがたい。さて腹も減ったし、レストランでオリックスのステーキでもよばれることにするか」
　役者が去った後の舞台をいつまでも見つめているような空虚な時間が流れ出し、観光客は一人またひとりと自分たちのロッジに引き上げ始めた。我々もライオンと同じように空腹を満たさなければならない。たちの悪いことに、ライオンには不要なワインも、我々には必要なのだ・・・・。

ヒンバ族のふるさとへ

　エトーシャ国立公園の南の出口であるアンダーセンゲートを朝陽とともに抜ける。車道をゆったりと歩むライオンに出会ったが、ここではもちろん彼らが優先だ。

これからヒンバ族の故郷、アンゴラとの国境地帯に広がるカオコランド地方を目指すのだ。一日の移動距離としてみれば、一番きびしい行程の日である。

エトーシャ国立公園が真西あるいは北に抜けられれば、目的の町オプヲまで最短距離で移動することができるのだが、公園の西半分は一般客の立ち入りが禁止されていて、かつ北に抜けるゲートがない。従って北に向かうのに南のゲートから出て、一旦は約百キロ南の町オゥトヨを目指す。そこから西に向かい、公園の西半分を迂回するように北上する。

目的の町であるオプヲまでの間にはカマンジャブという町がある。国道三五号線と国道四〇号線が交差する比較的大きな町である。ここから先にはオプヲまで約二百五十キロのあいだ、ガソリンスタンドはもちろん、町らしいものはない。ここでガソリンと飲み水をたっぷり補給する。ついでにマーケットで冷たいビールとハムを買って昼飯代わりにする。

カマンジャブの町を過ぎて北に向かうと、交通量はさらに少なくなる。道路の両側は低木のアカシアがまばらに生えたサバンナがどこまでも起伏している。ウィントフックでレン

タカーを借りるときに、ハーツの担当者は、何かあったらここに電話すればすぐにバックアップするという電話番号を教えてくれた。一年中二十四時間いつでも相談を受け付けるために待機しているという。しかし、車を運転しながらふと気がついた。電話なんかどこにもないではないか。泥の壁と草で葺いた屋根の家が数件集まっている村らしきものは何か所かあったが、電話はおろか電気さえない。

日本車のことである。きれいに舗装された高速道を突っ走るのなら故障の心配などいらない。わたしは車の運転を始めてから二十年間、タイヤのパンクはおろか車が故障したという経験がまったくない。しかしナミビアのこの砂利道の振動とすさまじい砂埃が予想外の故障をもたらさないという保証はない。日本では砂利道を走ることなどもはや皆無に近い。山奥の林道さえ舗装されているのである。

マシコ君は技術屋なのだが、車の構造や修理については、わたし同様、全く自信がないという。わたしときたら、車のボンネットさえ自分で開けたことがないのだ。車が故障したら、通りかかった車に便乗させてもらい、電話のある町まで行くしかない。一日数台という交通量で果たしてそれが可能か、考え出すと不安は増すばかりである。

しかし、車は快調にエンジン音を高鳴らせ、もうもうたる砂埃を巻き上げながら北上する。道はひたすらまっすぐ北へ伸びている。舗装はないが砂利道は大きな凹凸もなく平坦で走りやすい。どうにかなるだろう

と開き直ってみれば、車の運転は快適である。対向車があるわけではないし、人や自転車が路上に出てくることもない。道路の真ん中をなにはばかることなく走ることができるのだ。エトーシャで誓った安全運転のこころがけもついつい忘れがちになって、車は時として時速一四〇キロを超えるスピードでばく進する。

カマンジャブから百キロほど北上したところで国道三五号線と別れ、はじめてDクラスの道路であるD3709に車を乗り入れる。ナミビアの道路には道路番号の上に道路の「格」を示すアルファベットがついている。Bクラス道路が幹線道路で一番良く、つぎがCクラス。Dクラスは未舗装はもちろん、道幅も狭く整備も十分に行き届いていないという。

いままでの三日間はすべてB、Cクラスの幹線道路だったので、Dクラスの道路の状況が気になる。この道が通れないということになると、三角形の二辺を通っていくようにCクラスの道路を迂回していかなければならないのでかなり辛い。このDクラス道路は、Cクラス道路に再び出るまでに八十キロは走らなければならない。

分岐点で二人して思案していたが、とりあえず行ってみよう、だめだったら引き返せばよいということで勇躍、車を乗り入れる。道幅は狭くなったが、路面は硬く安定している。時々渡る川床も乾季のこととて水はまったくなく、ぬかるんでもいない。これが雨季であればたとえ雨が降った後でなくても、川床などがぬかるんで、普通乗用車ではとても通行不可能だろう。

この辺の道路には橋が架かっていない。だからたとえ小さな川でも百メートルほど手前に、なべ底に水を張ったような交通標識が必ず現れる。道路の傾斜が急激にきつくなって、V字形になっていることもあるので十分減速しなければ、車が宙に舞うか、車の底を激しく擦ることになるかである。こんな場面ではおそらくクリアランスのある四輪駆動車が最適なのであろう。

大体こんな辺境まで来るのにもかかわらず、普通乗用車を借りるということ事態が常軌を逸しているともいえる。四輪駆動車を使うことはもちろん、車一台の旅は故障のことを考えると大きな危険が伴う。

二台以上の車でコンボイを組んでゆくのが常識なのである。四輪駆動の車を借りなかったのは、わたしが

運転できないからだ。

わたしはいわゆるオートマティックの車しか運転しない。四輪駆動車はたいていマニュアルのトランスミッションである。しかたなく普通乗用車を借りたわけだ。

道はいままでの定規で引いたようなまっすぐな道から、山越えのカーブが多い道になる。山道になれば、小さな沢筋も含め当然、川が道を横切ることも多くなる。車のスピードは急激に落ちてくるが、安全第一である。

北に向かうにしたがって、まばらに生えている木の背が高くなり、草の密度も少しずつ増えてくる。道路端で放牧している牛や羊の姿を見ることも多くなった。カオコランドはナミビアの中では比較的降雨量が多く、人口密度が高い地域なのだ。十一月から四月までの半年間に雨は集中する。九月は雨が降らないし、ほとんどの草は緑を失っている。それでも牛たちは黙々と枯れ草を食んでいる。マシコ君が車から降りて写真を撮ろうとしたが、隠れるように道路脇の藪に潜り込もうとする。

「家畜のくせに、この辺の牛はまだ人間慣れしていないのかな。純朴な牛さんだっちゃ」とマシコ君は残念がる。そう言われてみればインドの牛などは、警笛を鳴らそうが足で蹴ろうが道の真ん中に陣取って頑として動かないときがしばしばあった。たしかに十億の人間に囲まれたインドの牛が人間を恐れていたのでは神経衰弱になってしまう。

しかしナミビアでは、肉食獣の出没も十分考えられる。人間だかライオンだか分からない影を見たらまず逃げるのが生きる道であろう。実際、年間に数千頭の牛がチータなどに襲われ、大きな経済的損失になっているらしいのである。

結局のところ二時間半近くを要して、約八十キロのDクラス道路を無事通り抜け、再びCクラス道路であ

る国道四一号線にたどり着くことができた。ここまでくればオプヲまでは残り三十キロ程度である。

「古人曰く、案ずるより生むが易しだな」とマシコ君は上機嫌である。国道四一号線はいま拡張整備事業の真最中であった。大型のブルドーザーが土埃を上げ、資材を満載したトラックとすれ違ったが、活気がある工事現場という印象がまったくない。十キロほどの工事区間で見かけた人間は車の運転手を含め五人。人口が少ないからといっても、これではいつ工事が終わるかまったく見当もつかない。オプヲに近づくにしたがって次第に人間の姿を見かけるようになった。そしてゆるやかな坂道の峠をひとつ越えると、ついにオプヲの町が眼下に一望できた。

「古人曰く、翼よ、あれがパリの灯だ、といった感慨だな」とマシコ君は痛く感激する。一番厳しい行程を乗り切ったという安堵感もあるだろう。三方を石ころだらけの丘に囲まれ、盆地の底のようなところに数百件の人家が散在しているのが見える。日本でいえば、あの新潟の山古志村程度の小さな町なのだが、いままでの泥の家が数件という集落から見れば、まさしく大都会である。

憧れのヒンバ族が暮らす地、カオコランドの中心地、オプヲへついにたどり着いたのだ。マシコ君に負けず劣らずわたしの胸の鼓動も高まるのであった。

終わりという町オプヲ

オプヲとはヘレロ語で「終わり」という意味だそうだ。まさしく辺境の町、ここより先には、もはや町らしきものはない、文字どおり終わりの町なのだ。地図上でこの町まで実線で示されていた道路の記号は、ここより北は四輪駆動車しか走れないことを示す破線に変わる。しかしこの町から東西南北に四本の道が伸びていることを見れば、この町が交通の要衝であることは十分覗える。

道路の両脇に建物がまばらに現われ始めたと思ったら、我々の車はもう町の中心部に乗り入れていた。ひどく埃っぽい町だ。それにすえたごみと牛糞の強烈な匂いが町中を覆っている。

「馬車の鈴さえ寂しく響くといった風情だっぺ、カワサキ君」

人通りは多いものの、何か物寂しく殺伐としたといってもいいような町の雰囲気をマシコ君は敏感に感じ

取り、東海林太郎が直立不動で謳う「国境の町」の歌詞を連想したに違いない。

道路が交差する町の中心の空き地に車を停めた。車から降りて、まず眼に飛び込んできたのは、二つの乳房も露に上半身裸で商店の前にたむろするヒンバ族の若い女性たち。日本であればお回りさんが青筋を立ててやって来て「軽犯罪法違反だ。逮捕する」と叫ぶに相違ないような格好である。わたしもマシコ君も、ヒンバ族との初めての遭遇に、思わず眼を奪われたが、まずはともあれ残り少なくなったガソリンの補給や水の買出しをしなければならない。

町といっても三十分も歩き回れば、すべてを見尽くしてしまいそうだが、一番にぎやかで人出が多いのは、南北に伸びる道路沿いに百メートルほどにわたって軒を連ねている商店街だ。

食料品、日用雑貨、衣類などを扱う店が数件ある。ＯＫグローサリーという小奇麗なスーパーマーケットはまだ開店して間もないらしく、黄色く塗られた外壁が原色の鮮やかさを保っている。ガソリンスタンドは欧州系のオイルメージャーのロゴマークと、ＷＥＬＬＣＯＭＥという看板が掲げられ、給油の機械もまだぴかぴかである。ここまで来るあいだにガソリンスタンドがある町では必ず給油に立ち寄ったが、売り切れ

だからよその店に行ってくれということが一度ならずあった。幸いそのガソリンスタンドで教えてくれた他の店で順調に給油できたから何事もなくここまで来られたのだが、ひとつの町にガソリンスタンドは一、二軒しかない。

入荷するまで二、三日待ってくれなどと言われたら眼も当てられない。それに長旅の果てだし、車はほこりだらけである。給油のついでにガソリンスタンドで車を洗ってもらうことにした。

マシコ君をガソリンスタンドに残し、給油と車の洗浄の間に、わたしは冷たいビールやら食料品を仕入れに行くことにする。今夜の夕飯は日本から持ってきた米を炊き、梅干や焼き海苔でさっぱりした夕食を食べる予定であるが、トマトやキャベツといった野菜が欲しい。マシコ君が玉子焼きが食べたいというので鶏卵も調達しなければならない。

まずは先ほど見つけた一番大きいスーパーマーケットに入ってみる。外の人出に比べ、中は以外にも閑散としている。それにやけに薄暗い。高い天井に蛍光灯が鈍く光っているが、外の強烈な日差しに慣れた眼を再調整するにはしばらく時間がかかる。

食品棚にはラベルが変色したいかにも古そうな缶詰類や埃がうっすらと積もった袋入りの菓子が並んでいる。当然のことながら生鮮食料品などといったものはない。店の奥には十キロ入りの小麦粉やトウモロコシ粉の袋が山積みされていたが、これが一番の売れ筋商品なのだろう。

鶏卵はレジ近くの冷蔵庫の中にハムとともに貴重品のように鎮座していた。結局、買ったのはこの卵とハム、南アフリカ産のマグロのトマト

ソース煮の缶詰と水である。酒はこのスーパーマーケットでは売っていない。酒の販売はナミビアでは許可制らしく、専門のボトルショップへ行かなければならない。

レジの娘に教えられたボトルショップはすぐ近くだった。店の軒先には木の長椅子が置かれ、四、五人の男たちがビール瓶をラッパ飲みしている。夕方とはいえ、まだ陽は高い。何人かが無遠慮にわたしの方をじろじろ見るが、無視してとりあえず店のドアを押す。

ドアを開けた瞬間、耳をつんざくような大音響が飛び込んできた。その上、中はスーパーマーケットよりさらに暗い。窓がないのだ。もうもうたるタバコの煙の中で黒い人影がうごめいている。十坪ほどの店の突き当たりに背の高いカウンターがあり、数人がそれにもたれかかるようにして、酒の壜を握っている。

一瞬、わたしは間違って飲み屋に入ってしまったのかと思ったが、カウンターの奥には赤く点滅する光に照らされた棚に、缶ビールやらウィスキーやらの壜がずらりと並んでいる。わたしはカウンターに肘を付いて呑んでいる連中を押しのけるようにして、カウンターの中の店員に金を突き出し、ビール缶を指差した。

文化果つる地といわれたオプヲも、外来文化が確実に押し寄せてきている。一切の思考をしびれさせてしまうような強烈な音楽もウィスキーやビールの味も、もともとここに住んでいた人たちには無縁のものだったはずだ。伝統的な自給自足の生活に慣れ親しんでいた彼らが、わずかの現金収入に恵まれたのをきっかけに酒の味を覚え、やがて破滅していくのだろうかと思うと暗澹たる気持に

なってくる。
「お前ら、昼間から飲んだくれていちゃダメじゃねえか」
ビールを受け取って外へ出るときに、独り言のように声を出してみたが、彼らはとろんとした眼で壁を見つめているばかりだった。

マシコ君が来るまで道路わきに腰掛けて、しばらく路上を行き交う人たちを眺めることにする。先ほどはトップレスのヒンバ族の娘に眼が言ったが、しばらく眺めていると派手な模様の長いワンピースを着た恰幅の良いオバチャンたちが数人、買い物袋を下げてやってきた。これはヘレロ族である。
ヒンバ族とヘレロ族は、まったく同じ言語を話し、かつては隣り合って同じような暮らしをしてきたといわれている。両方ともこの地方に暮らす牧畜の民であり、牛や羊などの放牧をしながら、サバンナが広がる乾燥した風土にうまく適応した生活をしてきた。しかし、十九世紀に西洋文化が流れ込むと両者はまったく違う道を歩み始める。それがもっとも鮮明に現れているのが女性の服装なのである。

ヒンバ族は西洋文化の受け入れをかたくなに拒否し、伝統的な文化を固守する道を選んだ。ヒンバ族の女性は、近隣の部族が洋服を身につけ

ることを軽蔑し、なめした羊皮のスカートを腰にまとっただけの伝統的な装いを守る道を選んだ。

一方、白人の入植とともに彼らの生活に憧れ、伝統衣装を捨て、ビクトリア朝時代に流行っていた身体の露出を極端に制限する服を着るようになったのがヘレロ族の女性である。カラフルな模様と足首までの長いスカートを着て、頭には牛の角をかたどった横長帽子を被っている。

両部族の女性の格好は「お互い、あんまり意地を張るなよな」と言いたくなるほど両極端である。お互いがお互いの格好を強く意識して、意地を張り合い、百年経った今では引っ込みが付かなくなってしまったのではないかとさえ思えるのだ。

町には西洋風のジーパンとTシャツ姿の女性もたくさん見かける。トップレスとビクトリア朝とTシャツが渾然となって入り混じっているところが面白いところだ。

この例から見れば、衣服は風土に適応し、身体を保護するためだけのモノではないということが明らかである。身体に直接装う衣服は常にそれを着る者と共にあり、他者からのまなざしに対するその人の重要な表現手段の一つになっている。

日本も明治の文明開化や敗戦後の米国の占領時に、大量の西洋文化が怒涛のごとく流れ込み、それまでの伝統文化を一挙に覆すような大変革の波を潜り抜けてきた。その結果、いまや和服姿の女性は、結婚式か正月でなければ眼にすることもなくなった。

日本民族は手のひらを返すごとき変わり身の早さで、西洋文化を取り

入れ、今日の繁栄を築いたのだが、果たしてそれが良かったかどうか。
　そんなとりとめもないことをかんがえながら、ぼんやり路上を眺めていると、給油を終えたマシコ君がわたしの目の前に車を横付けする。眼を上げると車は埃だらけで、洗った様子はない。
「マシコ君、洗車しなかったのか」
「いや驚いた。ウオッシュと言って車を指差したんだが、ぐちゃぐちゃ言っているばかりだっちゃ。ホースで水をかける身振りをしてみたが通じない」
「英語が通じないのか」
「いや、そうじゃない。よくよく聞いてみると、洗ってやるから水を持って来いということだっぺ」
「水を？・・・・」
「洗車する水はないと・・・・・」
「本当かい。恐るべし、オプヲだな。ここでは水は血よりも濃いんだな」
　かつてイザヤ・ベンダサン氏は「日本人は、水と安全はタダだと思っている」と言った。確かに我々にとって見れば、水は「湯水のごとく使う」ものであり、いつでも手軽に大量に使えることは当たり前の感覚になっている。しかし、ナミビアでいかに水が貴重であるかは、その乾燥した大地をわずか数日間旅してきた我々にも十分理解できる。
　買い物は過不足なくできたし、ガソリンも満タンだ。洗車はあきらめて、今夜のロッジに引き上げることにする。冷たいビールが手に入ったことを報告すると、マシコ君の頬が緩む。今夜はマシコ君ご所望の和風玉子焼きとキャベツのみそ炒めで一杯やり、海苔と梅干でおにぎりを作ろうなどと考えていると、からからに渇いた喉に唾液がどくどくと湧き出してくるのであった。

ヒンバ族はどこだ

　翌朝早速、ヒンバ族の村を訪問することになった。ガイドを雇うか、地元の旅行会社が催行するツアーに参加すれば確実で簡単だが、それでは面白くない。観光化され、客慣れした部落に連れて行かれるに決まっている。
　レンタカーを自ら運転し、簡単な道路地図を頼りに、故障や燃料切れの不安を抱えながらも、何とか「地の果て」といわれるオプヲまで二人だけでやって来たのだ。どうせなら一般の観光客があまり立ち入らず、俗化されていない純粋のヒンバ族の

文化に触れたいではないか。

言葉は「こんにちは」と「ありがとう」が分かればとりあえず何とかなる。幸い『ロンリー・プラネット』という旅行ガイドブックのナミビア編に、一ページだけだがヒンバ語の簡単な会話が載っている。

それによればハローは「ジュケ」、グッドモーニングは「ワ・ペンダカ」、サンキューは「オクヘパ」である。二人でこれらの言葉を呪文のように繰り返しながら、ヒンバ族の密度が濃いといわれる北の方向にとりあえず車を走らせる。四輪駆動の車でなければ難しいとロッジの従業員に教えられたのだが、とりあえず進めるところまで行き、後は歩いて行くしかないだろうということになった。

オプヲの町を後に、ひと山ふた山越えても、人影らしきものはトンと見えない。見晴るかす限り葉を落としたアカシアやモパネの疎林が広がっているだけで、背の高い木もなく、家でもあればすぐ目に付くはずなのだ。高いところから眺めてみれば、部落らしいものが見つかるのではないかと、小高い峠で車を降り、二人して双眼鏡で探してみる。

「高き屋にのぼりて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり」といった具合にならんかね。

マシコ君は仁徳天皇御製の歌を引き合いに出して、立ち上る煙を探している様子だ。

「民のかまどは貧しいのか、煙は見えないな。彼らは聖なる火をけして絶やさないとガイドブックには書いてあったから、人家があれば必ず煙が出ていると思うよ」

すぐにでも見つかるだろうという当てが外れて、方針を転換することにする。ヒンバ族とて水がなければ生きられない。そうすると山と山の間、谷筋を探したほうが良いということになる。地表を流れる水は無いのだから、井戸か川床の伏流水に頼

っているはずである。

峠から眺めてみると、なだらかな山がうねるように起伏する中を縫うようにして白茶けた川床を見せる谷筋が見える。そして心なしか周囲より緑が濃い。あのあたりだろうと見当をつけ、峠を下って行く。

ヒンバ族は元来はもっと北方の湖沼地帯の部族だという。なぜだかわからないが、十九世紀の初めになって彼らは南に向かって家畜を追い、この地にやって来た。ヒンバ族は遊牧という生活様式をもって、この極端に水に恵まれない土地で暮らしてきたのだ。

しかしこの地におけるヒンバ族の歴史は暗い。先住民のナマ族に襲われ、家畜をことごとく略奪され、狩猟採集生活を強いられた時代もある。誇り高い遊牧の民にとってこれほど屈辱的なことはない。ヒンバという呼び名は、その時代に周辺の部族が彼らを指して呼んだ、「乞食」という言葉から始まっているといわれる。

しかしヒンバ族は再び立ち直る。わずかに残った家畜を、努力に努力を重ねながら増やしていくのだ。一九七〇年ごろの調査では、牛の数は十三万頭、羊とヤギは三十万頭といわれ、アフリカで一番豊かな遊牧民といわれるまでに勢力は回復する。

しかしヒンバ族の苦難はこれで終わらなかった。一九八〇年代にこの地を襲った大干ばつによって、家畜は全滅してしまう。追い討ちをかけたのが、ナミビア独立戦争だ。ナミビアを不当に占領していた南アフリカ軍と現政権の前身である南西アフリカ人民機構が独立をめぐってこの地で激しい戦闘を繰り広げる。

ナミビアが独立し、この地に平和がもたらされて十五年、ヒンバは再び家畜を増やし、安定した生活を取り戻しつつあるというが、いったいどんな暮らしを送っているのだろうか。西洋文化の受け入れを拒否し、ヒンバ独自の伝統的な文化をかたく

なに守って生きているというが、我々が急に彼らの部落を訪れても果たしてすんなり受け入れてもらえるのだろうか。

人食い人種でもあるまいから、殺されて食われることもないだろうが、袋叩きに会い、身ぐるみはがされて放り出されるぐらいのことは覚悟しなければなるまい。マシコ君は、毎朝のジョギングを欠かさず、日本各地のマラソン大会に毎月のように参加しているということだから、逃げ足はわたしより速いことは間違いない。いざとなったらわたしが大立ち回りを演じている間にマシコ君が助けを求めるという展開になるかもしれない。

そんなことを考えながら、峠を下っていくと、道は広い川床に達する。流れている水はまったくないが、周囲に比べ木や草は緑が濃く、明らかに水位の高いことをうかがわせる。車を降りて周囲を探索してみると、いくつもの足跡が見つかった。

「カワサキ君、この足跡は間違いなく人間のものだっぺ。それにまだ新しい」

マシコ君は探偵よろしく足跡を覗き込み、分析する。

「マシコ君、この糞を見てくれ。湯気が立っているとは言わないが、まだ水分を含んでいて柔らかいぞ」

「ふむ、牛の糞に間違いなかっぺ。誕生後、一日と見た」

車を残して、ここからは歩いて足跡を辿るほかはない。足跡は川床の砂地にはっきりと残っており、川岸の疎林の中に続いている。マシコ君はヒンバ族へのお土産品を、わたしは水と食料品、それに念のために懐中電灯をリュックサックに詰めて出発する。車を離れて歩き始めてみると、なんとも頼りない気分だ。オプヲの町からはすでに十キロ以上離れているし、周りは一面の石ころだらけの荒地が広がるだけで文明の匂いはまったくない。人工的なものといえば、人間が踏み固めたにちがいない細いトレースが確かに続いていることだけだ。

頭の上からは既に勢いを増し始めた太陽が容赦なく照りつける。小さな葉をまばらに付けた木がところどころにあるのだが、とても日よけになるほどの繁みはない。汗がひっきりなしに滲み出てくるが、乾燥しているのですぐ乾いてしまうのが救いだ。

三十分ほど歩いたが、ヒンバの部落どころか人の気配もまったくない。

いい加減な予想に基づいて、勢いだけで行動しているのだから、ちょっとつまずくとすぐに二人とも不安になってくる。

「ちょっと待て、カワサキ君、川からだんだん遠ざかっているみたいだし、大丈夫かな」

マシコ君は家を出る時に、愛妻から「カワサキさんの尻馬に乗って危ないことをするのは絶対止めなさい」と念を押されてきているのを思い出したのかもしれない。

「いや、川にあまり近いと、雨季には家が洪水に襲われる恐れがある。それに蚊が多くて住みにくいんじゃないか」

マシコ君を安心させるというより、自らを納得させるためにいい加減な推量を口にしてみたけれど、わたしとて確信があるわけではない。

「俺の町に大きな縄文遺跡が発掘されたけど、山の付け根の南面の斜面だった。日当たりが良くて水はけも良いというのが肝要なんだ。風水の思想でも、山を背にして川を前にするのが住居の理想だという。さすれば、マシコ君、あのあたりがくさい」

はるかかなたの山裾を指差して、マシコ君を鼓舞するのだが足取りは重い。温帯モンスーン地帯の日本や中国では、道に迷った挙句、知らないうちに桃源郷に迷い込んでしまった、ということもありうるのだが、ここでは野垂れ死にするだけだ。

目の前の起伏の向こうにヒンバの部落が隠れているに違いない、あそこまでだとこころを奮い立たせて前進するのだが、その起伏の頂点に立ってみればまた次の起伏まで石ころだらけの荒地が見えるだけである。

いくら歩いても景色がまったく変わらないというのは、遠近感が感じられないだけに息苦しささえ感じる。

「カワサキ君、これではきりがないっちゃ」

炎天下を一時間以上休みも取らず、石に足を取られながら歩くと、さす

がに疲れてくる。それに二人でかわるがわる飲むニリットル入りのペットボトルの水は、すでに半分が消えている。

「もう十五分歩いて何もなかったら引き返そう」

そうわたしが言った時だった。動物の鳴き声のようなくぐもった声がどこからともなく聞こえてきた。

「マシコ君、牛がいる？」

ペットボトルに口をつけて水を飲んでいたマシコ君には聞こえなかったらしく、二人で再度耳を澄ます。

しかし再び辺りは静寂に包まれ、何の物音も聞こえない。気のせいだったのかと思い始めた瞬間、二人の男の子が湧いて出るように目の前に現れた。話し声も足音もまったく聞かなかっただけに、二人とも不意打ちを食らったようなものだ。

とっさのことで、挨拶の言葉も出てこないマシコ君は「おっす、おっす」と満面の笑顔で話しかける。一人は小学校低学年ぐらい、もう一人は幼稚園といったところであろう。

真黒い顔を覗き込んでみると良く似ている。おそらく兄弟だろう。

兄の方は半ズボンに上着を引っ掛けているが、弟の方は腰に巻いた紐に陰部を隠す布切れを垂らしただけである。

二人の子供は、異星人にでも遭遇したかのように、あっけに取られた様子でこちらを見上げていたが、マシコ君の笑顔で、どうやら害はなさそうだと見て取ったらしい。

わたしも「こんにちは」を意味する「ジュケ」を繰り返しながら、笑いかけるのだが、どうも挨拶の言葉は通じていないようだ。それではと、小枝を拾い地面に家の絵を描いて、「どこにある」と尋ねてみるのだが、まったく通じない。マシコ君が頭の両側で人差し指を突き出し、「モーゥ、モーゥ」と牛の鳴きまねをしてみる

のだが、あまりに演技が稚拙で、子供たちには無視される始末である。
　しかし二人の子供に遭遇したことで、この道を辿っていけば、ヒンバ族が住んでいる所に行き当たることは間違いない。我々の来た方へ向かう子供たちを手を振って見送り、再び前進を開始する。
「最初に出会ったのが幼い子供だから良かった。これで槍なんか持った大きな男が突然現れたらビックリしただろうな」
「あいつらはどこかに身を隠して、こちらの様子を覗っていたんだっぺ。急に現れたよな」
「変なやつが来るぞと警戒していたんだろう。こんな所で外国人に逢うこともないだろうからな」
「勉強にあくせくすることもないんだろうな。ガイドブックには初等

教育就学率九十パーセントと書いてあったけど、ここからオプヲの学校まで歩くのは大変だっぺ」
「ナミビア政府もヒンバ族の子供の教育なんて、まったく視野に入ってないんじゃないかな」
　石ころだらけで歩きにくいことも、頭の上からじりじり照らされて暑いことも、いままでと少しも変わっていないのだが、先の見通しがつくと現実の苦労はなんとか耐えられる。
「ぼっ、ぼっ、ぼくらは少年探偵団」とマシコ君も俄然元気になった。
　洟垂れ小僧に遭ったから、次はかわいい女の子の番だ、などと冗談を飛ばし合いながら勢い良く歩いていくと、なんと本当に向こうから二人の女の子が歩いてくるではないか。しかもそのすぐ後ろには、アフリカの住居の特徴である円錐形の屋根が

見える。

リンゴの乳房

頭からつま先まで大地の色をまとった娘だった。最初は赤茶色のストッキングのような布を身につけているのかと思った。しかし近づいてみると、それは間違いなく彼女たちの肌だ。なめした羊皮のスカートを腰にまとっただけの伝統的なヒンバ女性のいでたちである。

赤茶色の肌の色は鉄分を含んだ赤い粘土質の土に牛脂を混ぜた「アラミ」というローションを全身に塗っているからだ。強い日射と乾燥から肌を守るための知恵なのである。

年の頃は恐らく十代の半ば、日本でいえば中学生ぐらいだろう。その肌はきめ細かく滑らかで張りがあり、陽光を浴びて鈍く輝いている。胸からはお椀を伏せたような見事な半球状の硬く引き締まった乳房が盛り上がり、その上には果物の実を思わせるような乳首が突き出している。そしてたすき架けのように背中から肩を通って胸に回された二本の紐が二つの乳房の谷間で交差し、健康そうな乳房をいっそう強調している。

先ほどの「ハロー」を意味する「ジュケ」と言う言葉は男の子に通じなかったので、今度は「おはよう」のヒンバ語である「ワ・ペンダカ」を試してみる。すると一人のかわいい子から挨拶が返ってきたではないか。彼女は、はにかみながら確かに「ワ・ペンデュック」と応えてくれたのだ。

「おっ、マシコ君、通じたみたいだぞ」

マシコ君はこの時のために日本か

ら用意してきたプレゼントをリュックから早速取り出し、「ワ・ペンデュック」と言いながら手渡す。百円ショップで買ってきた手鏡である。ヒンバの女性へのプレゼントとしてはこれが一番喜ばれるに違いないというマシコ君の判断である。

美しく装いたいという女の気持ちは古今東西、変わることはあるまい。昔の日本の母は、嫁ぐ娘に必ず手鏡を持たせたという。鏡が女の命ならば、俺はヒンバの女に命を渡すのだ

というマシコ君の思いは確かに通じた。二人の女の子は真剣な表情でかわるがわる鏡を覗き込んでいる。

その間に我々も女の子のいでたちをつぶさに観察する。胸の次に目が行ったのが髪の毛だ。見たものをすべて石に変えてしまうというギリシャ神話の女神メデューサの蛇髪を思わせるように縄状に編んだ髪には、肌と同じ赤茶色のアラミローションがたっぷり塗りこまれている。そして頭の上には、牛の皮で作った「エレンベ」という飾りがバニーガールのヘアバンドのように乗っている。さらに、首、手足、腰には意匠を凝らした装飾用のリングをたくさん巻いている。

「なかなかおしゃれだな」

マシコ君は腰のリングが象牙の加工したものではないかと熱心に見つめている。

「これはもはや裸族なぞと侮れねぇっぺ。化粧や髪型、それに装身具のどれをとっても立派な文化だ」

我々が裸族に対して持つイメージは「未開」あるいは「野蛮」である。近代西洋文化が世界を席巻した今では、身体を覆う衣服を身に着けずに人前に出ることは、悪であり恥ずかしいことであるという考えが地球の隅々まで浸透している。

世界の西欧化は植民地政策の重要な柱だったが、中でも衣服の着用はその指標のひとつだった。行政官は裸で人前に出ることを厳しく罰し、宣教師はアフリカ人の信じる神の否定とともに裸体に対する羞恥心を叩き込んだのである。ウガンダでは裸体でいることは死刑に値するという命令が出されたし、ケニアやタンザ

ニアでは衣服を着てくる子供だけに教育を行ったのである。

和魂洋才と口では言いながら、魂までもしっかり西洋化されてしまった日本でも事情は変わらない。軽犯罪法二十号によれば「公衆の目に触れるような場所で公衆に険悪の情を催させるような仕方で尻、腿その他身体の一部をみだりに露出したもの」は、拘留または科料に処せられるのである。

「公然とわいせつな行為をした者は、六月以下の懲役、もしくは三十万円以下の罰金又は拘留、もしくは科料に処する」とする公然猥褻罪もある。このような法律の前提は、「裸体はいたずらに性欲を刺激または興奮させ、普通人の通常な性的羞恥心を害し、善良な性的道義観念に反する」という考え方だ。

しかし、いまこうやって太陽と空気を着ている若い娘たちを見ていると、近代西洋文化の価値観が偏屈で神経症的にさえ映るのである。赤茶色に輝くつややかな肌と豊かな装飾品だけで、彼女たちはため息が出るくらい美しく、それだけで十分に完成された姿であり、もはやいかなる衣服も蛇足に思えてくるのである。彼女たちの肌はそれだけで美のディスプレイであり、いかなる衣裳よりもそれは美しい。

同じ裸体でも、このナミビアの辺境の荒地と日本の町で見るのではまったく違う。いま目の前にいるヒンバの若い女性の裸体に何時ものような「ハダカ」を感じないのは、彼女たちに裸でいることが他者にとってどういうものか、という自覚や意識が全くないことに起因している。いいかえれば身体のなかの極めてプライベートな部分と社会的に解放されてしかるべき部分をどのように区分けするかという身体感覚は、その帰属する文化によって違うのである。

彼女らから見ればいわゆる文明人

の衣服や装飾こそグロテスクであり、身に着けることなど想像するだけで恥ずかしいことなのだろう。つまり、身体であれ衣服であれ絶対的な美の基準など、どこにも存在しないのではないだろうか。

裸体が性欲を刺激する悪徳であるとして衣服を身に着けた文化は、その衣服によって皮膚はなおさら感度を増し、性器化していった。フランスの詩人マラルメがいう「包み隠すエロチック」というやつだ。

「マシコ君、彼女たちと一緒に写真を撮りたいな」

カメラを取り出してマシコ君に預けるが、慎重派のマシコ君は「カワサキ君、未成年だっぺ。勝手に写真撮ったら、親や部族の長老が怒るよ」などと少し腰が引けた様子だ。

「マシコ君、初潮があって、おっぱいが大きくなればもう一人前の女だよ。日本の過保護で幼稚な中学生のガキと違うよ」

わたしは二人の女の子の間に割って入り、肩に手を回してポーズを取るが、二人とも嫌がるそぶりは見せない。マシコ君は彼女たちの前でカメラをひらひらさせ、「写真撮ってよかっぺ」と同意を求める。

わたしがカメラのほうを指差すと、マシコ君がプレゼントした鏡が効果を発揮したのか、二人とも素直にカメラの方を見つめている。あまりに素直なので、わたしもちょっと調子に乗り、ひとりの女の子のちょうど手のひらに収まりそうな小振りの胸の丘に手を添える。

「おいおい、カワサキ君。それはちょっとやりすぎだっぺ」

ファインダーを覗きながらマシコ君があきれた、いや、うらやましそうな声を出す。

「マシコ君、豊かな乳房は彼女らの一番の誇りだよ。イヤだと言われないうちに早く撮ってくれ」

「恥ずかしがってるべ」

「いや、嬉しがってるんじゃないかな」

「嬉しがってるのはカワサキ君だっぺ」

恥ずかしがっているのは、マシコ君やわたしだったかもしれない。彼女たちはあまりにあけすけで、あっけらかんとしているので、かえってこちらが照れてしまうのだ。彼女たちはデジタルカメラの液晶画面に写っている友達の姿をお互いに指差して、冷やかしてでもいるのだろうか、二人とも白い歯をこぼして屈託なく笑う。

言葉は通じないがせめて名前だけでも聞いておこうと、自分を指差し「カワサキ」、マシコ君を指差し「マシコ」と大きな声で繰り返す。はじめは怪訝な顔をしていたが何回か繰り返すうちに、彼女たちにも名前のことだと分かったようだ。「カワサキ」と言って自分を指し、次にひとりの女の子を指すと「チャンベ」という答えが返ってきた。もうひとりは「カベラ」と応える。

「マシコ君、女の子が家の男以外の男に名前を教えるということは求愛を受諾したということだ」

先ほどマシコ君が仁徳天皇御製の歌を引き合いに出したのが記憶にあったので、わたしは万葉集巻頭の雄略天皇の歌、「菜摘ます子家告らせ名告らさね」を思い出す。

「カワサキ君、あれは仁徳さんのプロポーズだと学校で習ったっぺ。キミはこの娘たちと結婚してここで暮らせよ」

「十五歳ぐらいまでに親が結婚相手を決めてしまうというから、もうすでに婚約済みだろう」

「太った牛を十頭も差し出せば、親の気も変わるっちゃ」

娘たちを目の前にして、言葉が通じないのを良いことに、二人で勝手なことを言い合い、笑っていると、娘たちが鏡をマシコ君に差し出す。マシコ君は慌てて、それはお土産にあげると言いながら後ずさりするが、娘たちは困ったような顔をしてお互いに見合っている。わたしがチャンベの両手を取り、鏡を二つの手のひらの間に包み込むように入れてあげる。マシコ君がそのまま行っていいのだというように、右手を上げて別れのポーズを示す。わたしも二人が向かおうとしていた方向を指差し、カベラの肩を軽く押してやる。

「オクヘパ」とカベラが言うと、二人の娘は弾けるように駆け出した。わたしもマシコ君も、「オクヘパ」と大声で叫びながら、彼女たちの背中に向かってしばらくの間、手を振っていた。

ヒンバのお屋敷訪問

外来文化を頑なに拒否するヒンバ族などと聞き及んでいたため、疑い深く排他的な部族なのかと恐るおそる訪ねてみれば、案に相違して愛想があり、なかなか友好的ではないか。この調子なら大歓迎とまで行かなくても追い返されることもあるまいと早速、娘たちの部落を訪問してみる

ことにする。

しかし近づいて見ると住居の数は思ったより少ない。円錐形のちびた草葺屋根の家が五メートルほどの間隔を置いて十件ほど散在しているだけだ。これでは部落というより、多世代同居の屋敷といった雰囲気だ。どの住居も家というよりむしろ小屋といった方が近い。

ヒンバの生活様式である遊牧は、家畜に与える草を確保するため広い土地を必要とする。一か所に沢山の家族が集中すると、遠くまで遊牧に出なければならず効率が悪い。そこで血縁で結ばれた数家族ずつに分散して暮らすことになるのである。

屋敷の前には畑らしきものが広がっているが乾季のこととて、何も植わっていない。屋敷を囲う塀もないし、畑を横切って屋敷内に立ち入ろうとすると、ズボンと半袖のニットシャツを身に着けた青年が棒を持って現れた。今度こそ追い払われるのかもしれないと、二人して身構えていると、片手を挙げて「ハロー」と白い歯を見せ、握手まで求めてくるではないか。青年の手を握りながら「ハロー、英語が話せますか」とわたしが問いかけると「ああ、少しだけど」と青年が応える。

これは予想もしていなかった幸運である。先ほど出会った子供たちには身振り手振りで、言いたいことがなんとか通じないかと悪戦苦闘した。例え二言三言しかしゃべれない英語であっても、まったく通じない言葉に囲まれている時には干天の慈雨みたいなものだ。

子供を抱いた母親らしき女性がじっとこちらを見ているが、まずはともあれ、この家屋敷の長老に仁義を切るのが礼儀というものであろう。この青年に案内を頼み、通訳もしてもらえれば、これに越したことはない。「ゴッドファーザーに挨拶した

い」と言うと、青年は屋敷内を横切って一番奥の小屋の方に我々を案内してくれた。どこからともなく幼い子供たちが湧いてくるように現れ、ものめずらしそうにこの突然の訪問客の後をついてくる。

長老は小屋の前の地面にちょこんと腰をおろしていた。顔のしわこそ目立たなかったが、胸から腹にかけての皮膚は張りを失い、厳しい環境の中で長い年月を生き抜いてきたことを窺わせる。

「はじめまして、我々は日本から来ました」

わたしが挨拶しながら右手を差し出すと、長老は弱々しくわたしの手を握り返し、口の中で何かもぐもぐと呟いた。

「お歳はいくつですか」

青年にもこの程度の英語は分かるだろうと通訳を頼む。しかし、しばらく長老と掛けあっていた青年は、わたしの方を振り向くと「そんなことは知らんと言っている」と申し訳なさそうに答える。

カレンダーは使わないだろうし、ましてや年金制度があるわけでもないのだから、年齢など記憶していても無意味なことだ。考えてみれば日本人だって、西暦を使い始めたのは明治以後なのだ。それに一年たったら一歳年をとるという考え方は普遍的なものではない。

今度はマシコ君が、子供は何人いるか聞いてくれと青年に頼む。

「沢山いる。何人だか忘れた」

長老はこの男はなんとおろかなこ

とを聞くのだと言うような目でマシコ君を見つめている。
「マシコ君、これは少しボケているのかもしらん。いくつぐらいに見える」
「八十歳位だっぺ。だけど実際より老けて見えるのかもしらん」
　マシコ君は、リュックからガスコンロなどに着火するとき使う柄の長いライター「チャッカマン」を取り出し、「プレゼント」と言いながら長老に手渡す。ヒンバ族の文化を紹介した文化人類学者によれば、ヒンバ族は敷地内の聖なる火をけして絶やさず、その火を通じて祖先の霊といつも交信するのだという。マシコ君の考えはこうだ。ヒンバ族はマッチを持っていない。一度火が消えてしまうと、再び火を熾すのが大変である。だからいつも火を絶やさないようにしておけという戒めが、祖先を大事にする道徳という形に転換されて伝えられる。いつでも手軽に火が点けられるライターは彼等にとって最高のプレゼントではないか。

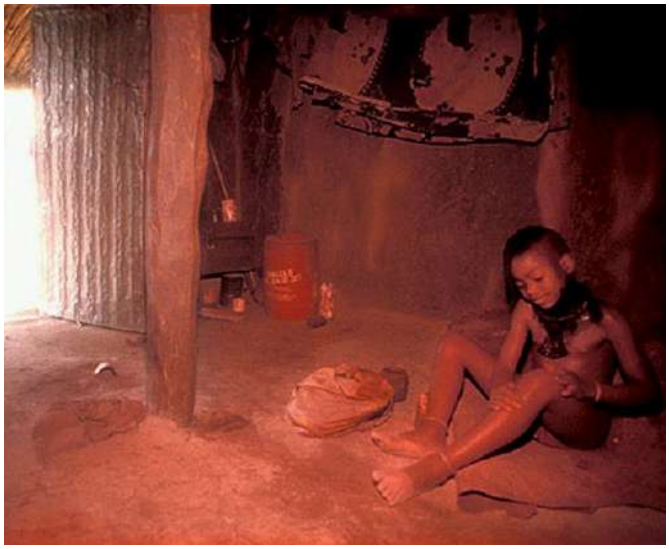
技術屋のマシコ君らしい合理的な思いつきだが、肝心のライターを受け取った長老は、それがなんだかまったく分かっていない。マシコ君が包装を破り、その紙に火を点けて見せる。どうだ、すばらしい文明の利器だろうと、マシコ君は得意顔なのだが長老は一向に嬉しそうな顔をしない。それどころか、隣の子供が試してみようとすると、鋭い声でしかりつける。
「マシコ君、評判悪そうだよ。火を熾すのは簡単にできるんじゃないか。それに子供が持ち歩くと、この乾燥下では火事の危険もある」
　結局、百円ショップのライターは通訳の青年に渡すことにした。挨拶も済ませたし、長老が家の中に引っ込んだのを機に、我々は屋敷内を見学させてもらうことにする。通訳として期待した青年は町に行く用事があると言って出かけてしまったが、屋敷内は遠慮なく見て回ってかまわないと言ってくれた。

長径が百メートル、短径がその半分程度のほぼ長方形の敷地を、子供たちと犬を従えて探索を開始する。しかし探索といっても登呂遺跡の竪穴式住居群程度の住宅が九軒、作業小屋が二か所あるだけである。それに、屋敷に隣接して一反歩ほどの家畜囲いがあるが、いまは空っぽである。

典型的な住居は直径三メートルほどの円筒形の泥壁に急勾配の円錐形の草屋根を乗せたものだ。壁は長さ二メートルほどの木の幹を地面に突き建て、その隙間を泥で塗り固める。屋根は細い木の枝を笠のように円錐形に組み合わせ、その上に藁を被せた構造である。大人ひとりが屈んで通り抜けられるほどの出入り口が付いている。建材として利用されている木は近くの川辺林から採取してきたものであろう。この住居なら道具さえあれば、木を切り出すのに一日、壁塗りに一日、屋根葺に一日の合計三日でわたしにも作れそうだ。

作業小屋は四隅に柱を建て、日除けのために天井を木の幹で覆ったもので壁はない。我々が訪ねたときは、天井から吊るした瓢箪容器を、中年の女性が繰り返し揺すっていた。中にはヤギの乳が入っており、凝固させてヨーグルトを作る最中だった。住居の中を覗いてみたいが、空き家に断りなしに入り込むのは気が引ける。先ほどから子供たちの母親らしき女性二人が、盛んにこちらの騒ぎを気にしている様子なので、その女性たちの家を見せてもらうことにする。

彼女たちが出入り口の壁に寄りかかっていた家はトタン屋根だった。形も円形ではなく四角の壁であるが、基本的な作り方は一緒だ。彼女たちは二人とも背が高く、百七十八センチあるわたしと肩を並べるぐらいだ。先ほど十代の娘の出で立ちをとくと拝見した後なので、むき出しの胸にはもはや驚かないが、子供を育てた母親の大きな乳房がしなびて垂れ気



味なのは、いささか興趣をそぐ。
ここでもマシコ君の持ってきた百円ショップの鏡が絶大な威力を発揮する。恐らく二人とも三十代と思われるが、鏡を覗き込んだ瞬間、にやりと笑って満足そうに目を細めた。
家の中を指差して、入ってもいいかというと、出入り口をふさいでいた体を脇に寄せてくれた。中は四畳半程度で土間のままである。窓はなく、光が入ってくるのは、出入り口だけなのでうす暗い。
出入り口近くに火を燃やした痕があった。夜は冷え込むので暖を取るための焚き火であろう。寝具と思われる敷皮が一枚、空き缶がひとつ、屋根からぶら下がっている干し肉数切れ、これが小屋の中にあるすべてである。
調理は家の外でするらしく、水を入れるポリタンクや鍋などは家の前に置かれていた。
「マシコ君、これだけ何にもないと、見事としか言いようがないね」
「古人曰く、『足るを知る』だ。足るを知る者は貧しいといえども富めりということだべ」
「雨季と乾季で居場所を変えるというから、あんまりモノを持っていると、かえって不便なのかも知らん」
「企業の宣伝に乗せられ、物欲に支配されている我々の方がかえって不自由なのかもしらん」
ここには電気もないし、水道もない。生きていく上で必要なぎりぎりのモノしかない。乾燥した荒々しい自然の中で、ヒンバの人たちは遊牧という受動的な生き方を選び、自然に引きずられるようにして生きている。
貧富を問えば、徹底的に貧しい。彼らの唯一の財産である家畜が遊牧に出かけていて、屋敷内にいなかったこともその印象をなおさら強くし

た。

しかし行きずりの旅人の印象で確かなことを言うわけにはいかないが、ヒンバの人たちから受ける印象は貧しいが悲惨ではない。

先ほどからまつわり付いて来る子供たちは、せいぜいぼろ布のような服を着ているだけで、真っ裸に近い子さえ何人もいる。ゴムマリのように腹だけ膨れた子もいて、栄養状態が悪いことをうかがわせるし、化膿した傷口を手当もしてもらえず泣いている子もいる。しかし彼らは、母親や兄弟に囲まれ、時にはいさかい、時には助け合いながら溌剌と走り回っている。

母親たちは水を汲み、たきぎを拾い、ヤギの乳を搾り、一日二回の食事を作るが、多くの時間は井戸端談義ならぬ日陰談義に興じている。

我々日本人の生活もついこの前までは同じようなものだった。井戸からつるべで水を汲み、薪で飯を炊くのが幼い日の日常だった。電気こそあったけれど、電気製品は裸電球と真空管ラジオだけだったし、電気を点けるのはもったいないというのが祖父の口癖だった。そしていつもひもじかった。

日本人はその類まれな勤勉さで世界に冠たる豊かな生活を手に入れた。二十四時間営業のコンビニ、完全冷暖房、コンピュータネットワーク、そして心臓を動かすためだけに続けられる医療。我々はいま多くのモノに囲まれ、物質的には豊かになっても、そのどのモノとも切実な関係を作り上げられない。陶器の肌を爪で掻くような空しさが、豊かさの影に静かに忍び込んでいる。

いま人間の持つ欲求の一部分だけがあまりに肥大化し、かえってそれに我々は振り回されているのではないのかと複雑な心境に陥らざるをえない。自然のリズムから遠く離れ、

昼夜の別なく「時間」に追い立てられ、飽食の果ての成人病に悩み、テレビの音がないと落ち着かない生活は、はたして豊かなのだろうか。

しかしわたしは科学文明を排斥し、自然に帰れという単純な自然賛美派にはもとより与しない。「原始共産制」など幻想に過ぎなかったことは、いまや文化人類学の知見で明らかだ。理想としての自然の楽園も存在しない。「自然に帰れ」などと叫ぶのは、自然を制御できた後の、コンクリートジャングルに生きる、都会の人間の発想なのである。

だからヒンバの人たちの自然状態に近い生活を、わたしはそのまま丸ごと肯定している訳ではない。割礼の跡が化膿し、発熱している子供を見れば、抗生物質があれば助けてあげられるのにと思う。子供には十分な栄養と教育の機会が与えられなければとも思う。ヒンバの人たちが、外の世界に目を閉ざしていたこの百年で、世界はあまりにも急激な変化を成し遂げた。もはやその変化に無頓着でいることは不可能だろう。

ヒンバ族の聖地であるこの地方に、大規模なダムを造る計画が既に進行中であり、大きな論争を呼んでいるという。反対するヒンバ族をよそに、彼らの文化など五年もすれば消滅するとナミビア政府役人はうそぶいたという。

「開発」のために人が流れ込み、観光客が訪れ、貨幣経済がヒンバの生活に浸透し始めていることは間違いない。町ではボトルショップで酔っ払うヒンバの男を見かけた。胸に下げているオフンバという美しい巻貝のアクセサリーは、女性の生殖能力を示すシンボルであり、親から子へと受け継がれる貴重な財産なのだが、わずかな金と引き換えに観光客に売り渡してしまう女もいるという。

どうすればいいのか、よそ者で行

きずりのわたしが安直な結論を出せるわけもない。

ヒンバ族自身の中から傑出したリーダーが現れ、この土地に根ざした叡智をもとに、将来を構想し、外の世界から何を受け入れ、何を守ってゆくか決めるしかない。

先進国からの安直な援助は、根を下ろさない草花のようなものだ。「野蛮」という言葉の代わりに「発展途上国」という言葉を置き換え、「援助」の手を差し伸べても、それは我々が既に行き詰まりを迎えつつある「発展」の発想を彼らに押し付けることにしかならないだろう。

我々が最初に訪問したこのヒンバの屋敷には一組の長老夫婦、四人の母親、十七人の子供がいた。彼らと我々では生き方はまるで違う。しかし、彼らも我々と同じように、喜びがあり、怒りがあり、哀しみがあり、そして楽しいひと時があるのだということは、半日足らずの滞在で、言葉が通じなくても十分に理解できた。

酒と食べ物でも持ってきていれば、この屋敷の片隅に一晩泊めてもらうことを考えたかもしれない。月を眺め、焚き火を囲み、ヒンバの女の歌を聴くのも面白いではないか。しかしまったく言葉が通じないのであれば、一宿の許しを請うことも難しい。それに道端に停めたままの車も心配だ。

何時の日か再びこの地を訪れ、あの林檎のような乳房の娘や白い貝のような美しい歯を持つ男の子が、どのように変わったのか、あるいはどのように変わらなかったのか見てみたい。そんなことを想いながら、後ろ髪を魅かれる思いでヒンバの屋敷を後にしたのである。

オプヲの町に帰り、小高い丘の上にある宿泊先のロッジのベランダでその夜、マシコ君と冷たいビールを飲んだ。豊かにほとばしるシャワーを浴びた後だった。風が少しあった。

月が出ていた。今日訪ねたあのヒンバの人たちは、いま頃何をしているのかと気になった。あたたかいふかふかした布団に身を横たえた時には、わたしの胸が少し痛んだ。

ヒンバ族の食をめぐって

ヒンバの人たちの衣と住については、これまで簡単に触れてきた。食についても語らなければならない。

まず触れておきたいのは、メイズ（トウモロコシ）を製粉するためにサドルストーンを使っていることである。石器時代から使われてきたサドルストーンが、いまだに現役で活躍していることには驚かざるを得ない。

サドルストーンは穀物や木の実を二つの石に挟んで砕くための道具である。穀物を二つの石の間で擦ったり叩いたりすると、効率よく粉砕できることを覚えたヒトは、繰り返し使ううちに、どんな形の石が効率的であるか気がつき、自分で石を都合の良い形に加工するようになった。

下石(石皿)は中央が凹になっており、上石（すり石）は手でつかんで転がすか擦るのに便利なように成形される。用途がカタチを決めているので、世界中で同じようなカタチをしている。

使われている石皿を見ると、表面は長年使い込まれてつるつるに磨かれ、底の浅い皿のように真ん中は窪んでいる。ここにメイズを入れ、蕎麦をのすように円筒形のすり石を回転させて磨り潰し、粉にしている。

これによって製粉の効率は格段に上がったに違いない。聖書ではその

価値をモーゼの律法として次のように表現している。

「下臼あるいは上臼を質にとってはならない、なぜならそれは命そのものを質にとることになるからだ」

本格的なサドルストーンの登場は、エジプトの第三王朝時代（紀元前三千年紀）といわれている。（H・ホッジス著『技術の誕生』より）。日本でも縄文時代の遺跡からサドルストーンは出土する。青森県の縄文遺跡として有名な三内丸山遺跡から出土したサドルストーン（日本では石皿、すり石と呼ぶ）の写真を次に示しておく（写真は青森県教育委員会）。

さてヒンバの人たちはこのメイズの粉をどのように食べているのだろうか、興味のあるところである。

我々は数か所のヒンバ部落を訪ねたのだが、三か所で食事の支度をしている場面に遭遇することができた。訪問した時間帯がすべて午前中だったこともあって、作っているものはすべて同じものだった。後から分かったことなのだが、実はこれがヒンバの人たちの主食、いやアフリカ中でもっとも一般的に食べられている食事だったのである。

言葉が通じないのだから細かい内容は無理にしても、この主食らしきものの名前ぐらいは聞き出したい。しかしそれは容易なことではなかったのである。

マシコ君は、いままさに調理中のヒンバおばさんのご機嫌を取るために、オプヲの町で調達した鶏卵四個をお土産にと、うやうやしく差し出した。こんな貴重なものをかたじけないと大喜びして、こちらの質問にも快く答えてくれるのではと期待していたのだが、案に相違してヒンバおばさんの機嫌は悪く、にこりともしない。

それどころか、鶏卵パックを握った手を、周りに群がる沢山の子供たちの方に突き出し「こんなにたくさん、口を開けて待っている子がいる

のに、タマゴがたったの四個かい」とマシコ君をなじっている様子さえある。

「マシコ君、どこの国でも、おばさんはずうずうしいな。ありがとうとも言わないぜ。歳は五十位かな」

「体中に泥を塗っているから、歳を取っても肌はぴんとしているしツヤがある。女の歳は分からんな」

「鶏を飼っている様子もないし、タマゴは貴重品だろう。もっと喜んでもよさそうなもんだ」

「タマゴは日本だってついこの前まで貴重品扱いだっぺ。もみ殻に丁寧に埋められて箱に納まっていたし、病気見舞いや贈答品の定番中の定番の品だ。俺なんか幼稚園で風邪引いたとき、一個のタマゴを弟と分け合って食べた記憶があるっちゃ」

我々を無視し、火加減を気にしているふりをするおばちゃんに、マシコ君は愛想笑いを浮かべながらにじり寄り、「おばちゃん、そんなに欲かくな」と機嫌をとろうとする。しかし、おばちゃんは煙いのか、機嫌が悪いのか、しかめっ面を一向に崩さず、口の中でなにやらブツブツ呟いているだけだ。

「マシコ君、切り札の手鏡はもうないのか」

「もうひとつあるが、この強欲おばさんにはやりたくないな。なんか意地悪そうな感じがすっぺ」

おばちゃんはこちらが何を聞いても、無視して、ひたすら鍋の中のものを黙々とかき回している。回りにいるのは涎垂れ小僧ばかりで、とても話が通じそうもない。

「もう少し話しの分かるやつはいないか探してくる」

そう言って、わたしが立ち上がったとき、頭に青いポリタンクを載せ、幼い子供の手を引いた母親らしき女性が水汲みから帰ってくるのが見えた。

「マシコ君、最後の鏡はあの母親で

どうだ」
「ふむ、あちらは二十代後半かな。聞き出してから渡したほうがよかっぺ」
　ヒンバ語で「これはなんですか？」は「オングァエ？」である。炊事場の脇にポリタンクを下ろしたのを見計らって、わたしが早速話しかける。今度は愛想がよさそうだ。彼女を鍋のそばまで何とか引っ張って来て、鍋の中で煮えているものを指差す。
「オングァエ？オングァエ？」
　彼女はわたしが指差す鍋の中を覗き込むが、何にも言ってくれない。反っ歯をむき出しにして笑っているだけだ。
「カワサキ君、カエルがつぶれたような声を出しても通じていないよ」
　ならば身振り手振りで説明する他はないと左手で茶碗を持ち、右手で飯を口に掻きこむ動作を繰り返す。これでも通じない。そうか、ヒンバの連中は茶碗を使わないで、鍋から直接すくって食べるのかも知らんと、今度は鍋の上で煮えているものをすくう真似をし、それを口まで運ぶ。

　彼女は怪訝そうな顔で「オルヘレ」とやっと小さな声を出した。わたしは「オルヘレ、オルヘレ」と大きな声で復唱しながら、鍋の中のぐつぐつ煮えているものに届きそうになるまで指を近づける。彼女が再び「オルヘレ」と言いながら確かに頷いた。苦闘一時間、この瞬間、ついに我々はヒンバ族の主食オルヘレの名前を聞き出すことに成功したのであった。
　オルヘレはケニアやタンザニアなど東アフリカでは「ウガリ」、南アフリカでは「パップ」など、地域によって名称が異なる。硬さや弾力は少し違うようなのだが、基本的には同じ食べ物だ。
　以下は帰国してから数カ国のアフリカ各国の在日大使館に電話で質問し、現地での観察記録を十分補強した上でのオルヘレのレシピ日本初公開である。

オルヘレの材料はメイズミール（とうもろこしの粉）である。作り方はきわめて簡単で、メイズミールに少量の砂糖を加えてよくかき混ぜる。湯を沸かした鍋にこれを入れ、もっちりとしてくるまで焦がさないように良くかき混ぜる。ダマを作らないように丁寧にかき混ぜることが肝要と、在日南アフリカ共和国大使館の観光局職員は強調していたことを付け加えておく。

かといって我々が調理場面を観察する限り、さほど真剣になる必要もなく、周りに座り込んでいる人たちとおしゃべりをしながらかき混ぜているといった程度である。かき混ぜるヘラにからみついて滴り落ちない程度の硬さになると火から降ろし、十分ほど蒸らしてでき上がり。

これを指ですくい、牛乳やバターなどを付けて呑み込むように食べる。オルヘレ自体は主食であり、日本の白飯と同じように毎日食べても飽きないようなあっさりとした味だが、漬け汁を変えれば味が変わる。豆や野菜を煮た汁につけて食べるのが一般的である。鶏や羊の肉汁につけて食べるのはご馳走だそうだ。

わたしも少し試食をさせてもらったが、蕎麦がきを食べているような感じで、味にまったく違和感はない。これなら毎食食べても大丈夫だろう。それに結構腹持ちがよさそうな気がする。鍋を囲みながら、熱いうちにフウフウ息を吹きかけながら食べるのが美味しい。

炊事も食事も家の外で行っている。台所も水道もないのだから当たり前といえば当たり前だ。近くの林から集めてきた枯れ枝などを家の入り口の前で燃やす。固定されたかまどはなく、地面に浅い穴を掘り、その上に釘などで穴を開けたトタン板を敷いて、通気性を良くする工夫が普及しているようだ。乾燥しているからこれで十分よく火が燃える。その火の上に五徳のような脚が付いた鍋を立てて調理する。かまどがなく、薪の上に直接鍋を置くのだから、はじめから脚が付いている鍋でないと具合が悪い。

くだんの無愛想なヒンバおばさんは火の前に古タイヤを置き、そこに腰掛けて作業していたが、使う食器といえばこの鍋とかき混ぜるヘラかスプーン、あとはお椀の二、三個といったところである。包丁やまな板は使わない。大きなナイフは見かけたが、これは刃も鈍く、切るというよりむしろ叩き割るといったような

使い方をするものだろう。干し肉をさばくときなどに使われることが予想される。ヒンバ料理は切るという作業がないのだ。

食材料のストックがないことから推測できるように、彼らの食生活はかなり単調ではないだろうか。ここでは現代の日本のように昨日はすき焼き、今日はカレーライス、明日は寿司などと、毎日異なったメニューの食事を摂ることはない。

毎日同じものを食べ、特別のハレの日だけ、ご馳走を食べるという方が世界ではむしろ一般的なのだ。食事の献立が毎日変わる日本のような国の方がむしろ珍しいのである。

日本だって一昔前はそうだった。一汁三菜といえば聞こえがよいが、丼飯に沢庵と梅干、芋の煮っ転がしなどあれば上等な方である。宮沢賢治の詩にあるように、「一日に玄米四合と味噌と少しの野菜を食べ」るのが普通の食事だったのである。

日本は米の消費量が年々減って来ていて、今では一日四合の米を食べる人は少ないだろう。その代わり、いわゆる「おかず」が増えている。政府も一時、バランスの取れた食事をなどと喧伝し、米消費の減少に一役買ってしまった。

しかし食物エネルギー生産の中で穀物はもっとも効率がよい。なかでもトウモロコシは太陽のエネルギーを食物に変えるのに、一番効率が良い栽培植物なのである。

だから安い。オルヘレの材料であるメイズミールは首都ウィントフックのスーパーマーケットで売っているのを見かけたが、五キログラム入りの袋が日本円で百円程度である。広くナミビア人の主食として食べられているのである。もちろんメイズミールはオプヲのマーケットでも見かけたが、我々が訪れたヒンバの部落では、とうもろこしの栽培と製粉を自ら行っていた。訪問時は乾季の終わりに当たり、植物にとっては一番厳しい環境の時だったので、栽培している状況を見ることはできなかったが、屋敷の前面に畑が広がり、雨が降るのを待っている状態だった。

トウモロコシの貯蔵は、行李ぐらいの大きさの籠に泥を塗った、倉庫らしきものが幾つか屋敷内に作られていた。蓋はなく泥で全面が覆われていたが、使用中の倉庫だけは上部に手のひら程度の穴を開けておき、必要なだけ取り出して使う。高床式になっていた。普段は密封しているから虫が入ることもなく、中の温度

は一定に保たれる。乾燥しているし、これでトウモロコシは腐ることもないのだろう。ヒンバ族のひとつの知恵である。。

さてヒンバの人たちの食生活の一端を垣間見たわけだが、栄養満点とはいかないまでも、腹をすかしてひもじい思いをしているという印象は受けなかった。子供たちは元気に走り回っているし、食事の準備をする母親たちの体格もよく、立ち居振る舞いにもゆとりがある。強欲おばさんでなくても、タマゴ四個ぐらいでは大喜びしない程度に食い物にはありついているということであろう。

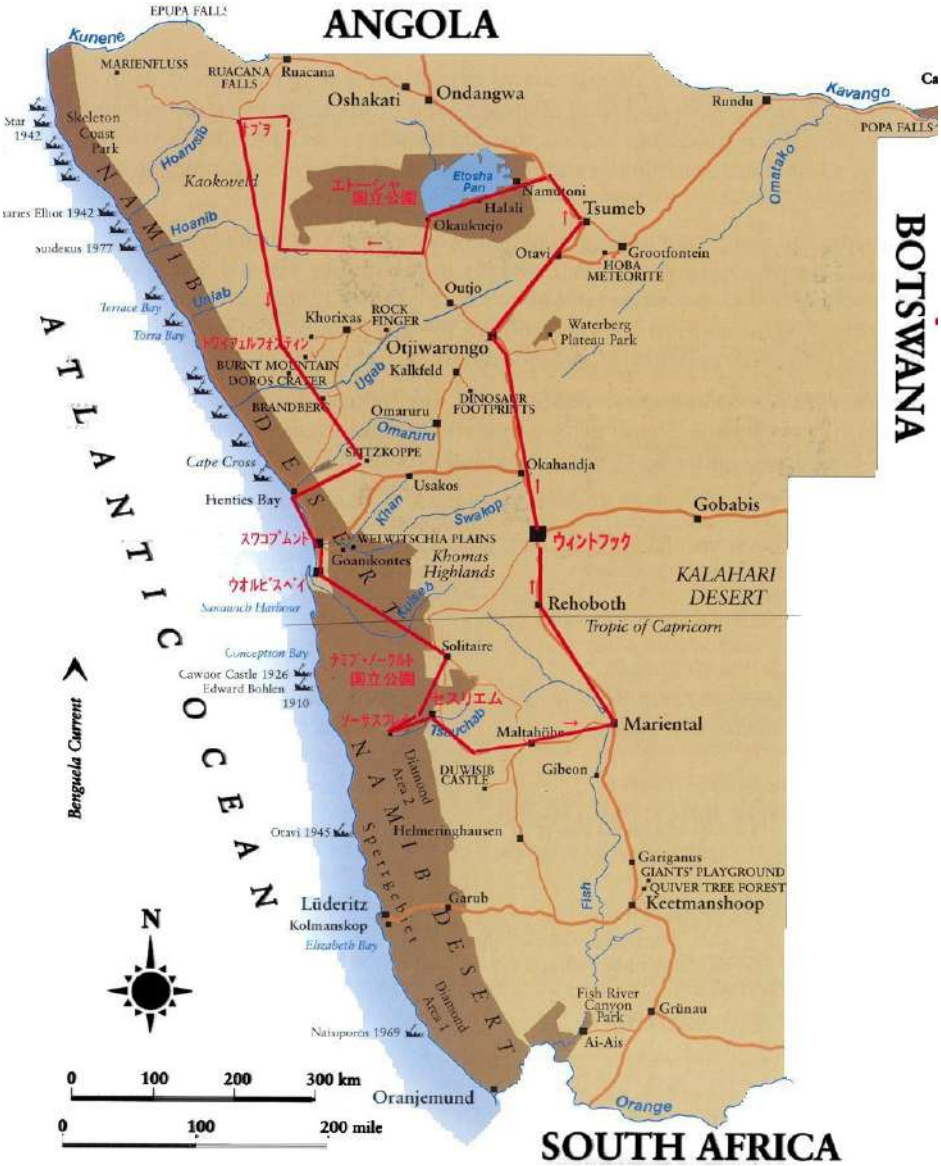
食べることは生きることの原点である。だから飢えることは何より辛い。ヒンバの人たちは貧しいけれど悲惨ではないと書いたが、彼らの明るさを支えているのはとりあえず空腹から開放されている安堵感だろう。

彼らは珍妙な旅人の突然の訪問にも、ゆとりを持って応対してくれた。ヒンバの地を訪れたのは、わずか三日間だけであったが、沢山の人たちと交わり風土に根ざした合理的で簡素な生活の一端に触れることができた。この地球上には、いろんな文化がありいろんな生き方があるということを気づかせてくれた三日間だった。

南下

馴染みになじんだヒンバ族の人たちとの別れを惜しみつつも、最果ての町オプヲを後にし、車は一転、南下することになる。首都のウィントフックを出発した我々は、ほぼ真北にあるエトーシャ国立公園を目指して北上した。さらにエトーシャを東から西に横断し、再び進路を北西にとって北隣の国アンゴラの国境近くの町オプヲに至った。

ここまでの走行距離が東京から九



州の長崎までの距離とほぼ同じ千二百キロ。東名、名神などの高速道路を使えば一日でたどり着くことも不可能ではないが、未舗装の砂利道を二人でかわるがわる運転して、よく走ってきたと思う。

次に目指すのはウィントフックとほぼ同緯度にあるナミビア第二の都市スワコプムントである。スワコプムントは大西洋岸に面した港町であり、そこまでたどり着けば、電話も自動車修理工場もシーフードレストランもある。

しかしオプヲからスワコプムントまではおよそ七百キロあり、一日でたどり着くのはとても無理である。我々は二つの町のほぼ中間地点にあるトワイフェルフォンテインというオアシスを目指すことにした。トワイフェルフォンテインは町ではない。ここは新石器時代の人たちが残した世界有数の岩絵があることで知られており、これを見に集まるツーリストのためのロッジが一軒だけある。

オプヲの町を出た車は、人跡も稀な荒涼とした大地の中を、ひたすら

トワイフェルフォンテインを目指して突進する。北上してきた道路より百キロほど西を南下するのだが、ナミビアの大地は、西に行くほど乾燥の度を増していることが分かる。

ナミビアは全土が乾燥のうちにあるといってもよいのだが、その植物の生え方を見ると、中央台地のサバンナ地帯と西側の大西洋岸に沿って広がるナミブ沙漠の二つに大別できる。サバンナの大地は背の低い草で覆われ、所々に潅木が見られるのだが、ナミブ沙漠に近づくにつれ、樹木はほとんど姿を消し、草もまばらに生えるだけになってくる。

北上してきた国道B1はサバンナを突っ切る道であり、茶色に枯れた草の波が大地の起伏とともにどこまでも続いていた。いま南下するこの道路の両側の景観は、おむすびにごま塩を降りかけた程度の草がぽつんぽつんと生えているだけで、赤茶けた大地がむき出しになっている。

道路沿いには人家もなく、行き交う車も絶えて久しい。目の前には広々とした大地が広がっているのだが、走れども走れども一向に変わらぬ風景にかえって閉塞感さえ感じられる。筋斗雲に乗って世界の果てを目指した孫悟空が、気がついてみればお釈迦様の手のひらから出られなかったという「西遊記」の話を、わたしは思い出した。

こんなところで車が故障したら、たちまち干からびてしまうという恐怖感と、恐ろしいほど真っ直ぐな道をひたすら走る孤独感から我々を救ってくれるのが、突然道端に姿を現す動物たちである。スプリングボックやキリンが、石ころだらけのこの厳しい環境の中でたくましく生きていることに驚き、感心するばかりである。周囲には水場らしいものは全くなく、草さえ満足に得られるとも思われない土地で、彼らはどのようにして生きているのだろうか。

もうひとつ単調な景観から我々を救ってくれるのが川である。ナミビアには一年を通して水が流れている川は二つしかない。

ひとつは北のアンゴラとの国境を流れるクネネ川、もうひとつは南アフリカ共和国との国境を流れるオレンジ川である。従って乾季のナミビア国内には水が流れている川は一本もない。

しかし、その涸れ川は、東の中央高地の山に降った雨が、五年に一度か十年に一度、大西洋岸に流れ下る通り道であり、長い年月のうちに大地を深く削り、所々で道路を横切っている。

日本には海に注ぐ三万有余の河川があり、そこには常に清流が滔々と流れている。しかし日本の国土の二倍の面積を持つナミビアには、たった十数本の河川しかないのである。

川は白茶けた大地に一本の緑の帯をひく。川床には一滴の水がなくても、明らかに周囲より背が高く、緑が濃い木々がそこには生長している。

車から出れば、日差しをさえぎるものもなく、自分が作る陰に隠れたくなるような炎天下では、小さな木陰とて阿弥陀如来のごとき救いと思われてくるのであった。

さらに、眼には見えないけれども、川床の下には、冷たい水が確かに存在し、その水分が木々の生長と緑を支えているのだという想像は、大地にだけでなく我々の乾ききったこころにも何がしかの湿り気をもたらしてくれる。

時々休憩を取らなければならないのは、車も同じだ。気温三十度を越す中を、アクセルを踏みっぱなしではエンジンも悲鳴を上げたくなるというものだ。それに窓ガラスに積もるほこりを払ってやらなければならない。

なだらかにうねる大地の波を登っ

たり下ったりしながら車は進む。波頭に乗ったときは、茫洋たる前途に広がる地平線に溜息をつき、波の底に沈んだときは、次の波頭を越えれば何か新しい変化が現れるのではとかすかに期待する。その繰り返しにうんざりし、座席に縛りつけられた体がきしみ始めた頃、前方に奇岩裂石を積み上げたような岩山の連なりがようやっと見えてきた。

トワイフェルフォンテインにたどり着いたのである。トワイフェルフォンテインは何億年にも渡る厳しい風化作用に耐えて、平原の中でそこだけ孤立したような山塊に囲まれたオアシスである。山塊はオーストラリア沙漠のエアーズロックのように一枚岩ではなく、砕かれた岩が積み木細工のように折り重なっている。昼と夜の急激な温度変化によって膨張と収縮を繰り返した岩はひび割れ、重力に抗うかのように微妙なバランスを取りながら山塊の斜面に不気味に積み重なっている。

この岩の表面に石器時代人が刻んだ岩壁画が残されているのだが、まずはともあれ、今日の宿であるトワイフェルフォンテイン・ロッジに旅装を解くことにする。このオアシスは、かつては一日に十リットル程度の水が湧き出るだけで、「怪しげな

泉」という意味のトワイフェルフォンテインと名づけられたのだが、今では地下から水を汲み上げ、シャワーもふんだんに使えるしプールさえある。

ロッジは岩山の裾に抱かれるように建っており、周囲の景観を上手に取り入れたヨーロッパの山小屋風の建物である。案内された二階のレストランからの見晴らしはすばらしく、眼前に広がる平原を一望できる。マシコ君と二人して窓際の席に陣取り、よく冷えたビールで乾杯すれば、長旅の疲れもゆっくりと消えてゆくのであった。

石器時代の岩壁画

石器時代の岩壁画は世界各地に残されている。その中でもトワイフェルフォンテインは、その壁画の美しさと量で世界有数の遺跡であることは間違いない。しかもそれらの壁画は、博物館で見るのではなく、平原に佇立する岩山に無造作に散在する自然の状態で見ることができるのである。まさにオープンエアーのギャラリーだ。赤褐色の砂岩が夕日に照らされて、なお赤く燃え上がる夕方が、遺跡を訪ねるには一番よいと薦められて、陽がようやく傾く頃にロッジを出発する。

遺跡はロッジから車で三十分ほどのところにあった。政府系の団体が運営する管理事務所が入り口にあり、一人五十ナミビアドル（九百円）の入場料を払うと英語が話せるガイドが案内してくれる。ガイドは二十歳代半ばの小太りの女の子で、白い半袖のシャツと帽子にガイドであることを示す刺繍がついている。

見学コースは「人間コース」と「ライオンコース」の二つがある。「人間コース」は、人間を描いた唯一の岩壁を目玉にするもの、「ライオンコース」は狩をするライオンの絵が目玉

のコースである。我々は「人間コース」を選んだ。

ラヴィスと自己紹介したガイドの女の子の案内で大小の赤い岩が転がる山裾の斜面を登ってゆくが、見渡す限り山全体が風化により赤褐色に

染まっている。材料メーカーの技術者マシコ君の説明によれば、岩石中の鉄分が酸化して、赤鉄鉱に変化し、この色がついたそうだ。とすれば、このような風景は、おそらく大気中に酸素がある惑星・地球ならではのものだろう。

五分と歩かないうちに、動物の絵が描かれている大きな岩の前に案内された。

「ここにある岩壁画は古いものは約六千年前のもので、岩の表面を水晶のような硬い石器で彫ることによって描かれています。これらを描いたのはこの一帯で獲物を狩っていた狩猟採集民だと考えられています」

ラヴィスは流暢な英語で説明を始める。赤い砂岩の平らな剥離面にキリン、象、縞馬、ライオン、オリックス、駝鳥などの線描がたくさん見られる。今は乾燥化が進み、周辺にはもはやこんなに豊富な動物の群れを見ることはできない。しかし六千年前といえば現代まで続く完新世の中でも、もっとも温暖な時期で、アフリカは湿潤な気候に恵まれたと考えられている。

水場があり、周囲の平原を眺め下ろせるこの山に集まってきた狩猟採集民たちは、何を思ってこのような大量の岩壁画をここに残したのだろうか。大小三千近い岩に彫刻が施されているという。

なかでもキリンの絵が多いが、狩猟採集民は恵みをもたらす雨が落ちてくる天に最も近い動物として、キリンを神聖な動物と考えていたのだという。とすれば、これらの絵は雨乞いのような呪術的な意味を持っていたことになる。また動物の足跡が

動物の姿とともに描かれていることから、どの足跡がどの動物のものか、子供たちに教える教科書のような役割を持っていたのではないかと推測する研究者もいる。

いずれにしてもこれらの動物は、狩猟採集民にとって狩の対象であり、貴重な食料でもあったわけで、高い関心が払われていたことは容易に想像がつく。絵はどれも無造作に描かれているようで、一つひとつの動物の特徴をしっかり把握している。

「ミス・ラヴィス、この図形はただの悪戯書きかな」

マシコ君が大きな岩の平らな表面に太い線で描かれている円形の図形を指差した。

「いえ、これはでたらめに書かれた模様ではありません。この模様は地図なのです。円は水場の位置を示していると考えられています」

「すると大きな円と小さな円を結ぶ線は川の流れかな」

「そうです。当時は現在よりもっと湿潤だったので、何か所も水場があり、そこは格好の猟場だったに違いありません。トワイフェルフォンテイン自体がアバ・ヒュアブという渓谷の一部なのです」

陽が傾きかけているとはいえ、まだ暑い中を、ラヴィスは汗もかかず、熱心に説明してくれる。

「この地図の水場の位置は正確で、今でもそのまま残っているものもあります」

六千年も経てば岩の位置は動いているのではないかと、わたしが意地悪な質問をしてみた。

「岩の位置は描かれた当時と変わっていません。岩が崩れて、回転したり動いたりしたならば、天地が逆向きの絵や地面に接している絵があるはずですが、三千近い絵の中にはそのようなものは一つもありません」

ラヴィスはこの遺跡について相当

突っ込んだ教育を受けたらしく、意地悪と思えたわたしの質問にもよどみなく答えてくれる。

何千年も前に、抽象的思考を操り、頭の中に浮かんだイメージをひとつのカタチとして表現した人間が、この地で暮らしていたことを想像するのは楽しいことだ。それはゴリラやチンパンジーではできない。彼らは紛れもなく我々の仲間、我々と同じヒトなのだ。

狩の収穫は不安定だったろう。時にはすきっ腹を抱え、猛獣の咆哮におびえながら夜をすごしたかもしれない。たまたま大きなシマウマを倒すことに成功し、焚き火を囲んで焼肉パーテーに酔いしれたかもしれない。

「『偲べば懐かし 古代の文字よ』ていう歌があったけど、何千年も前にこの山から同じ風景を眺めて生きていた連中がいることを想像すると、なんか切なくなるっちゃ」

マシコ君も古代の人たちが描いた岩壁画から、何らかのテレパシーを受信したような面持ちである。

「砂浜に数年前に埋められた錆びたジャックナイフを見つけても、胸にじんと来るんだからな。ましてや六千年前だ」

わたしもマシコ君に引きずられるように、裕次郎の歌を思い出す。

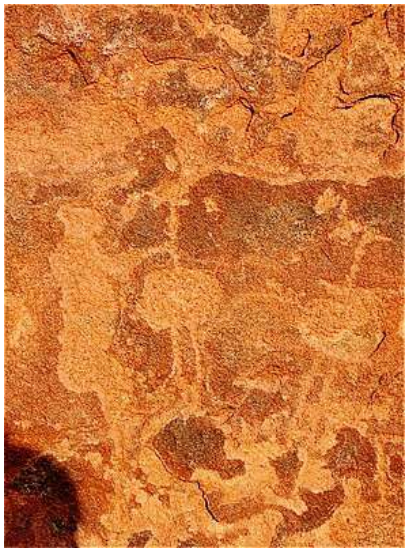
「カワサキ君、その歌は啄木の『いたく錆びしピストル出でぬ砂山の砂を指もて掘りてありしに』の本歌取りだという説を知ってるかい」

学生時代から裕次郎の格好良さとはまったく無縁だった二人にとって、東北訛りの根暗の詩人、啄木の方が親しみがある。

「ピストルがナイフに変わっただけか。ところで、その辺を掘れば、彫刻に使った石器が出てくるかもしらん」

暑いので立ち止まっては、ペットボトルの水を飲み、そのたびに訳の

分からぬ言葉で勝手にしゃべっている客を尻目に、ラヴィスはすたすた先を行ってしまう。ようやっと追い着いたのが、このコースの目玉、人間が描かれた唯一の岩壁の前だった。多くの動物の絵がある中で、人間の絵がたった一つというのもなにやら奇妙な気がする。しかし、これらの絵が古代人の気まぐれや、暇つぶしに描かれたものでなく、豊猟を祈願するといった呪術的な意図を持って、動物たちがたくさん描かれたものだと考えれば納得できなくもない。



「これがこの壁画群の中でただ一つ、人間が描かれたものです。駝鳥の首を捕まえている姿です」

このコースの目玉と聞かされていただけに、目鼻立ちもしっかりし、身体装飾も見分けられるぐらいの人間像を期待していたのだが、描かれた像はぼやけていて、そう言われれば人間の姿だなと思われる程度である。しかしガイドの説明が本当なら、この絵には狩猟の一場面を描いたというドラマがある。人間が駝鳥と競争しても勝てるわけがないから、おそらく罠を仕掛けて捕獲したのだろうと駝鳥の足元を眺めてみると、ちょうど輪のような円い線があるではないか。さもありなんと、この発見をラヴィスに自慢げに話してみたが、それは自然にできた染みではないかと素っ気ない。

いくらぼやけた像でも、それが人間の像となれば親しみがわく。これらの絵を描いた人間も描かれた人間も、狩猟採集を生業としていた。彼らの後裔は、かつてアフリカ南部から中央部にかけて広く分布し、アフリカ最古の住民であった。しかし他民族の南下や西洋文化の流入によって、彼らは狩猟の場を奪われ、さらに疫病や戦争によって命まで奪われ、いまやナミビア、ボツワナ、アンゴラにまたがるカラハリ沙漠の奥地に追いやられて数千人が細々と生き延びているに過ぎない。そして、何千年に渡って続いてきた狩猟採集文化はいま地球上から消え失せようとしているのだ。

「人間コース」は一周するのに一時間と聞かされていたのだが、石器

時代の狩猟採集民に思いをはせながらの一周は思いのほか時間がかかった。管理事務所に戻ってきたときには、陽はすでに平原の地平線に落ちかかり、西の空を真っ赤に染めていた。大地も空も大きかった。その大きなキャンバスに描かれる夕焼けも大きかった。山全体が魂を揺さぶるように赤く燃えていた。

赤い色は聖なる色だ。それは血の色であり、火の色でもある。この場所は、トワイフェルフォンテインと呼ばれるずっと昔から、ヒトにとって聖なる場所だったに違いない。動物を追ってこの地にたどり着いた狩人たちは、この赤褐色の山を眺めて一様に霊的な感応に震えたに違いない。

わたしもマシコ君もガイドのラヴィスも、夕日が震えるようにして平原に沈み終わるまで、黙って見つめていた。風の音が古代人のささやきのように聞こえた。動物の描かれた岩の一つひとつが、魂を持って語りかけてくるようだった。

大西洋岸へ

トワイフェルフォンテインの周辺には地質学的にも貴重な場所がいくつかある。前にナミビアの大地を長旅の車窓から眺めたとき、それがあまりに茫漠とした荒野であるため、「単調な景観」と形容したが、これはおのれの地質学的知識の欠如、関心の低さを暴露する未熟な感想であった。実はナミビアはその筋の専門家から見れば、一生に一度でいいから訪れてみたい垂涎の国なのである。

かつてアフリカ大陸と南アメリカ大陸がひとつの大陸であったという話を聞いたことがあるだろう。これは両大陸の大西洋岸の形がジグソーパズルのようにぴったり合うことから、ドイツの学者ウェゲナーが唱えた説であり、大陸移動説と呼ばれて

いる。大陸が動くという大胆な説は、最初は眉唾物と考えられていたが、いまやプレートテクトニクス理論として地球科学の標準理論になっている。

この理論からいけば、ナミビアの大西洋岸は南アメリカ大陸との裂け目の跡ということになる。約二億年前には、大量のマグマがこの裂け目に噴出してきて、活発な火山活動を引き起こした。その名残がトワイフェルフォンテインの周辺にはいくつか残っている。

そのひとつがバーントマウンテン。文字通り焼けただれたような黒い砂礫の火山の尾根が十数キロに渡って続く。また近くにはオルガンパイプと名づけられた美しい柱状節理も見られる。パイプのように多角形の石の柱が林立しているが、これは溶岩流が固まって冷えるときに、温度低下とともに溶岩の体積が収縮し、規則的な割れ目ができたものである。

しかし我々は地質学者ではない。火山列島ニッポンからやってきた旅人にとってみれば、火山活動の爪跡などそんなに珍しいものではない。今日はいよいよナミビアで二番目に大きい都市、スワコプムントを目指す日である。

トワイフェルフォンテインからスワコプムントまで約三百四十キロ。時速八十キロ計算だと四時間程度だが、大西洋岸に出たところでケープクロス（十字架岬）というオットセイの繁殖地があり、それを見物してから海岸沿いにスワコプムントに至るコースを取ることにする。

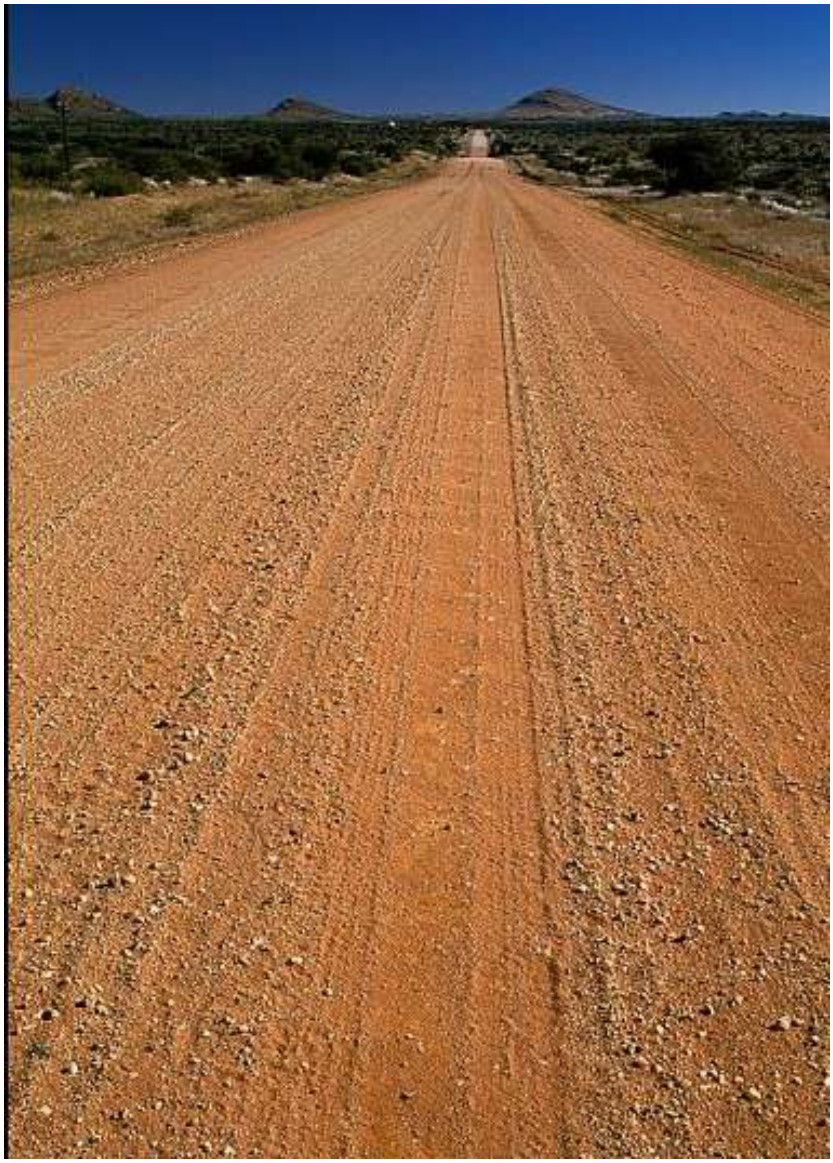
トワイフェルフォンテインを出た車は、しばらく山間の細い道を辿り、一時間ほどで国道C三十五号線に出た。この一帯は、標高二、五七三メートルを誇るナミビア最高峰のブランドベルグ山や鋭い岩峯が特徴的なスピッツコップ山（一五八四m）な

どがあり、ナミビア一の山岳地帯である。ここを抜けると大西洋岸まではあと百キロほどで、周囲は再び茫漠たる平原に変わり、海岸に向かって徐々に標高を下げてゆく。

錫の鉱山のために作られたウイスという小さな町を過ぎると、景観は次第に乾燥の度を強めてくる。いよいよナミブ沙漠に突入したのである。ナミブ沙漠は千六百キロに渡るナミビアの海岸線すべてを覆いつくし、その幅は広いところで百三十キロ、狭いところでも四十キロに達する。

海岸線に沿って沙漠が広がっているのは、ナミビアが中緯度高圧帯に位置している上に、沖を流れる冷たいベングラ海流の影響で、雨がほとんど降らないからである。寒流によって冷やされた重い空気が、温度が高く軽い陸上の空気の下に入り込み、上昇気流が発生しないため雨が降らないのだ。

標高の高い内陸部の方が気温が低く、海岸近くは暖かいというのが日本の常識なのだが、車が海岸に近づくに連れ、気温はどんどん下がってゆく。昨日までは、日中は三十度近くになり、車は当然のことながら冷房をフルに利かせて走っていた。それが今日は反対に暖房を利かせて走



っているのである。
　ケープクロスに着いたのは走り始めて約三時間後の一二時を少し回った頃だった。気温は十二度。空は雲が覆い、昨日までのジリジリと照りつけるような太陽も姿を見せない。
　ここにはもはや草も生えず、乾燥に強い地衣植物がわずかに地表を覆っているだけである。黒っぽい玄武岩の砂礫が広がり、海からの風はこころなしか湿気を含んでいるような気がする。
　オットセイの繁殖地へ入るには、管理事務所で三十ナミビアドルを支払い、強い風の中を歩いて海岸に向かわなければならない。しばらく歩くとすぐに、白い波が砕ける海岸が見えてきた。思えばナミビアについて以来、カラカラに乾いた大地をひたすら走ってきたのだが、海の香りを胸いっぱいに吸い込むと、体中の細胞一つひとつがにわかに湿り気を帯びてくるようである。

　この海岸は一年中波が荒く、しかも濃い霧がたびたび発生するので、大航海時代以来、船の難破が相次ぎ、その残骸が海岸に数多く横たわっていることからスケルトンコースト（骸骨海岸）と呼ばれている。
　今日も帽子が飛ばされそうになるぐらい風が強く、波も荒い。その波打ち際が見通せるところまで近づいてのけぞった。波が打ち寄せる岩礁や砂浜に、まるで黒い丸太を敷き詰めたようにおびただしい数のオットセイがのたうっているではないか。
　この繁殖地には、多いときには十万頭のオットセイが群れているというが、いま目の前に見える数だけでも数千頭の単位であることは間違い

ない。

その連中が「アオッ、アオッ！」と吼えたてている声が聞こえてくる。それに糞尿の匂いがものすごい。

「カワサキ君、なかなか壮観だけど、大きな蛆虫が這いずり回っている感じだっぺ」

「確かにモゾモゾ動く感じが似ているかもしれない」

「腹の出具合というか、胴回りの威厳は、カワサキ君そっくりだ」

「一日に体重の八パーセントの魚を食べるそうだ。ナミビアの漁獲高より、オットセイが食べる魚の量の方が多いということで、保護に反対する漁業関係者が多いらしい」

「子供は可愛いちゃ。愛嬌がある顔だよ。SF映画のETみたいだっぺ」

確かにオットセイの顔は、つぶらな目といい、口の両側に伸びるひげといい、三角形の小さな耳といい、実に可愛い。しかしいかにせん、動作が緩慢で鈍重な印象から免れない。犬のように真っ直ぐ首を上げ、四肢を使って歩くのだが、自分の体重を支えるのが大儀そうだ。

以前テレビで、ヒレ状の前足を羽ばたかせて、鳥が飛ぶように見事に泳ぐオットセイの群れを見たことがある。水中での生活に適応するため、陸上での動きが犠牲になっているのだろう。

それでも、わたしが写真を撮ろうと近づくと、雪崩を打ったごとく一斉に波打ち際の方に向かって逃げ出した。オスだと体重が三百キロを超えるというから、襲われたら怖いけれど、子供だと抱きかかえられそうな大きさだ。ビロード状の分厚い体毛が全身を覆っていて、肌触りがよさそうである。

入り口の管理事務所の脇にある売店で、この毛皮を売っていたが、小さな財布に日本円で一万円近い値札が付いていた。オットセイの毛皮や皮革は、耐水性や耐久性に優れてい

ることから、高級品としてヨーロッパに輸出されているそうだ。冷たい海の中で体温を保つために、空気を含んだ密な体毛が役立っているのだから、ブーツなどに利用すれば保温効果は抜群だろう。色合いも背中が暗灰色、腹部がにぶい黄色と、なかなか渋い。管理事務所の近くにシーライオン・プロダクトという民間会社があるが、捕獲が許されている数ヶ月は、その屠殺場で、毎日約二百頭のオットセイが皮を剥がれるのだそうである。

もうひとつの輸出品はオットセイの生殖器であるペニスと睾丸。いわば副産物だが、漢方薬の原料として高値で取引され、台湾や日本などに輸出されている。

そもそも、この動物が日本でオットセイと呼ばれるのには訳がある。

岩の上から海に向かって飛びこむとき〝オット〟と叫び、ついで〝セイ!〟と言うからだという落語のような説があるが、これはもちろん冗談。

漢方薬として利用した経緯が、名前の由来になっているのだ。オットセイはもともとアイヌ語でオンネップといった。これが中国に入って「腽肭」と音写され、とくにその下腹部（臍）が強精剤として珍重され、その薬を「腽肭臍」というようになった。これが日本に入ってきて、日本式の漢字音で、オントツセイ、そしてオットセイと発音され、さらに動物そのものもオットセイと呼ぶようになったのである。

日本では「オットピン」という名前の精力剤が昔から売られているが、効果の方は定かではない。オットセイの驚異的な精力をみて、「その雄の生殖器には、精力のもととなるようなものがあるに違いない」と、昔の人が類推しただけで、科学的根拠には乏しいのかもしれない。

マシコ君もわたしも精力絶倫をうらやむ歳ではない。まだ繁殖期前ということもあって、メスをめぐるオス同士の闘争やハーレムは見られなかったが、「オットセイも生きていくことは大変なんだな」というマシコ君の言葉が二人の共通した実感である。

帰りがけに、ケープクロスという地名の元になった十字架が砂浜の上に立っているのを見つけた。一四八五年、ヨーロッパ人として最初にこの地に足跡を記したポルトガルの探検家ディエゴ・カムは、ポルトガルの支配権を示すパドランという十字架のような標識を、この上陸地点に立てた。

同じポルトガルのバーソロミュー・ディアスが喜望峰に到達する三年前の話であり、大航海時代の幕開けの頃である。現在の十字架は一九八〇年に再建されたものである。ディエゴは当時のポルトガル王ジョアン二世の栄誉をたたえて建てたのだが、十五年前にようやっと独立を勝ち取ったナミビアにとっては、植民地として蹂躙された苦難の歴史の出発点としての記念碑だろう。

ケープクロスから海岸沿いに、舗装された快適な道を七十キロほど南へ下るとスワコプムントである。町の境界は最初に出くわした十字路の信号だった。そこより手前は道路の他に何にもない沙漠、そこから先が町だった。

椰子の並木が風に揺れている。舗道があり、人が歩いている。商店のショーウインドーから明かりが漏れている。銀行があり消防署があり、ＴＯＹＯＴＡの看板を掲げたカーディラーがある。ここはまさしく文明の香りがする町なのである。

この町は二十世紀初めに、ドイツの植民地であった南西アフリカ領の港として整備された。そのため町並みは、ドイツの田舎を思わせるような駒形屋根や尖塔を持った建物が多い。歩いている人も半分ぐらいが白人である。

港としての機能は当初から貧弱で、大きな船は接岸できないため、平底の小船で乗客を岸まで運んでいたよ

うだ。現在、港としての機能は、五十キロほど南にある天然の良港ウォルビスベイに譲り、もっぱら夏場の避暑地として、白人に利用されている。

いまは冬の終わりから春の始まりといった時期で、観光客もほとんどおらず、海岸通りには冷たい風が吹いているだけであった。暑い盛りの日本からやって来た我々だが、昨日まで経験したナミビアの気候は、日本の高原の夏といった感じだった。それが大西洋岸のこの町に来て一転、やはり南半球は冬だと実感させられたのである。

とはいっても、ここの気候は年間を通じてあまり変化がなく、真冬（七月頃）の最低気温が九℃、真夏（十二月頃）の最高気温が二十三℃というから、過ごし易い。

この町では休息も兼ねて二泊する予定である。町の探索は後回しにして、何はともあれ今夜の宿に落ち着くことにする。宿泊することに決めたのは、海岸通りにある小さなペンション。大学生ぐらいの白人の女の子が、ドイツ訛りの英語で愛想良く鍵を渡してくれた。

今日は朝早くトワイフェルフォンテインを出発してから昼食も食べずに、ここまで三百五十キロの道のりをやってきた。

途中で食べる所がなかったこともあるが、久しぶりの大きな町で美味いものにありつきたいという下心が空腹を我慢させてきた。

海があればシーフードがある。ロブスターにしようか牡蠣にしようかとこころがはずむ。それにこの町には、ハンサ・ビールというビール会社があり、うまいと評判のドイツ風生ビールが呑める。わたしもマシコ君も、今夜は何がなんでも思い切り

食べて呑もうと、数日前からこころに固く決めていたのである。

歴史を映す町

スワコプムントの夜は深い朝霧の中で明けた。レースのカーテン越しに見る空は灰色で、日の光はない。一瞬雨かと思ったが、これが名物の朝霧だとすぐに気がついた。ここでは雨はほとんど降らないのだ。年間降雨量は十五ミリ程度である。雨による水分の供給より、霧によって供給される水分の方が多い。町の隣は大西洋で、膨大な水分が存在するのに、なんという皮肉であろうか。

朝食を済ませ、出発する頃になると霧は晴れた。今日はまずスワコプムントの三十キロほど南にあるウォルビスベイの町を訪ねることにする。

ウォルビスベイはウォルビス湾の付け根に発達した港町であり、この港は大型船が出入りできる深水港で、海外貿易を考えるとき、ナミビアの唯一の海の玄関口である。

スワコプムントは車で五分も走ると、もう郊外に出てしまう。町のすぐ南にある、この町の名前の由来になったスワコプ川の河口を渡ると、すぐに砂丘が眼に飛び込んでくる。スワコプ川が砂丘と町のあいだに割って入り、砂丘が町の中に進入してくるのを防いでいるような格好である。

この砂丘が、内陸奥深くまでおよそ二百キロに渡って延々と続いているのだ。これこそ厠書庫事件以来、わたしの胸を占領し続けてきた憧れのナミブの砂丘なのである。しかし、ここはあくまで砂丘のしっぽ、端隅に過ぎない。本番は明日から訪ねる内陸部のソーサスフレイという場所にある。はやる気持ちを抑えながら、砂丘を横目に見て、ウォルビスベイに向かう。

ウォルビスベイに向かう道は、右側は大西洋の白波が打ち寄せ、左側

には砂丘が続く気持ちよい道だ。しっかりと舗装されており、中央分離帯の白線もはっきりしている。

町に近づくに従って、天の橋立のように海に向かって長く突き出ている砂洲が見えてくる。この砂洲が大西洋の荒波からの防波堤になり、ウォルビス港をナミビア唯一の良港にしているのである。

ウォルビスベイにはこれといった観光名所があるわけではない。強いてあげれば、近くの干潟にフラミンゴの大群落が見られることぐらいである。しかしこの町と港を訪ねたのには訳がある。この港は十八世紀末以来、列強の植民地支配をめぐって翻弄され続けたナミビアの近代史を映す鏡ともいうべき町なのである。

前にも書いたが、この地に最初にやって来たヨーロッパ人はポルトガルの探検家ディエゴ・カムである。その後、アフリカ南端の喜望峰に達したポルトガルの探険家バーソロミュー・ディアスも、航路の途中でここに立ち寄っている。

しかしポルトガルは、背後に広がる不毛な沙漠を見て、こんなところは植民地にしても仕方がないとあきら

めたのかどうか、その後は積極的な動きを見せていない。その後、イギリスが流刑地として検討したこともあったが、あまりに過酷過ぎて流刑地としてさえ不向きだと断念してしまう。

ウォルビスベイを最初に占拠し、支配権を獲得したのはオランダだった。先行したポルトガルから香料貿易の覇権を奪ったオランダは、一六五二年に現在のケープタウンの地にオランダ東インド会社の補給基地を建設、航海上の重要な拠点とする。ケープ植民地である。また、一七九三年には天然の良港ウォルビスベイの領有も主張する。ウォルビスというのは、オランダ語で鯨のことである。

しかし、十八世紀末になると、英蘭戦争やナポレオン戦争で疲弊したオランダは制海権を失い、代わってイギリスが台頭する。インド貿易の中継点として重要なケープ植民地を虎視眈々と狙っていたイギリスは、一七九五年にここを占領、同時にウォルビスベイもイギリスの手に落ちた。

ケープ植民地はその後、ダイヤモンドや金が発見され、次第に内陸部まで版図を拡大し、英領南アフリカ共和国の成立につながってゆく。

一方、イギリスはウォルビスベイに対しては、港としての機能を求めるだけで、沙漠が続く内陸部には興味を示さなかった。その後、十九世紀に入ると、北隣のアンゴラを植民地にしていたポルトガルの勢力拡大を懸念したイギリスは一八七八年、ウォルビスベイをケープ植民地に併合し、正式に領有を宣言した。

しかし、内陸部の支配をもくろんだ国が現れる。植民地獲得競争に出遅れたドイツである。ビスマルクの下でやっと国家統一を成し遂げたドイツが植民地経営に乗り出したときには、条件の良いところはあらかた列強に占領されており、ナミビアの

ような荒地しか残っていなかったわけだ。

一八八三年、ドイツ・ハンブルクの商人リューデリッツが、ウォルビスベイ近くのアングラ・ペクアナ（現在のリューデリッツ市）近辺の土地を、地元の酋長からだまし討ちのような格好で購入した。この行為がイギリスを刺激し、ウォルビスベイ周辺の領有宣言を誘発することを恐れたドイツは翌八四年、ウォルビスベイを除く南西アフリカ一帯の保護領化を宣言した。イギリスが権益を主張し、支配していたウォルビスベイは、ドイツもイギリスに遠慮せざるを得なかったわけだ。

ビスマルクは当初、植民地獲得にあまり積極的ではなかったといわれる。入植者を送り込んでも、その保護のために相当な軍隊を派遣しなければならず、負担が大きいと考えたのである。実際、牧畜のために入植したドイツ人たちは、銃の力で先住民から土地や牛までを奪い、ビスマルクが予想したとおり数年で対立は発火点を超えることになった。

一九〇四年、先住民のヘレロ族が一斉に蜂起、ドイツは本国から二万人近い軍隊を送り込み、大虐殺を繰り広げて先住民の徹底的な弾圧を行う。ヘレロ族は人口の四分の三が殺されたという。反乱鎮圧後、南西アフリカには豊富な鉱物資源が発見されたこともあり、ドイツからの入植者は一万五千人にも達する。

一九一四年、第一次世界大戦が勃発すると、南アフリカ軍とイギリス軍が南の国境から侵攻、ドイツはこの地の権益を一切失う。そして大戦後に発足した国際連盟によって、南

西アフリカは南アフリカ共和国の委任統治領とされ、自国の領土と同じように支配できることになった。

第二次世界大戦後、国際連合は、すべての植民地の独立を決議し、従来の委任統治領は一時的に信託統治領として独立までの暫定的な姿としたのである。

しかし南アフリカ共和国はこれを拒否し、六〇年になされた南西アフリカの委任統治終了の国連決議も無視して実効支配を続けたのである。さらに六八年、国連は、南西アフリカの国名をナミブ沙漠を由来として「ナミビア」に改称した上で、国連ナミビア委員会の統治下に置くことを決議した。

ナミビアがようやく独立を果たしたのは、一九九〇年のことである。アンゴラの社会主義政権を守るため派遣されたキューバ軍とナミビアの独立ゲリラ・南西アフリカ人民機構との泥沼の戦いに疲れた南アは、ついにナミビアの支配を断念した。国連の暫定統治を経て、アフリカ最後の植民地ナミビアはようやく独立したのである。

この時、再び問題になったのがウォルビスベイの帰属だった。ウォルビスベイはケープ植民地以来、イギリス領で、正式に南アフリカに譲渡されたものである。つまり南アフリカの正当な領土という訳だ。

ナミビア政府はウォルビスベイは当然自国の領土だと主張し、返還を求めるのだが、南ア政府はウォルビスベイに軍隊を駐屯させつづけた。しかしこの政策を支持すると予想していたウォルスベイの経済界が、意外なことにこれに反発、大きな政治的圧力になる。

ウォルビスベイを食品加工品や鉱石の積出港として利用していた大企業にとっては、このままでは企業活動がナミビアと南アに分断される不便さに加え、アパルトヘイト政策に対する各国の経済制裁も足かせになると考えたのである。

こうしてウォルビスベイは独立四年後の一九九四年にナミビアの領土となるのである。ウォルビスベイのことを長々と語ったが、ひとつの町の歴史を通じて、西欧列強のアフリカ分割、植民地支配の歴史を語ることも可能なのである。

港にはコンテナ船や大きなタンカーが係留されており、埠頭には背の高いクレーンが何機も設置されていた。銅、鉛、ウランなど、この国の

豊富な鉱物資源もこの港から輸出される。またベングラ海流に乗ってやってくる豊かな水産資源を加工する缶詰工場や、食塩の製造がこの町の産業を支えている。

ここの人口五万人はナミビアにとってみれば大都市である。わたしもマシコ君もちょっとしたショッピングやしゃれたレストランでの昼食を期待していたのだが、訪れたのはあいにく日曜日の朝。町は閑散としており、商店もシャッターを下ろしたままで、開いているのは日曜礼拝のための教会ばかりである。

キリストとは縁もゆかりもないので、教会にはまったく用はない。日曜日も祭日も関係なく浅瀬で餌をあさっているフラミンゴの群れを見ただけで、早々に引き上げることにした。

月面世界と奇想天外

いつしか霧も晴れて、いつものような明るい太陽の光が戻ってきた。午後からは、ナミブ沙漠にしか見られないウェルウィチアという奇妙な植物を見に行くことにする。

この植物は日本では誰が付けたか知らないが「さばくおもと」またの名を「奇想天外」という。これを見るためには、スワコプムントからナミブ沙漠の奥へ五十キロほど入っていかなければならない。

クアブ峠経由で首都ウィントフックへ向かう幹線道路を東に十キロほど走ると、ウェルウィチア・ドライブという小さな標識がぽつんと頼りなげに道端に立っている。これを左折すると、小石と凹凸の多い道が砂礫の沙漠の中に続いている。洗濯板の上を走っているような振動で、頭を車の天井にぶっつけそうになる。

しばらく行くと、車はスワコプ川が見下ろせる崖の上に出た。アメリカのグランドキャニオンのような深い渓谷で、段差は三百メートルもあり、覗き込むと谷底からひんやりした風が吹き上げてくる。ムーンランドスケイプと地図に出ていたが、月面世界とでも訳すのだろうか。確かに、生命の息吹を感じさせない無機質な大パノラマが眼前に広がる。学問的にも火星や月の地表環境を考える上で、参考にされているという。この地形は、何万年にもわたってスワコプ川の流れが大地を削った痕なのだが、草木がほとんど生えていないから浸食も激しいのであろう。いまは一滴の水も流れていないが、上流に大雨があったときだけ、洪水の

ような濁流がここを流れ下るのだという。

太陽エネルギーと重力を源として、大気と水が媒介したこのような侵食地形は、我々に時の流れというものを思い起こさせてくれる。地球が誕生して以来の気の遠くなるような時の流れがここに刻まれているのである。

目の前に広がる大パノラマを堪能していると、突然わたしの目の前に一羽の小鳥が舞い降りてきた。小鳥はそのままじっと渓谷の方を見つめている。この小鳥は何を思いながら、眼前に広がるこの風景を眺めているのだろう、そんなことを考えていると、道元禅師の『現成公案』の一節がふと頭に浮かんだ。

「魚の水を行くに、ゆけども水のきはなく、鳥そらをとぶに、とぶといへどもそらのきはなし。しかあれども魚鳥、いまだむかしよりみづそらをはなれず」

「鳥もしそらをいずれば、たちまち死す、魚もし水をいずれば、たちまち死す」

道元禅師の言葉は難解である。よく理解できないまま、わたしはいつもこの言葉の周りをぐるぐる回っていた。しかし月面を思わせる荒々しい空間の中へ、突然一羽の小鳥が舞い降り、遥か彼方をじっと見つめているのを見たとき、わたしの中で何かがことんと落ちたのである。言葉にすることは容易ではない。しかし意を尽くせずとも、わたしの胸に一瞬去来した思いを書きとめておきたい。

こういうことなのではないだろうか。

鳥は空を自由自在に使っているが、その自由自在は、鳥が空をもって命としているからなのである。鳥にとっては、空をおいて命はないのである。世界から出たら鳥はすぐに死んでしまう。世界をおいてわが命はないのである。世界と自己と命は三つで一つなのである。

しかし三つといっても、それらがばらばらに存在するのではない。このひと連なりの動きが命なのである。命とは個々別々のものではなく、命はただひとつしかないのである。わたしはそこから逃れるわけにはいかない。これは論理を超えてわたしの内部に埋め込まれた真理なのだ。

道元禅師の底知れぬ思索の深さを、わたしなりの言葉に置き換え、次のように表現してもいいかもしれない

「自然」は約四十数億年前、この地球上に「生命」を生み出した。そこから遥かな進化の旅を続けた生命は、ついにわたしを創り出した。わたしの中には全宇宙の歩み、奇蹟のすべてが必然的に凝縮されている。だからわたしは世界を離れて生きられない。世界とわたしはひとつながりなのである。

たかだか数十年を生きるわたしは、四十億年を生きる生命の頂点であり、目に見えない紐帯で他の無限の生命とつながっており、さらに雷鳴と電光とともに生命誕生へと進化しつづけた自然そのものでもある。

ブッタは理屈っぽい弟子にこう説いた。

「マルーンキャプタよ、世界は永遠であるという考え方があろうと世界は永遠でないという考え方があろうと、まさに、生まれることはあり、

老いることはあり、死ぬことはあり、悲しみ・嘆き・苦しみ・憂い・悩みはある。現実にそれらを制圧することをわたしは教えるのである」

自然から生まれ自然から独立したように見える生命も自然に依拠しなければ生きていけず、それ自身、自然の別の姿といってもいい。まさに天地一体、万物同根なのだ。それを全身に感じる事こそ生きることなのではないだろうか。

マシコ君の呼びかける声で我に返った。すでに小鳥の姿はどこにもない。

「カワサキ君、降りてこいや。谷底に行く道がある」

マシコ君が急な崖を少し下ったテラスのようなところでわたしを呼んでいた。

「下まで往復するには相当時間がかかりそうだよ」

この渓谷の雄大さを実感するには、谷底から眺めてみるのもいいかも知れない。しかし、どうみても往復で二時間はかかりそうである。肝心のウェルウィチアにたどり着くまでに日が暮れてしまう。残念ながら谷底のハイキングは諦めねばならない。

ウェルウィチアがたくさん見られる場所は、スワコプ川とその支流のカーン川に挟まれた一帯にある。二十キロほどスワコプ川に沿って上流方向に車を走らせ、谷が浅くなった辺りで川床を向こう側に渡る。

緩やかな斜面をしばらく登っていくと、道の周囲に海岸に打ち上げられた昆布のようなものが点々と見えてきた。最初はごみが捨てられていると思ったのだが、これがウェルウィチアである。評判に聞くほどたいしたものではな

い、この程度のものならわざわざここまで出かけてくることもなかったと、しばらくのあいだ後悔したのである。

しかし車道が砂礫の中に消えようとする道の突き当たりに、なにやら歩道橋のようなものが建っている。そこに車を停めて、近づいてみると、金網で仰々しく囲った中に、立ち往生した蛸のような大きなウェルウィチアの株が鎮座しているではないか。歩道橋のようなものは、このウェルウィチアを上から眺め下ろすために設置されていた展望台だったのである。掲示板には、この株は樹齢およそ千五百年と書いてある。

木の高さは一・五メートルぐらいなのだが、たくさんの昆布のような葉が絡まりあって、中心の茎は半ば砂に埋もれ半ば葉に覆われ、まったく見えない。二、三メートルの長さはある葉の先端は、地面に垂れ下がり、すでに枯れかかって褐色に変色している。沙漠の砂は、夏の日中は七十度Cにもなるというから、この熱で痛めつけられても無理はない。

しかし葉の付け根から中心部は「俺は生きているぞ」と誇示するかのように、灰緑色を十分保っている。たくさんの葉が絡み合っているように見えるが、これは強い風によって二枚しかない葉が、平行脈にそって裂けたものである。このウェルウィチアは生涯二枚しか葉を出さず、その葉が一年に数ミリずつ伸び続けるのだという。

それほど大切な葉であるにもかかわらず、サボテンやアロエのように水分を蓄える多肉質の葉ではないし、水分のロスを減らすために葉の表面積を減らした構造でもない。

この辺が「奇想天外」と呼ばれる由縁であろう。この植物を最初に世界に紹介し、名前の由来にもなっているオーストリアの植物学者ウェルウィチア（1806-1872）は、驚愕と当惑のあまり、熱い砂の上にひざまずいたまま、しばし呆然と時を過ごしたという。

ウェルウィチアが極端な乾燥の中で生き延びていける秘密は、その後の研究で明らかになった。ナミブ沙漠の霧である。今朝も深い霧のなかで我々は目覚めたのだが、霧は年間百日以上も発生する。霧から得られる水滴の量は、このウェルウィチア平原の辺りで年間百八十ミリにも達する。この量は年間降雨量の実に十倍なのだ。大きな葉が、この霧の水分を吸収し、さらに根元に垂らす。

水分の蒸発を避けるため、葉の表面積を極端に小さくするというのが乾燥下の植物の一般的な戦略である。しかし、この逆をゆく戦略が、他の植物がほとんど存在を許されない過酷な土地で、ウェルウィチアが生き延びてゆく秘密なのである。ウェルウィチアにとって、霧は命の水なのである。

「カワサキ君、またまた生きるということは哀しいことだっちゃ」

「うん、海のようにも空のようにも哀しい」

「苦節十年という言葉があるけど、苦節千五百年とはなあ」

日本にも屋久島に縄文杉という堂々たる長寿の巨樹があるが、それに比べてこのウェルウィチアは何となく頼りない。

命の霧の理屈は分かっても、これで沙漠という厳しい環境の中を何百年、何千年と、どうして生きて行けるのか、やはり驚かざるを得ない。この大きな株には注連縄を張り巡らせ、御幣でも下げたいような気分である。

「マシコ君、長寿祈願に拍手のひとつも打っておくか」

「おお、それはいい。ペットボトルの水がまだ少し残っているから、これを差し上げることにすっぺ」

マシコ君がペットボトルに四分の一ほど残った水を、葉にうやうやしくふりかけ、二人そろって二礼二拍手一礼の作法に則って願を掛ける。お参りが終わると、マシコ君は葉の先端をちぎってしげしげと眺めている。

「マシコ君、天然記念物をちぎってはまずいんじゃないか」

「いや、これはすでに枯れた部分だっぺ。孫が生まれるから、お守りに持って帰る」

「なるほど、それなら俺はもう少し功徳を積んでおくか」

わたしはご神木の根元めがけて、勢い良く小便をほとばしらせた。

「ペットボトル二本分はある。こんな大量の水に恵まれたことは、いまだかつてないことじゃないかな」

「おい、カワサキ君、それこそ毒気で枯れ死の恐れがあるっちゃ」

「千五百年、生き抜いてきたんだ。簡単なことでは枯れんよ」

ナミブ沙漠は、同じアフリカにあるサハラ沙漠と比べて、圧倒的に多様な植物種に恵まれているといわれる。これはナミブ沙漠が八千万年前にさかのぼるきわめて古い起源を持っていることと関係がある。ヒマラヤの造山活動が始まったのが、約千七百万年前といわれているから、いかに古いか分かろうというものだ。ナミブ沙漠は世界一古い沙漠なのだ。

この沙漠に生きる植物も動物も、八千万年という気の遠くなるような長い時間をかけて、この厳しい環境に適応し、子孫を残せるように進化を遂げてきたのだ。海の中で育つ海草もある。極寒の南極で花を開く植物もある。この地球の多様な環境の隅々まで、植物は進出し地球を埋め尽くした。

ウェルウィチアも植物進化の歴史のひとつの頂点にいる。ウェルウィチアはまさしく奇想天外なる植物であった。

今日は朝早く宿を出た。まず砂丘の尻尾と初対面の挨拶を交わし、南に下って、ウォルビスベイで港とフラミンゴの大群を眺め、ナミビアの歴史に思いをはせた。さらに反転してスワコプムント近くまで戻り、沙漠を東に入って月面世界の荒々しい景観と突然視界に飛び込んできた一羽の小鳥に「いのち」を考え、樹齢千五百年のウェルウィチアをありがたく拝んだ。

今日も昨日と同じように昼食抜きで精力的に走り回った。陽が沈むころになれば、疲れで弱音が出てくる

ところであるが、今日は二人ともすこぶる元気だ。ナミブ沙漠のもつ摩訶不思議な自然エネルギーが霊気のように二人の体内に入り込み、気力を沸き立たせているのかもしれない。明日はいよいよ紅茶色の砂丘を目指し、ナミブ沙漠の奥深く入って行くのだ。帰路のハンドルを握るマシコ君の下手な口笛も一向に気にならない。

この木なんの木

「マシコ君、左前方に大きな木がぽつんと立っている。あの木の下でひと休みしようじゃないか」

車は波状にうねる礫沙漠の中に伸びる真っ直ぐな道を順調に飛ばしてきた。もうすぐクイセブ川だろう。クイセブ川はナミブ沙漠を横切る河川としては、最大の流域面積を持っている。水が流れるのは夏の雨季の時期に一週間か二週間だけというから、今は一滴の水も流れていないだろう。

しかし、この辺りは川に近く、地下水位が高いのか、草がまばらに生える砂礫の原に一本だけ大きな木が緑の葉を繁らせている。周囲には潅木も見当たらず、まさに孤高の存在だ。

「スワコプムントを出てから、そろそろ百五十キロだ。眠たくなった」

マシコ君も運転に飽きていたらしく、すぐに車を道の端に寄せて停めた。大きな木は道端から百メートルほど平原の中に入ったところにある。最初はペットボトルを持って、歩いていくつもりだったが、車の轍の痕が木まで続いている。我々と同じようにあの木の下で休憩を取った連中がたのだろう。地面を踵で蹴ってみると結構硬い。

「マシコ君、この分なら車で入っていけるだろう」

「大丈夫かな」

「暑いし、あそこまで歩くのは難儀だよ。平らで障害物もないし大丈夫だろう」

道路は大型のタイヤローラーで締め固めてあるので、周囲の平原より少し低くなっている。マシコ君は段差を慎重に乗り越えて、車を平原の中に進入させた。枯れ草が車の底を擦るけれど、走行には影響ない。タイヤが少し砂に沈むような感覚はあったが、車は難なく大きな木の近くにたどり着いた。大木とはいかないが高さはわたしの身長の三倍ぐらいはありそうだ。

木の下には、二人が十分入れる木陰ができている。沙漠で日光から逃れるのは容易なことではない。隠れるものがないのだ。緑の木陰での休息は、何よりの贅沢なのである。

木の幹は三十センチぐらいありそうだ。幹の周囲に直径五メートルほど葉を繁らせた枝が張り出している。厳しい環境の中で、よくここまで成長したなと褒めてやりたくなる。同じ頃、根を下ろした仲間が次々と脱落して行くのに、この木だけが乾燥という試練に耐えぬいて生き延びたのだろうか。あるいは、根を下ろした場所が、他の場所に比べてたまたま良かったのだろうか。

砂の上に腰を下ろし、木の幹に背中を預ける。目を閉じる。静かだ。自分の鼓動が聞こえる。

「昔、テレビで『この木なんの木』という宣伝があったな」

「あれはわが地元茨城の日立の宣伝だっぺ。いまもやっているよ。そうだ、『この木なんの木写真コンテスト』というのがある。カワサキ君、これを撮っておいて応募したらどうだ」

「確かに絵になるかも知らん。枝振りがもう少しよければいいんだがな」

「枝振りより沙漠の中にただ一本、耐えに耐えた気高さがこの木の売りだっぺ」

「うん、確かに気になる木であることはまちがいないな」

ヒトにはそれぞれ思い出の木というものがある。ターザンごっこに興じた幼い日の神社の大欅、友と酒を飲み交わした瞑想の松、失意を胸に落ち葉を踏みしめた銀杏並木。この木もわたしのこころの中で思い出の木に育っていくのだろうか。

写真を撮るには太陽が頭の上で、条件が悪い。彫りが深く表情のある写真は、影ができる早朝か夕方と相

場が決まっている。写真コンテスト応募は諦めて、そろそろ出発することにする。

マシコ君に代わって今度はわたしが運転する。エンジンをかけ、ギアをドライブに入れてアクセルを軽く踏んだ。しかし車は動かない。タイヤの接地面が柔らかくて抵抗が多いのだろうと、アクセルをさらに踏み込む。いやな予感がした。車の前輪が空回りし、砂に沈んでいくような感覚があった。車を降りて、前に回ってみる。案の定、タイヤが三分の一ほど穴に埋まっており、その周りにはタイヤの回転で巻き上げた小さい砂の山ができている。

道路から進入してくるときは、スピードがあったため抵抗が少なかったのだが、車の発進という最も抵抗がかかるときにスタックしてしまったのだ。沙漠のまん中で車がスタックしてしまい、そのままドライアップして死んでしまう人が毎年何人かいるという話をレンタカー会社のスタッフから聞いていた。その時は、

「間抜けな奴はどこにでもいるもんだ」と鼻で笑っていた。そんな我々がスタックしてしまうなんて・・・。

「マシコ君、スタックしちゃった」

「・・・・・・・・」

「マシコ君、技術屋なんだから、どうすればいいか分からんのか」

「技術屋は関係ないっちゃ。とりあえず、ギアをリバースに入れて、後ろ向きの脱出を試してみっぺ。それから俺が後ろに乗って少しでも駆動輪に圧力をかける」

「おう、さすがは技術屋」

わたしは車を運転してから二十年になるが、こんな経験は一度もない。タイヤチェーンの装着もジャッキアップも、ボンネットを開けたことさえない。

エンジンをかけ、ギアをリバースに入れて、恐る恐るアクセルを踏み込んでみる。一瞬、車体が後ろに跳ね上がったような気がしたが、再び前輪が掘った穴の中に落ち込み、砂を掘るばかりで，どんどん沈んでいく。

「カワサキ君、ハンドルを左右に揺さぶるようにしてみてくれ」

「いやこれ以上、タイヤがもぐり込んだら、重機でもなければ引き出せなくなる」

タイヤが落ち込んだ穴を掘って、周囲にある小石をタイヤの下に敷こうと考えたが、スコップどころか棒一本さえない。持ち物で砂を掘るのに使えそうなモノがないか考えたが、

割り箸かスプーンぐらいしか思いつかない。

タイヤの空気を抜いて空気圧を下げ、地面への接地面積を増やしてみることも考えたが、一番近くのガソリンスタンドまで、まだ百キロもある。例え脱出できても、そこまでたどり着くのが大変だ。

落ち着け、落ち着けとまず自分に言い聞かせてみる。水は一日分ぐらいは十分あるし、道路からそんなに離れているわけでもない。スワコプムントからセスリエムに向かう、この国道C一四号線は、ナミビアの大きな観光地を結ぶ道路で、交通量も多い。オプヲ周辺のナミビア北部では、一日に一台の車とすれ違えれば御の字だったが、ここでは一時間に一、二台の車が通る。

「マシコ君、誰かに助けてもらうのが一番だ。こちらの連中ならスタックにも慣れているだろう」

「何時のことになるやら・・・・」

マシコ君と道路まで戻り、道端に座り込む。空がとてつもなく広く、そして青い。車という鋼鉄の殻を脱ぎ捨て、褐色の大地と青い空の間に放り出されてみれば、ヒトなどというものはなんと頼りない存在なのだろうか。このあまりにも単純な風景の中では思考や想像力さえも奪われてしまうようだ。

学生時代に観た『ゴドーを待ちながら』という芝居を思い出した。木が一本しかない殺風景な舞台で、二人の浮浪者がゴドーという人物を待ち続けている。ただそれだけの芝居だ。ゴドーが何者でいつ来るのか来ないのか、二人とも知らない。小難しい芝居で、私にはよく理解できなかったが、いまのわたしとマシコ君は、路傍で膝を抱えていたあの時の二人の登場人物みたいだなと思ったのだ。

今日はスワコプムントを出発し、大西洋に別れを告げ、沙漠を東に向かって二時間ほど順調に走ってきた。もう少しでクセイブ峠だろう。それを越えれば、ほぼナミブ沙漠を西から東に渡りきったことになる。あと少しだったのだ。もう少し慎重に行

動すべきだったと後悔しても、もはや後の祭りである。

先ほどから二人の間に会話はない。マシコ君は真っ直ぐ伸びる道路の西を、わたしは東を祈るような気持ちで見つめている。遠くで黒いものが動いたような気がして、もしかしたら車かと立ち上がりかけたが、駝鳥だった。

暗くなる前に車が通りかかるだろうかと不安がよぎる。待つのに飽いてくる。ただ呆然と車が来るのを待っていても仕方がない、タイヤの下に敷く小石でも集めるかと考え始めたとき、ついに水平線の彼方に砂塵が立っているのが見えた。

「車だ」

わたしは叫ぶと同時に立ち上がった。マシコ君もばねが弾けるように腰を浮かし、手のひらを額にかざし東の地平線を睨む。

間違いない。砂塵の帯を後ろに残しながら、一台の車が確実にこちらに近づいている。

大型のピックアップトラックだった。あんな車を観光客が運転するはずがない。プロレスラーみたいに頑丈で力持ちの地元のやつに違いない。それに四輪駆動だろうし、ロープがあれば牽引してもらえる。

地平線の彼方まで直線といってもいいような真っ直ぐな道路なのだ。もう運転手からも我々の姿が見えているはずだ。二人とも両手を頭の上に伸ばして、左右にゆっくりと振る。

自らが巻き上げる砂塵の中から逃げ出そうとでもするかのように、ピックアップトラックは猛然と突進してきた。我々との距離があっという間にちぢまる。運転手ひとりだ。助手席に人影はない。後の荷台に荷物を山のように積んでいる。そろそろ減速するだろう。少し緊張していたけれど、なんとか笑顔を作った。「遅かったじゃないか」と、冗談のひとつも言ってやろうかと、頭の中で言葉を探した。

しかし車は止まらなかった。風圧で体がよろけるほどのスピードであっという間に通り過ぎて行った。ものすごい砂塵が舞い上がり、わたしは両手で顔を覆い、目を閉じた。砂塵が収まった時には、もう車の姿はなかった。さっきよりいっそう濃密な静寂が辺りを包んだ。急に太陽が熱を帯びてくるようだった。

「あの野郎！停めて話しぐらい聞いたらどうだ。沙漠の仁義を知らんやつだ」

そのまま行過ぎてしまうなどとい

うことはまったく予想していなかっただけに、わたしは大声で毒づいた。
「黒人だったな。まったく停めるそぶりがなかった。荷物を沢山積んでいたし、急いでいたのかも知らん」
「遭難した船があれば、何はさておき、助けるのが船乗りの掟だよ。畜生め」

「カワサキ君、キミの格好が怪しまれたのかも知らんぜ。パレスチナのゲリラみたいなナリだからな」
　わたしが着ていたのは一昨年エジプトで買ったガラベーヤという貫頭衣だ。それに白地に赤い格子柄の頭布を被っている。アラブ世界では最も一般的な服装だ。郷に入れば郷に従えで、沙漠を動き回るにはこれが最も適しているのだ。
「こんな腹の突き出たゲリラがいるもんか。マシコ君、仕方ないから二人でもう一度やってみるか」
　いつまでも腹を立てていても事態は一向に解決しない。こうなったら指でもスプーンでも使って砂を掻き、根気良く礫石を拾い集め、自家製の石畳の道路を作ってやるしかない。頭の中では、プロジェクトXのテーマ音楽、『風の中のスバル』の旋律が滔滔と鳴り響き始め、わたしは道路を背にして決然と車の所に戻り始めた。
　再び車の下を覗き込む。運転を始めてから初めてのスタックということで、さっきは少し動揺していたのかもしれない。良く見れば前輪が三分の一ぐらい沈んだだけで、後輪はそんなに砂を削っていない。弱気を起こしてはダメだ、こんな時は絶対に大丈夫だと確信が持てるまで、丁寧にリカバリーの作業を進めることが肝心だ。
「マシコ君、どうする」
「まずウィスキーでも、ちびっとなめるっぺ」
「う〜ん、　なるほど、異議なし。実に的確な判断だな」
　携帯用の錫製ウィスキー容器は、うがい薬代わりに、車のコンソール

に常に入れてある。わたしが車の中に首を突っ込み、それを取り出そうとしていた時である。

「また来たぞ」

マシコ君が怒鳴った。

今度は大型トラックだ。知らないうちにかなり近くまで来ている。わたしもマシコ君も手を振りながら道路に向かって必死に駆け出した。我々が道路の端にたどり着くのと車が横切るのとほとんど同時だった。

今度はさっきよりさらに大量の砂塵が舞い上がった。砂粒が頬に当り、頭に音を立てて降り注いで来る。マシコ君はその場にうずくまり、両手で顔を覆っている。わたしも頭衣で鼻を覆わなければ息もできない。

「マシコ君、大丈夫か」

「あぁ・・・・・また無視された」

二人とも埃を払いながら立ち上がった。口の中がざらざらする。まったく砂を噛むような思いというのはこのことだ。必死で走って来たから息を止めるのも難しく、相当な砂埃を吸い込んでしまった。

まったくなんと薄情なやつだと、車の走り去った方向を眺めると、なんと治まりつつある埃の向こうに、さっきのトラックが停まっているではないか。いや、ゆっくりこちらにバックして来ている。

「おい、マシコ君。停まってくれたぞ」

わたしは車がバックしてくるのを待ちきれず、トラックの方へ駆け出した。コンテナトラックだと思っていたが、トラックの荷台を座席に改造した観光バスだった。車窓の向こうから若い女が笑っているのが見えた。

運転席の窓が開き、男が顔を出した。

「助けてくれ」

埃が目に入ったせいで、わたしは涙を流していたかもしれない。

「どうした」

「スタックだ。あの車だ」

黒人の運転手が大げさに肩をすくめ、車内に向かって「スタック」と大声を出した。とたんに乗降口が開き、二十代と思われる白人の若者たちがぞろぞろ降りてきた。男女合わせて二十数人はいる。退屈していた時に、珍しいものにでも出会ったかのようにみんな楽しそうだ。これだけの人数がいれば、車をお神輿みたいに担いで持ち出すこともできる。

「あんたたち、なに人なの」

みんなを車のところまで先導しているわたしに、タンクトップのそば

かす娘が小走りに走り寄って来て、話しかける。

「ニッポン人だ、キミたちは」

「わたしたちはドイツ。オーバーランドツアーていう、ケープタウン発のツアーなの。ところであんたのその服、カッコイイわ。後で一緒に写真撮っていい」

「もちろんOK」

彼女は女友達に駆け寄り、わたしの方を指差しながら嬉しそうに笑っている。これではまるでピクニック気分だ。

観光バスの運転手が車体の下を覗き込む。スタックには慣れているらしく、この程度なら簡単だという表情でみんなにてきぱき指示を出す。私が運転席に座った。

「ミスター、ギアはバック。エンジンの回転数は千ぐらい。さあ、みんなで押してくれ」

十人ほどの若い男たちが車の回りに一斉に取り付く。娘たちは囃子役だ。車はわたしがアクセルを軽く踏んだだけで簡単にスタックから抜け出した。若者たちの間でいっせいに歓声が上がる。

再びスタックしては困るので、ついでに道路まで押してもらうことにする。今度はギアを前進に入れて、ゆっくり進む。瞬く間に車は道路まで押し出された。

リーダー格の男の子が笑顔で腕を差し出した。わたしも彼の手をがっちり握り、ドイツ人と親しくなるたび繰り返してきた得意の冗談を披露する。

「ありがとう、また何かあったら日本とドイツで一緒にやろう。ただし今度はイタリア抜きでな」

リーダー格の男の子が、ドイツ語でわたしの冗談をみんなに披露すると、どっと笑いが広がった。若者たちは手を振りながら、バスに戻って

いった。わたしとマシコ君は、ウィスキーが入った錫製スキットルに代わるがわる口をつけて、焼け付くような琥珀色の液体を喉に流し込んだ。

グレートエスカープメント

ナミブ沙漠はナミビアの大西洋岸を南北千六百キロに渡って埋め尽くしているのだが、東西の幅は四十キロから百三十キロで、海岸沿いに伸びる細長い沙漠である。沙漠の東端はグレートエスカープメントと呼ばれる急崖地形によって内陸の台地と区切られている。

その急な崖が目の前に見えてきた。我々の車はアクシデントを乗り越え、ついにナミブ沙漠の東端までやって来たのだ。三日前にはトワイフェルフォンテインから大西洋岸に向けてナミブ沙漠を東から西に横断した。今日はそれより南方の一番幅の広いところを西から東に向かって突っ切って来た。

高低差三百メートルほどの急傾斜の斜面を一気に登るとクイセブ峠である。峠の上は板状の石が舗道の敷石のように連なる広くて平らな丘である。崖の縁から西を眺めると、我々がやって来た道が白い一本の帯となって地平線のかなたに消えているのが見える。峠の緩やかな斜面に岩を突き破るかのように奇妙な木が数本生えていた。先ほどの木は緑の葉を茂らせていたが、この木は幹の先端にアロエのような葉をわずかに付けているだけの貧弱で奇妙な木である。しかし荒涼とした背景に妙に良く似合っている。

枯れているのかなと、葉に触ってみると、しなやかで確かに生きていることが感じられた。ガイドブックを開くと、クイバーツリーと写真入で名前が出ている。幹全体が水を溜め込める構造になっているらしい。

反対に東の方を眺めると黒い岩に覆われた岩山が不気味に連なり、クイセブ川が削った深い谷が影を作っている。木は一本も生えていない。むき出しの象の皮膚のようなしわが岩の表面に見られる。地中から湧き出してきたマグマが流れた筋なので

あろうか、それとも長年の風化によって刻まれたものなのだろうか。
地質学にはまったくの素人であるが、黒い色から玄武岩だろうと推測する。玄武とは中国神話で方位をつかさどる四つの神のうち、北方に相当する蛇と亀が合体した神体で、黒い色の意味もある。
峠を境にして地質が明らかに変わったのだ。今までは小さな礫石を含んだ砂沙漠が続いていたのだが、峠から東のエスカープメント上部は土壌に乏しい岩石沙漠なのである。
「マシコ君、エスカープメントは大陸が分裂したときの裂け目にできた断層崖だろう。そうすると大陸の縁、つまり海岸部になければおかしくないかい」
「カワサキ君、この世は千変万化。それを固定的に見るところから苦が生まれるというのが、お釈迦様の教えだっぺ」
「崖が動いてきたのか？」
「崖だって風雨に削られて、だんだん後退する」
「百五十キロもかい」
マシコ君は部下に技術指導をするみたいに腕組みして、諭すように話す。
「カワサキ君、二億年の時間を忘れてはいかんよ。一年に一ミリ削られても、二億ミリ、つまり二百キロ、崖は海岸線から後退する」
「なるほど、百五十キロは想定の範囲内か。さすが技術屋だな」
「技術屋は関係なかっぺ」
二億年の時間を考えてみれば、山がなだらかで丸みを帯びているのもうなずける。峠の眺めもすばらしいが、車のトラブルで今日の行動は大幅に遅れている。先を急がなければ生らない。

車は峠から再び急な斜面を下り、クイセブ川の深い谷底に降りる。ク

イセブ川の源流は、ウィンドフック西方の高地にあり、首都の水源にもなっている川だ。長い年月をかけて、グレートエスカープメントを削り、深い谷を作っている。予想したように水は一滴も流れていないが、三十メートルほどのコンクリート造りの立派な橋が架かっている。ナミビアに来て、橋らしい橋を見たのはスワコプ川に架かる橋に次いでこれで二度目である。日本ではどうということもない平凡な橋だが、ナミビアでは一気に渡りきってしまうのは惜しいような気さえする。マシコ君も何か珍しいものを見るように橋を真剣に眺めている。

クイセブ川を渡り、再び急斜面を登って、山岳地形の広い稜線をしばらく走ると、道は徐々に高度を下げ、再び平原に出る。

ここまで来ると海岸部と違い、草が増えてくるし、背丈も幾分長くなる。雨が降らないのは、寒流の影響で大気下層が冷やされる結果、大気が安定して上昇気流が発生しにくいためであると言ったが、海からの影響が弱まる内陸に入るに従って、降雨量は少しずつ増えてくるのだ。南回帰線を横切り、ウィントフックから来る国道C二六号線との合流地点を過ぎると、直ぐにソリテールという町に出る。地図には町の印がつけられており、名前が書いてあるのだから、町には相違ない。しかし実際は町というより、現代の峠の茶店といったところであろうか。

雑貨屋とファーストフード・レストランを兼ねたような店が一軒、給油口が二つあるガソリンスタンド、十部屋ほどの小さなモーテルがこの町のすべてである。ソリテールという名前から、トランプの一人遊びを思い出したが、名前の通りさびしいオアシスだ。

壊れた農機具や錆びた車が庭に転がり、その脇に南米原産のサボテンが赤い花をつけている。

時間はずれのレストランには、眠そうな犬がだらしなく寝そべり、その犬よりさらに眠そうな従業員のおばちゃんがテレビで一年前のワールドカップサッカーを見ていた。ビールとサンドウィッチを注文すると、おばちゃんはいかにも不機嫌そうな態度で厨房に消えていった。

この町は、ウィントフックとウォルビスベイと砂丘観光の拠点セスリエムからの三本の道が合流する地点に位置している。旅人はここで給油し、喉を潤し、一休みして去ってゆ

く。この町を目的にここを訪れる人はいない。通過点としての存在しか、この町の価値はない。ここからセスリエムまでは約八十キロ、一時間程度の距離である。

砂嵐

国立公園であることを示すちっぽけなアーチを潜り抜けると、小学校の校庭ほどの広場にでる。そこで道は行き止まりになった。広さ五万平方キロ、アフリカ一の広大な面積を持つナミブ・ノークルト国立公園の入り口、セスリエムである。

セスリエムは風の中だった。日陰を作るために植えられたアカシアの木の葉がはげしく揺れている。

広場の右手に忘れられたようなガソリンスタンドが一基、左手に小学校の分校程度の小さな国立公園の管理事務所とキオスク、職員の宿泊所と思われるあばら屋数軒、広場の奥にキャンプ場。それがセスリエムのすべてである。

セスリエムとはアフリカーンス語で、六本の革ひもを意味している。初期の開拓者が深い渓谷から水を汲むのに、六本の牛革ひもを結び合わせ、その先にバケツをぶら下げたことに由来している。

ここから国立公園内に入るには、管理事務所で入場料を支払い、許可証を貰わなければならない。管理事務所の軒にぶら下げられた「ナミブ・ノークルト国立公園」の看板も風に揺れていた。

入場料は一人、八十ナミビアドル、普通車一台十ナミビアドルである。日本円にして合計三千円ぐらいだ。

許可証をチェックする公園入り口のゲートには、誰もいなかった。ほとんどの観光客が日の出とともに朝早くやってくるのだ。公園内の滞在が許されるのは、日の出から日没まで。午後二時ともなれば大方の観光

客は、公園を後にする時間である。我々も本格的な砂丘探検は明日、四輪駆動の車を雇って出発する計画だが、今日のうちに普通乗用車で行けるところまで行って、チラッとでも砂丘を拝みたい。まだ日没までには四時間近くある。

公園内の観光用道路は西に向かってほぼ一本道だ。簡易舗装がされているのだが、きびしい環境に晒されて、劣化し穴だらけである。独立した時に、戦争に参加した兵士たちの失業対策としてこの道路工事が行われたというから、もう十五年が経っているわけだ。

道路はセスリエムから六十五キロ奥まで続いている。そしてナミブの華、世界一美しく高いといわれる砂丘は、そこから四輪駆動車でしか入れない砂の道を五キロ行ったソーサスフレイと呼ばれる場所にある。今日、我々が目指すのは、普通乗用車でも簡単にアクセスできるＤＵＮＥ４５という砂丘である。セスリエムから四十五キロの所に位置しているのでこの名前が付いているのだ。

公園のゲートから十分も走ると、左右に紅茶色の砂丘の連なりが見えてくる。ついにやって来たのだ。一年前、便所で手にした写真集の中の一枚の写真が、わたしをここまで連れてきたのだ。砂丘の色は周囲の平原に比べて確かに赤味が強い。紅茶色ともバラ色ともいわれる所以である。

右側の砂丘の連なりは、稜線がたおやかでやさしげな表情を見せており、グランドママと呼ばれている。それに向かい合って連なっている左側の砂丘は、グランドパパと呼ばれており、シャープで雄大な稜線を持っている。道路は向かい合う二つの砂丘の連なりのあいだを縫うようにして延びているのだ。

ＤＵＮＥ４５は観光用道路から最も簡単にアクセスできる砂丘である。砂丘の前に大きく葉を茂らせたキャメルソーンの木があり、この下に車を停めた。

車から降りると、帽子が飛ばされそうになるぐらい風が強い。周囲に風にそよぐものがないので、車の中から外を見ていたときは、たいした風ではないと思っていたのだ。空の高いところで風の渡る音がしている。

ふもとから見えるＤＵＮＥ４５の高さはおよそ百五十メートル。仰角二十度ぐらいのなだらかな稜線がこちらに向かって流れ落ちている。しかしこれは、奥に向かって延々と続

く砂丘のほんの一端なのである。
　我々は大西洋岸から約百五十キロ東の内陸に向かってナミブ沙漠を横断し、セスリエムに到った。そこから今度は逆に、大西洋岸に戻るように西に向かって四十五キロ走ってきた。砂丘は大西洋岸まで百キロ、反対の東側に向かって五十キロ、そして南に八百キロに渡って拡がっている。我々は今その広大な砂丘群の北端に立っているのだ。
　砂丘の端に足を踏み入れてみる。思ったより硬い。足首が埋まってしまうぐらい沈むのかと、そっと踏みつけてみたのだが靴の底が埋まる程度である。足元の砂を手のひらですくってみると、周囲の平原の砂とは粒の大きさが明らかに違う。おそらく直径が一ミリ以下であろう。砂は岩石が長い時間をかけて風化し、

壊されて次第に小さくなったものである。小さくなった砂粒は風によって風下に運ばれてゆく。
　砂丘の砂のような一ミリ程度の砂は、風にあおられて空中に浮上するが、少し飛ばされて落下する。この落下した砂粒が、また次の砂粒を移動させる。これが広い沙漠で何回も繰り返されるうちに、砂がたまるところができてくる。これが長い時間積み重ねられ、大きく成長したものが砂丘なのである。
「マシコ君、砂時計用の砂として十分使えるぐらい粒子が細かいな」
「風によって選別を受けるからだっぺ。大きくて重い砂粒は飛ばないし、小さくて軽いやつは黄砂みたいにとんでもなく遠くまで飛ばされてゆく」
　そう言われてみれば砂粒の大きさが揃っている。その上、砂の粒子どうしがぶつかりあって角が取れ、丸みを帯びているから、握ったときに手のひらにしっくりくる。わたしは、風力で麦の実と籾殻を選別する唐箕（とうみ）という農機具を思い出した。羽根車を回して風を起こし、その風の中に籾を落として、重い実と軽い籾殻を分ける仕組みである。
「この砂は石英だっぺ。ガラスの原料になる」マシコ君は砂粒を手のひらの上で転がすようにして吟味している。

「石英だとすると、なぜこんなに赤いんだ」
「赤い酸化鉄が牡丹餅の黄な粉のように石英の粒を包んでいるんだ。酸化鉄は水に溶けにくい。他の鉱物が溶けたり、分解されたりしても地上に残っている」
　大学で金属材料学を専攻し、工業材料メーカーの技術屋として飯を食ってきたマシコ君の説明によどみはない。
「そんなに酸化鉄が含まれているなら、鉄鋼の原料として利用できないのかな」
「タタラを使った製鉄で利用されたけど、高炉を使った製鉄がいまは主流だから、砂鉄はあまり使われなくなったんだ。しかし日本刀みたいな純度の高い鋼を作るにはタタラ製鉄もまだ捨てたもんじゃないよ。カワサキ君、それより沙漠の砂は石英だからガラス原料として使い道がある。最近は金属シリコンの原料としても重要なんだ」
「本当かい、するとこれは宝の山だな」
「カワサキ君、憧れのナミブまでやってきて、カネ勘定しなくてもよかっぺ。それより早く登ってみようや」
「風が相当強いぞ。俺は目に砂が入ってゴロゴロするし、明日もあるから止めとくよ」
「このくらいの風で日和見では情けないっちゃ。天よ、我に艱難辛苦を与えたまえだ」
　マシコ君はペットボトルの水を持って、一人で砂丘の稜線を登っていった。わたしはキャメルソーンの木の下に腰を下ろして、マシコ君の帰りを待つことにした。車に積んでいった缶ビールを持ち出し、喉に流し込む。
　砂丘に登らなかったのは、風の強いこともあるが、いっぺんに砂丘に登ることがもったいないような気がしたからである。大好きなご馳走を口の中に運ぶ前に、いまから食べるのだという喜びをすこしでも長い時間かみしめようと、手をつけずにしばらく眺めているようなことはないだろうか。口の中に入れても急に飲み下したりせず、ゆっくり噛み締めながら、しばし至福の時を過ごしたいと思わないだろうか。それと同じ気分といったら分かってもらえるだろう。
　ひとりになると急に静けさが気になる。沙漠は砂の海だ。地面に一人膝を抱えて腰を下ろしていると、大海原の中で浮き輪ひとつにつかまっ

て漂流しているような心細さ、頼りなさを感じる。沙漠の広さに自由や開放感を感じたくて沙漠に憧れたのだが、あまりの無限定な広がりはかえって人を不安にさせるのかもしれない。

しばらく目を放した間に、マシコ君の姿は見えなくなっていた。砂丘の高いところは先ほどより風が強くなってきているようだ。晴れた風の強い日、富士山の山頂から雪煙が舞うのを遠望できることがあるが、それと同じように稜線から砂が煙のように舞い上がっている。砂は風上側の斜面を駆け上がり、馬の背のように細い稜線から風下側に吹き出している。

何千万年も繰り返されたことが、今日もわたしの目の前で起こっているのだ。今日吹いている風も砂丘の稜線に直角の方向から吹いている。南西の海から吹きつける冷たい風だ。この風が八千万年のあいだ砂を運び、砂丘を盛り上げ続けてきたのだ。

時間は眼に見えない。しかし、あのたとえようもない美しい稜線は、時間の堆積というものがカタチを取ったときに現れたのではないだろうか。砂時計の砂は時の流れを形にする。ならば砂丘は積み重なった時の堆積だろう。

マシコ君のことが心配になりかけた頃、砂丘の下の平原をこちらに歩いてくる姿が眼に入った。気が付かないうちに馬の背の稜線から風下側の急な斜面を下っていたのだ。登り始めてから三〇分ぐらいしか経っていないから、ピークまでは行けなかったに違いない。少しうつむき加減だし足取りが重い。缶ビールを持ってこちらからも出迎えに歩いて行くことにした。

「お疲れさん、眺めはどうだった」

「いやぁ、眺めどころじゃないよ。風が強くて息もできないし、ガスマ

スクが必要だな」
　マシコ君はペットボトルの水で勢いよくうがいをすると、わたしの手渡した缶ビールをうまそうに喉を鳴らして飲み込んだ。
「息をするたびに口の中へも鼻の中へも砂が入ってくる。耳もなんだかおかしいよ」
　マシコ君は耳の中の砂を払うために、傾けた頭をこぶしで小刻みに叩いている。襟首からも砂がこぼれ落ちた。

「明日また再挑戦できるし、そろそろ今夜のねぐらへ向かおうじゃないか」
　今夜は公園に隣接した広大な私有地を持つクララロッジという宿を予約してある。沙漠の真ん中だが、地下水をくみ上げ、シャワーもプールさえもある高級リゾートである。
　ロッジに行くには一度、公園を出なければならない。来た道を引き返し、公園のゲートがあるセスリエムへ向かう途中で、風はますます強くなった。フロントガラスに砂が当たって音を立てる。ウィントフックのレンタカー会社で、砂嵐のための自動車保険に入るかどうか聞かれたことを思い出した。砂粒がフロントガラスに当たり、曇りガラスのようになってしまうという話を笑って聞いていたが、そんなこともありうると思わせるような事態である。
　三十分も走ると、今まで見えてい

た砂丘の姿もかすんできた。周囲は一挙に夕暮れが近づいてきたかのように暗くなる。窓はもちろん締め切ってあるのだが、どこからともなく細かい砂が入ってきて眼が痛い。道路はほとんど真っ直ぐなので運転は難しくないが、道路上の障害物や対向車があると危ない。スピードを落とし、身を乗り出すようにして前方の砂煙を見つめる。

小船が嵐の海から木っ端のように揺れながら港の中へ逃げ込むように、わたしの運転する車は、ほうほうの態でセスリウムへたどり着いた。

クララロッジ

クララロッジは沙漠の涸れ川の岸に隠れるようにして建っていた。レセプションやレストランがある母屋の周りに十二棟のコテージが並ぶ小さな宿だ。コテージは周囲の景観に溶け込むようにわら屋根で造られている。また壁は寝室部分がテント風

のキャンバス地であり、奥のバスルームは赤い土壁である。バスルームは外階段が付いていて、屋上に出られるようになっている。

クララロッジは完全に沙漠の中にあって、部屋のテラスから一望の下に砂丘が望める絶好の場所に位置している。ウィントフックから軽飛行機をチャーターしてセスリエムの簡易飛行場に舞い降り、ここに泊まって砂丘見物という金持ちの観光客が引きもきらず、予約は常に満杯である。宿泊料金もナミビアにしてはべらぼうに高い。食事と明日のソーサスフレイへのガイド付ツアー代込みで一人一泊五万円もするのだ。

こんな高い宿に泊まるのはわたしの旅の流儀に反するのだが、沙漠の中には安宿はない。宿泊代をケチろうと思うとテントで野宿するしかな

いのだ。あこがれのナミブ沙漠で泊まるのだからと、悲壮な決意を固めてこの宿に泊まることにしたのだ。

この宿を予約したのはもうひとつ理由がある。このロッジは敷地がナミブ・ノークルト公園に隣接しているため、公園への専用のゲートを持っているのである。一般の客は我々が今日通過したセスリエムのゲートから公園に出入りするしかない。しかも出入りは日の出から日の入りと定められている。

しかしこのロッジの客だけは、砂丘に近い専用のゲートから公園に出入りできる。ということは、他の客が来る前に砂丘に登り、日の出を拝むことだってできるのである。これは贅沢ではないか。田舎ものはケチのくせに特別扱いというやつに弱いのだ。

夕方吹き荒れた砂嵐は跡形もなく、いまは澄んだ夜空に無数の星が瞬いている。夜中にトイレに行きたくて眼が覚めたついでにコテージの屋上に登ってみたのだ。マシコ君はウィスキーの酔いも手伝ってか、軽くいびきをかきながら寝ている。

チェックインする時にレセプションで、布団を屋上に持って行き、そこで寝てもかまわないと言われていた。恋人と二人で星を見上げながらまどろむのであれば、ロマンチックな体験かとも思ったが、マシコ君と二人では布団を移動するのも面倒だ。飲みながら、後で屋上に出てみようと話していたのだが、そのまま二人とも酔いが回って寝てしまった。

沙漠の夜空は広い。地平線から地平線まで星屑が散らばっている。そして一つひとつの星が大きくはっきりしていて、何万光年もの宇宙のかなたで光っているということがにわかに信じられないぐらいだ。天の川がその一番明るい部分を天頂近くに

置いて、南から北へ、ほぼ全天を横切っている。

夜の空を見上げるのは何年ぶりになるのだろうか。星の名前も星座の名前も良く分からないわたしだが、南十字星の名前ぐらいは知っている。

夕食の時に、給仕の女の子に南十字星の大体の位置を聞いておいた。南の砂丘の連なりの中に、きれいな二等辺三角形のシルエットを見せている部分がある。腕を真っ直ぐ伸ばした状態で、親指と人差し指を縦に大きく広げ、砂丘の二等辺三角形の頂点に親指を置くと、人差し指のあたりに南十字星が見えると彼女は教えてくれた。

さらに彼女の説明から、わたしは長年の大きな勘違いに気づくことになった。わたしはいままで、南十字星は北極星のようにひとつの星だと思っていたのだ。ところが南十字星とは四つの星からできていて、その二つずつを結んだ形が十字になるというのだ。

四つの星は天の川の中で割合明るく輝いており、簡単に見つけられた。十字架の軸は必ずしも水平、垂直で交差するのではなく少し横に傾いているようである。

その南十字星の斜め上、天の川の脇に、雲がかかったようにぼんやり明るい場所がある。マゼラン星雲に違いない。世界で初めて地球一周の航海を成し遂げたポルトガルの探検家マゼランが航海中に発見したといわれる大きな星雲だ。超新星爆発が観測され、科学的に話題が多い星雲だが、日本からは見えない。南半球に来たらぜひとも拝みたいと思っていた星だ。

夜空の星を眺めるときにいつも思い出す言葉がある。

「強い感嘆と崇敬の念とを持って、こころを満たすものが二つある。我が上なる星瞬く大空と我が内なる道徳律」という哲学者カントの言葉だ。わたしの場合、残念ながら我が内なる道徳律には感嘆も畏敬もしないが、星瞬く大空には素直に感激せずにはいられない。

日本では夜空を見上げることもなく、飲み屋街の裏小路をうつむきかげんに歩いているばかりで、理想として掲げる道徳律も忘れ去って久しい。しかしこの沙漠の真ん中で、ひとり夜空を仰ぎ見ていると、宇宙の霊気に包まれたような安心感と素直な気分が湧いてくる。夜の香りがかぐわしい。

砂も岩も砂丘も荊草も、いまはほ

の明るい闇の帳の中に解けていた。昼が論理の世界とすれば夜は情感の世界だ。何もかもがいまは存在をあからさまに主張しない。

わたしはあまりに「意味」を求めすぎているのかもしれない、ふとそんな気持ちが頭をよぎる。ヒトは過剰なアイデンティティに絡めとられて身動きもできず、あらゆる出来事を意味づけしなければ落ち着かない。砂丘がそこにあるように、空がそこにあるように、存在するものはただあるがままにあるのだ。いたずらに意味や価値を追い求めるのは、愚かなことではないのだろうか。

かすかにゲッコーの鳴き声が聞こえた。カエルのような鳴き声だ。なんの音もしない静かな夜の中で、それは生きているものの物悲しい呟きだ。夕食のときに、何の鳴き声だろうとマシコ君と二人で想像してみたが分からない。南十字星の位置を訊ねた給仕の女の子が、親切にも図鑑を持ってきてくれて、gecko という文字を指差した。図を見るかぎりヤモリの一種のようだ。日中は砂の中の穴に隠れており、日没とともに活動を開始する夜行性の動物である。ゲッコーもなぜここに居るのか、なぜ鳴いているのかなどと問うことはないだろう。

少し風が出てきていた。荊草がそっと息をするぐらいの風だが、急に肌寒さを感じた。薄手のパジャマのまま出てきたのだから無理もない。明日の天気はどうだろう。今日のようにまた強い風が吹くのだろうか。眼が冴えてしまって、とても眠れそうになかったが部屋に戻ることにした。

光のページェント

東の山の端が、かすかに赤みを帯びている。午前六時三十五分。あ

と三十分ほどでノークルト山脈から陽が昇るはずだ。風はまったくない。昨日の強風が嘘のような穏やかな朝だ。気温は十五度前後か。長袖のシャツに毛糸のチョッキを着てちょうど良いぐらいの気温である。

鉄の箱にタイヤをつけたような頑丈な四輪駆動車は、白々と明け始めた砂の平原を快調に突き進んでいる。運転しているのは黒人で大男のアレン。独立戦争にも参加したという四十歳ぐらいの頑丈そうな男で、からだの割に小さな目がかわいい。カーキ色の半そでの制服の上に、寒さ除けの厚手の毛布を被ってハンドルを握っている。

ロッジを出発したときは、ヘッドライトの明かりが濃い闇を強く照らしていたが、もはやその存在は力を失っている。今日は、砂嵐の中で昨日訪れたＤＵＮＥ４５のさらに奥にあるソーサスフレイと呼ばれる場所で世界一高い砂丘に登る予定だ。

「ナミビアに来て、ソーサスフレイを訪れないなんてクレージー！」とガイドブックにはビックリマーク付で大書してある。「世界一美しい沙漠」の栄誉の源泉もソーサスフレイにあるといっても過言ではない。時間はたっぷりある。その上、今日は

豪華なランチボックスをロッジに用意させた。ビールやワインもクーラーボックスの中で冷えているはずだ。

前後左右に激しく揺れる車の中で、前の座席の背もたれに必死に掴まりながらも、前方の砂丘から眼を放さない。日の出の一瞬を見逃してならない。本当は砂丘の上から日の出を拝みたかったのだが、そのためにはロッジを五時前に出発しなければならない。暗い中を息せき切って砂丘に登るのは遠慮したかったので、できるだけ砂丘の間近で日の出を迎えるということで妥協したのだ。

砂丘の中腹あたりには濃い霧が漂っている。海からの風が、沙漠の夜の放射冷却によって冷やされ、水分が飽和点を超えて霧の粒になったのだ。砂丘は我々にその美しい裸身を晒す前に、薄絹のベールをまとってひと時佇んでいるようである。

この朝霧が、生物にとって最低限の水分を保障し、ナミブ沙漠固有の多様な動植物をはぐくんでいるのである。どんな生物も水なしでは生きられない。世界で最も乾燥した沙漠といわれるナミブ沙漠で水を確保することは大問題なのだ。この苛酷な環境に適応するため、生物は驚くべき進化を遂げた。

奇想天外として前に紹介した二千年の時を生きる植物ウエルウイッチアもその代表格であるが、動物ではナミブ沙漠しかいないという珍しいカブトムシのことを書き落とすわけにはいかない。

ゴミムシダマシ科のこのカブトムシは、水分を摂取するために、聞くも涙、語るも涙の物語、すさまじくも見事な生きる知恵を見せてくれるのだ。

このカブトムシはその辺の地面を見渡せば簡単に見つかる。マシコ君

が写真を撮ろうとしたが、ピントが合う前にスルスルと動いて砂の穴の中に隠れてしまう。結構すばしっこい。体長二センチほどの黒い羽を持ったナミブ沙漠ではありふれた虫で

ある。彼らは霧が出ると、風紋の尾根のような周囲よりちょっと高くなった場所で、長い中脚と後脚を伸ばして尻を上げ、逆立ちの体勢をとる。そして流れてくる霧を全身で受け、体表に結露した水分を、体表伝いに口の部分に流し集めて飲む。

一晩でどのくらいの水分を摂取できるのか知らないが、かのダーウィン博士が狂喜乱舞しそうな見事な適応戦略ではないか。「キリアツメ属」というもっともらしい和名も付いている。

運転手のアレンが大声で何か叫び、右手前方を指差した。駝鳥だ。近づいてくる車から逃げるように三羽並んで砂丘の方へ走り出している。「フォト、フォト」と叫びながら後を追い始めたが駝鳥もなかなか速い。

車が大きく跳ね上がった次の瞬間、

車のサイドミラーに朝日が反射してきらりと光った。陽が昇るのだ。左前方の砂丘に眼をやると、砂丘の稜線に陽が当たり始めている。こうなると駝鳥どころではない。「ストップ」と大声でアレンに命じると、わたしはカメラをつかんで車の外に飛び出した。

わたしの陰が長く地面に伸びている。マシコ君の顔が陽に照らされて赤い。砂丘を覆っていた霧がゆっくりと渦を巻きながら音もなく消えてゆくのが見える。砂丘に向かって、夢中でカメラのシャッターを切る。

光が当たった斜面は明るく黄金色に輝いているのに対して、陰になっている部分は黒いビロードの生地を波打たせたように暗く沈んでいる。息を呑むような幻想的なコントラストだ。一瞬、黄金色に輝いた砂丘は、次の瞬間には赤葡萄酒色に、また次の瞬間には薔薇色へと、その表情を刻々と変えてゆく。それは単純だが壮大な沙漠の光のページェントだ。

筆舌に尽くしがたいというのは、単なる文学上の比喩ではない。本当に美しいものは、黙って言葉を飲み込むしかないのではないだろうか。砂丘は砂の盛り上がりに過ぎない。余計な装飾はない。技巧を凝らさない。ただ風のなすままに形を変えるだけだ。それは、女が高価な衣装でいくら着飾ったところで、完璧なプ

ロポーションの裸身に敵わないのと同じである。

人が神の啓示に打たれるのは、きっとこんな瞬間かもしれない。わたしは常日頃から神など信じないと公言している。しかしこのような荘厳なスペクタクルの前には、畏れ慄くほかになす術を知らない。わたしが「神などいない」といくら言い張ったとしても、「神がいないとしたなら、この世はなぜこんなに美しいのか」と問い返されたならば、返答のしようがないではないか。

空が青さを増してきた。砂丘の色は昨日見たのと同じような、紅茶色に落ち着き始めている。

「カワサキ君、そろそろ行こう。ここであんまり時間をとると、ソーサスフレイで陽が高くなってしまう」

マシコ君の声で物思いから我に返った。せっかく早く出てきたのに、これではソーサスフレイ一番乗りという訳にはいかなくなってしまう。

ソーサスフレイ

セスリエムから続いている観光用の道路は、沙漠に六十五キロ入り込んだところで終点となる。そこから先に道路はない。ソーサスフレイまで残り五キロは、深い砂に覆われた川床のような荒地を進まなければならない。深い轍の痕が潅木の間を縫って続いている。

アレンによれば、実際ここはツアチャブ川というノークルト山脈に水源を持つ涸れ川の川床なのである。日本の川のように護岸も堤防もなく、広い平原の中を水は低い方へ気ままに流れていく。流れは海岸までたどり着くことはなく、砂の海の中に消える。四年前（二〇〇一年）の雨季にはノークルト山脈に大雨が降り、ここに濁流が押し寄せたそうである。

何台もの車が深く地面を削り、まるでパリダカ・ラリー走路の最悪のコンディションのようだ。アレンはハンドルを右に左に切りながら、懸命に車を操るが、軟らかい砂にタイヤを取られて車は上下左右に激しく揺れる。

どこかをしっかり掴まえていないと車の外へ放り出されそうだ。四輪駆動の車でも悪路を運転する技術が

なければとても進めそうもない。

五キロの道のりを三十分ほどかけて、ようやっと目的のソーサスフレイに到着した。既に先に来た観光客が砂丘を登り始めている。やはり途中で日の出の写真を撮るために時間を使ったのが響いて、一番乗りとはいかなかったようだ。

ソーサスフレイは紅茶色の砂丘に囲まれた皿状の窪地である。フレイとは干上がった水場という意味で、あのエトーシャのパンとほとんど同じ意味である。先ほど超えてきたツアチャブ川の水が最後にたどり着く場所といっても良い。乾季のいま、ひび割れ乾ききった粘土質の土の上に立っていると、この場所が満々と水を湛えた巨大な湖に変わることなど想像もできない。ここまで水が押し寄せてくるのは、十年に一度あるかないかのことだという。それでも周囲にはアカシアの木が何本も大きく成長しており、草も青さが残っている。

アレンはここで我々の帰りを待っているということで、木の枝で砂の上に地図を書きながら大体のコースを説明してくれる。

「旦那、ここから見えるあの一番高いピークまで登れますかね」

「アレン、富士山知っている？知らないの。キリマンジャロは？」

「キリマンジャロはアフリカ一高い山ですぜ、旦那」

「我々はその程度の山ならば、一日二往復はできる」

「恐れ入りました。それじゃあ、五百メートルほど先のあの緑の木がある辺りから、左側の斜面を登って稜線に出てください。そのまま稜線伝

いにピークを超えて、向こう側のデッドフレイという窪地に下りる」

「分かった。時間はどのくらいかかる」

「キリマンジャロペースだと、三時間ですかね」

今日は風も全くなく、絶好の砂丘日和である。朝方出ていた霧は跡形もなく消え去り、透き通るような青空が砂丘の上に広がっている。砂丘は陽が斜めから差し込み、濃い陰影を作る時間帯が最も美しいといわれている。あまり陽が高くならないうちに登らなければならない。リュックに水とカメラを詰めて、早速出発することにする。

いまは砂丘の上に人影は見えないが、既に足跡が砂丘に向かっていくつか続いている。昨日つけられた足跡ならば、風で完全に消え去っているはずだ。既に数人が砂丘に向かったに相違ない。我々も白茶けた粘土質の窪地を、残された足跡を辿るように砂丘に近づいて行く。砂丘は近づくにつれ、ずっしり圧倒するような迫力で我々に迫ってくる。

砂丘は風によって常に移動するので、山のように決まった標高があるわけではないが、ここの砂丘は世界一の高さを誇り、高低差三百メートルを越えるといわれている。東京タワーの足許から塔の天辺を眺め上げたと思えばいい。

我々は二つの砂丘の稜線が、左右からなだらかに裾を引いて合流した、峠のような場所を目指して斜面を登り始めた。馬の頭と尻が砂丘だとするとちょうど鞍部に当る。そこまでたどり着けば、後は比較的なだらかな稜線伝いに頂上を目指せば良い。

峠までは高低差五十メートルほどでたいしたことはないと思ったのだ

が、これがなかなか大変な登りであった。斜面の角度は三十度ぐらいでかなり急坂といってよい。その上、靴が埋まるほど砂が柔らかい。足を一段高いところに踏み出し、体を引き上げようとしても力が入らない。まるで深い新雪の山を登るようなものだ。

「マシコ君、蟻地獄みたいな感じだな」

「三歩進んで二歩下がる、人生行路だっぺ」

「摑まるものもないし、砂に埋まった靴を引き上げるだけで相当なエネルギーをロスしているな」

「アレンが変なコースを教えるからいかん。こちらは風下側だっぺ。風下側の斜面は稜線を越えた砂が転がり落ちてくるだけだから、傾斜も急だし締まりも悪い」

我々が付けた深い足跡は、その直後に崩れ落ちてくる砂で瞬く間に埋まってしまう。

まだ十分と動いていないにもかかわらず、二人とも息が荒くなってくる。気ばかり焦っても、からだは一向に前に進まない。前に出した足が体重を支えるのに十分安定したことを確かめて、一歩一歩ゆっくりと登ってゆく。

稜線の鞍部にたどり着いたのは、登り始めて三十分以上たった頃だ。二人とも汗びっしょりである。これではとてもキリマンジャロペースというわけにはいかない。稜線は文字通り馬の背ほどの幅しかない。跨ぐように腰かければ両足が左右の稜線に垂れる。

まずは一休みである。風下側の斜面では見られなかった風上側の展望

が一挙に開ける。我々が登り始める前に一番高いと思っていたピークの奥に、さらに高いピークが連なっている。我々がいる尾根を左に辿ると、その見える限り一番高いピークに達する。しかしそこまでは、いままで登ってきた高低差の五倍はありそうである。尾根を右に辿って達するピークの方がかなり低い。「マシコ君、どうする。左のピークまでは三時間ぐらい掛かりそうだぞ」

「山高きがゆえに尊からず、血圧低きがゆえに長命ならず。右に行くことに異議なしだっぺ」

尾根筋を登るのは、急な斜面を登るよりは幾分楽である。しかし、馬の背ほどの痩せた尾根では足の置き場を誤ると、とたんに体の平衡を失い、どちらかの斜面に転げ落ちそうになる。

いや正確に言えば、馬の背どころではない。まだ誰も歩いていない朝一番の砂丘の稜線は、包丁の刃先のように見事に尖っている。

足を乗せると、鋭角のエッジはたちまち崩れるのだが、そうやって崩してしまうのがもったいないと思うほど美しい。

平行棒の上で演技する体操選手のような気分で、慎重にバランスを取りながら足を運ぶ。踏み出した足は、砂に沈んで歩きにくいが、沈んだ位置で足裏の安定を確認すれば、かえって体のバランスを取るには好都合な面もある。これが硬い岩ならまさに刃渡りみたいなもので、とても怖くて登れない。

もう一つ難儀なことは、靴の中に大量の砂が入り込み、靴が重く感じられることだ。脱いで裸足のまま登った方が楽かなと思ったが、沙漠には猛毒を持ったサソリが居るというではないか。

「靴を履く前に、サソリが入り込んでいないか必ず中を確かめる」と何かの探険記に書いてあった。サソリ座の女も怖いが沙漠のサソリはなお怖い。

五歩登って立ち止まり、十歩登って深呼吸、十五歩登って水を一口のペースだが、千里の道も一里からである。次の一歩を置く目の前の紅茶色の砂だけに目を落とし、ひたすら頂上を目指す。そして、苦闘一時間半、我々はついに砂丘の頂上を極めたのであった。

砂丘は疾走する

「モーツァルトのかなしさは疾走

する。涙は追ひつけない」と、小林秀雄はたたみかけるような名文で悲劇の天才を活写した。冬の道頓堀を歩いていた小林秀雄の頭に突然、モーツァルトの交響曲第四十番が鳴り響いたのだという。見晴るかす限り続く紅茶色の砂丘のうねりを目の当たりにしたとき、わたしの粗雑な頭にも、ウィーンフィルが奏でるそのシンフォニーが確かに鳴り響いたような気がする。

頂上からの展望は遮るものとてない三百六十度の大パノラマであった。透き通った、石でも投げれば壊れそうな蒼穹が全天を覆っている。その下に紅茶色の砂丘が、ゆるやかに流れる仏像の裳裾のような稜線を波打たせながら地平線まで続いている。目を下に転じれば、紅茶色の砂丘と砂丘の間に、白い砂を敷き詰めたような平らな窪地（フレイ）が横たわっている。空の青と砂丘の赤とフレイの白。ただそれだけである。ただそれだけの単純な美しさに圧倒されるのである。

一粒の砂は高々一ミリに過ぎない。風の作為によって三百メートルの砂丘が積み上がるのには気の遠くなるような時間が流れたに違いない。この砂丘の膨大な量の砂は、カラハリ沙漠の砂が南アフリカとの国境を流れるオレンジ川で海に運ばれ、さらに海流と波によって海岸に打ち上げられたものだという。それが南西から吹く卓越風によって内陸にすこしずつ運ばれてきたのだ。

その時間の流れの中にいまわたしは立っている。高々数十年を生きるわたしという小さな生命は、数千万年の自然の作為の中に立っている。こんな果てしない孤独がほかにあるだろうか。こんな妖しい感動がほかにあるだろうか。

モーツァルトの本質は「かなしさ」だと小林秀雄は言う。表面は明るく

快活であっても、ふとした瞬間にかなしさの表情が現れる、その陰影がモーツァルトだと。目の前に広がる砂丘はまさに明るさと暗さが交差している。

太陽が当る東斜面は、シューマンが「ギリシャ風にたゆたうごとき優美さ」とモーツァルトを表現したように、明るく、軽やかに裾を流している。それに対し西斜面は、明るさに慣れた目にとっては底抜けに深い陰影を帯びているように感じられ、アルフレート・ホイスが「デモーニッシュ」と呼んだモーツァルトの世界を表現している。

わたしの目に自然と涙がにじんできた。詩人でもないわたしが、もはやいかなる言葉を費やそうとも、この眺めを表現することはできない。なぜなら、わたしは目の前の風景を眺めていたのではなく、自分のこころの中の茫漠たる寂寥感を眺めていたのかもしれないのだ。

「砂丘踏みさびしき夢にあずかれるわれを思いて涙ながしつ」と 与謝野晶子は詠った。「時のうつるまで泪を落し侍りぬ」と芭蕉は詠嘆した。追いつけても追いつけなくても、ヒトはこんなとき泣くしかないのだ。言葉を失ったときには、泣くということだって一つの表現手段である。

どのくらいの時間、砂丘の頂上で瞑想にふけっていたのだろうか。我々が登ってきた稜線の下の方から、若い女の子たちの明るくはしゃぐ声が

聞こえてきた。振り返ってみると大学生ぐらいの女の子が十人ほど列を作って、こちらの頂上を目指している。わたしが手を振ると、二、三人の女の子も勢い良く手を振って応えた。

マシコ君は十メートルほど先の稜線に腰を下ろし、空になった水のペットボトルに砂丘の砂を詰めている。試合に負けた甲子園の球児と同じように、この地に立った思い出を日本に持って帰ろうというのだろう。

「マシコ君、下から沢山登ってきている。この稜線じゃ、すれ違いもできないぜ。ぼちぼち降りようじゃないか」

「カワサキ君、寝ているんじゃないかと思うほど、そこにどっかと座っていたな。満足したかね」

「あぁ、今日は風の音もしない。あまりに静か過ぎて幻聴が聞こえてきそうだよ」

「水を打ったような静けさというが、砂を敷き詰めたような静けさと言いたくなるな。音が砂にみんな吸い取られてしまうような気がすっぺ」

「砂を詰めていたけど、持って帰るのかい」

「子供の頃の砂遊びを思い出して、遊んでいたんだ。砂の表面は温かいけど、少し掘るとひんやりして気持ちがいい。人生で二度と再びこの砂丘に来ることもなかろうと思ってな」

「この砂は手のひらにしっくり馴染むし、からだ全体で抱き絞めたくなるほど優しいな。俺も沢山持って帰って、自宅の机の上で赤い砂丘を再現して楽しむか」

頂上付近の美しい稜線の形は、我々が動き回ったせいでだいぶ崩れてしまった。足跡も沢山残っている。しかしこれも風が吹けばたちまち消えてなくなり、またもとの美しい姿を取り戻すだろう。

下りは登ってきたのと反対側の斜面を駆け下ることにした。下には紅茶色の砂丘に囲まれ、乳白色の砂を敷き詰めた広い平坦な平面が広がっている。広さは野球場が二つ分ぐらいであろう。紅茶色の岸に囲まれた乳白色の湖と見紛うほど、鮮やかな色の対照を示している。

下りは砂とともに滑り落ちるようなものだ。五分もかからないうちに下まで降り切ってしまった。周囲を砂丘に囲まれ、小さな盆地のような平面に降り立ってみれば、そこは砂丘の上とは全く違う不思議な世界が広がっている。周囲は紅茶色の砂の壁に取り巻かれ、上には青い空が蓋をするように広がっている。軟らかい曲面の砂の壁は、母の胸に抱かれているような安心とやすらぎを感じさせてくれる。

乳白色の地面の正体は何かと、手で触れてみると思ったより硬い。粘土とは明らかに違う。恐らく、地下の水が地表面に上昇し、蒸発する過程で残された石灰質のような物質が堆積したものだろう。乳白色とはちょっと違った白茶けた地面もある。亀甲形にひび割れており、おそらくこれが、水が運んできた粘土ではないだろうか。

この場所も、何十年か何百年か前には、ツアチャブ川の水が押し寄せ、水を湛えた時期があったのである。たとえ乾季になって表面水は失われても、地下に滲みこんだ水は毛細管現象で再び地表に染み出し、植物を育む。

その証拠が存在している。地中から伸ばされた腕が苦悶しているような、立ち枯れたアカシアの太い幹である。現代美術工芸のオブジェのように見えなくもないが、マシコ君は「木の骸骨だ」と言う。確かにそれ

は、葉や枝という肉体を失い、時間が止まったまま、骨だけで立ち尽くしている死の姿である。

木の幹はあまり腐っていない。その上、立ったままの姿であることを考えると、枯れたのはそんなに遠い昔のことではないだろう。太いものでは直径三十センチ以上もある。アカシアが厳しい環境の下で、これだけの大きさに成長するためには、かなり長い年月を要したに違いない。年輪を調べた学者によれば、樹齢三百年を越すものもあったという。しかし南から徐々に進出してきた砂丘が、ついにツアチャブ川の流れを堰き止め、この窪地には水がやって来なくなってしまったのである。

わたしもマシコ君も地面にどっかりと座り込んで、しばらく黙ったまま、奇妙にねじれた木の幹を眺めていた。もし「孤独」という抽象的観念を、具体的に紙の上に描いてみよと言われれば、いまならわたしは眼前に広がる風景を描けば足りるだろう。広い平坦な乳白色の地面のところどころに佇立するそのねじれた幹の姿は、無駄なものをそぎ落とした後の「孤独」そのものに他ならないと思えるのである。

なぜ、これらの木々は白昼夢のように、死んでもなお立ち続けているのか。俺たちはここに根を張り、成長し、緑の葉を茂らせた、それを忘れないでくれと叫んでいるのではないのだろうか。

しかし、何年か先には、これらの木は砂に飲み込まれてしまうか、砂粒のように風化してしまうだろう。そしてこの地にアカシアの林があったことは、我々の記憶からすっかり忘れ去られてしまうのだ。

日の出前にロッジを出発したが、気が付けばすでに陽は中天にある。ソーサスフレイに着き、砂丘を登り始めてから既に五時間近くが経って

いる。ペットボトルの水もあらかた飲み干してしまった。

アレンが首を長くして待っているだろう。この後は、冷たいビールを飲みながら、ぼんやり砂丘を眺めるのも悪くない。風と砂の声を聞きながら、木陰で昼寝をするのもいいだろう。

落日

紅茶色の砂丘をなお赤く染めながら、夕陽が沈もうとしている。ナミビアで見る夕陽はいつも赤く、そしてとてつもなく大きい。日本で見る太陽もナミビアで見る太陽も、見える大きさが違う訳はない。しかしここでは、夕陽は日本より二倍も三倍も大きく感じられる。

夕陽を背負った砂丘は、影絵のように黒く沈み、その稜線が、茜色の雲がたなびく空を波打つように縁取っている。漂う雲は、今日一日の神経と筋肉の疲れを解きほぐすような、心地よい色に染まっている。もう少しで、その黒い縁取りに夕陽は口づけするだろう。小高い丘の上に立って、沈む夕陽を眺めていると、地球が宇宙空間を静かにきしみながら回転している音が聞こえるようだ。

ロッジ近くの砂礫の平原にそこだけ孤立した小高い丘の一群があり、

オベリスクのような岩塊が頂に記念碑のように屹立している。そこで日が沈むのを眺めようと出かけてきたのだ。

アレンが砂の上にロッジから運んできた半畳ほどのテーブルをセットしてくれた。テーブルクロスがまがりなりにも敷かれ、ナイフとフォークも用意されている。ローストビーフとポテトサラダ、レタスに巻かれたスモークサーモン、サンドウィチ、それに野菜スティックもある。我々のために砂山の上に特設の出張バーを開設したという訳である。

グラスのシャンペンの泡が弾けて、頬に当たった。マシコ君の頬が赤いのは、夕陽のせいばかりではなさそうだ。もうここで呑みながら、一時間以上も日が沈むのを待っているのだ。

もうすぐ日没だ。影はどこまでも深い藍色の闇に沈み、光は赤い帯となって砂礫の海を染めている。棘のある小さな潅木の茂みも砂丘の波打つような斜面も、仄明るい闇の中でいまは溶け合い、一つひとつの形は判然としない。目の前にあるのは空と太陽と砂礫の大地だけである。

丘を渡る風が、お前はここへ何をしに来たのかとささやいていた。頭の中にはいくつもの断片的な感慨が浮かんだり消えたりしていた。この瞬間、この眼前の風景に立ち会うために、ここへ来たのだといまは答えるしか言葉が見つからなかった。しかし、茫漠とした沙漠の広がりをあきもせずに眺め続けているうちに、脳裏に去来したいくつかの断片を書き留めておきたい。

例えば、「生きる」ということだ。

目の前の沙漠は地表を覆うものとてなく、大地の歴史をそのまま見せているように、ここではすべてが飾り気を排除したむき出しの存在だ。すべての生物は、苛酷な環境の中で、

精一杯ぎりぎりの生を生きている。
ごまかしは許されない。人間だって同じことだ。自分がいかに思い上がった考えに取り付かれていようと、沙漠の中では一人の人間は一握りの砂粒にしか過ぎない。
さらに、「関係」ということだ。すべての生物は関係の連鎖の中で生きている。そのようにしか生きられない。それはジャングルの中であれ海の中であれ、この地球上どこでも同じことだ。しかし、沙漠の中では、生きるための仕組みや過程が、透明なケースに収められた機械式の時計のようにはっきりと見える。文字盤の針の動きは、一つの歯車が次の歯車に力を伝え、また次の歯車にといった「関係」の上に成り立っているということが、目の洗われるような明確さで分かるのである。

二週間に渡るナミビアの旅は終わろうとしていた。明日は三百数十キロを走って、振り出しの首都ウィントフックに戻る。もう危険な場所はないし、交通量も首都に近づくにつれ徐々に増えてくるだろう。セスリエムからほぼ真東に百キロほどダートの道を走れば国道B1号線に出る。それを北上すればウィントフックはもうすぐだ。
ウィントフックをレンタカーで出発し、ナミビアの大地に乗り出してから、走行距離は既に三千五百キロ近くになる。北海道の宗谷岬から鹿児島の佐田岬までの距離を越える道程を走ったことになる。
ナミビアの半分近くを、レンタカーで這いずりまわった二週間であった。ナミビアの風土を一言で表現すれば、乾燥ということに尽きる。しかしこれを逆の面から眺めてみれば、豊かな太陽の恵みがあるということである。気候も温暖で、国の主要産業のひとつである牧畜は、まだまだ高い潜在力を持っていることが十分覗われた。

もうひとつ深く印象に残ったのは、人口密度の低さである。アジアモンスーン地帯では、どんな辺鄙な奥地へ入り込んでも、人間がどこからともなく湧き出してくるように姿を現す。

ナミビアの人口密度は一平方キロにわずか二・八人である。ナミビアはモンゴルに次いで世界で二番目に人口密度が少ない国なのだ。ナミブとは「人のいない土地、何もない土地」の意味なのだという。日本は同じ面積に三三七人がひしめいている。この面からもナミビアは潜在力を持っている。

またダイヤモンド、ウラン、亜鉛、銅、蛍石、金、銀などの鉱物資源にも恵まれており、外貨収入の半分近くを稼いでいる。これらの資源を利用した国内製造業を起こすことで、資源の高付加価値化を模索する動きも始まっている。

他のアフリカ諸国のように民族対立による紛争もなく、政治的にきわめて安定していることも好条件だ。独立以来一貫して政権を担当している南西アフリカ人民機構が、経済自由化に基づく国造りを積極的に推進している。およそ三十の言語を話す十の民族が、まがりなりにも国民的和解の上に、平和裡に共存することに成功したのである。

解決しなければならない課題も多い。豊かな鉱物資源や水産資源は、ほとんど外国資本の手にゆだねられている。上位一割の裕福な国民（多くは白人）が国民所得の約七割を享受しているという所得格差も大きな問題だ。

しかしナミビアはすばらしい国であった。ナミブ沙漠やエトーシャ国立公園に代表されるような豊かな自

然は、地球に残された数少ない楽園のひとつであることは間違いない。

ヒンバの人たちがこれからどうなるのか、野生の動物たちは生き延びて行けるのか、気がかりなことがないわけではないが、この国の明日を期待し、祝福したいといまは強く思う。

荘厳な最後の燭光を放つと、太陽は音もなく砂丘の向こうへ沈んでいった。その瞬間、丘の上を一陣の風がサットと吹き抜け、あたりは急に暗くなった。西の空を茜色に染めた雲は瞬く間に力を失い、深い群青色の天蓋の

ような空に星が一つ瞬いているのが見えた。　完

川﨑光洋

初稿　二〇〇五年十一月吉日
改訂　二〇二〇年七月　吉日

（注）　二〇一〇年十月に駐日ナミビア大使館が東京に設置された。日本は二〇一五年一月、ウィントフックに大使館の仮事務所を設置、同年七月には本事務所を開設した。